

川柳塔

平成十八年九月一日発行
月刊
創刊大正十三年 通巻九五二号



日川協加盟

No. 952

九月号

第12回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月8日(日) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 生 駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成17年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成18年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金 剛 中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「さぷりせんりゅう」 新 家 完 司 氏
兼 題 「やわらかい」 (兵庫) 長 浜 美 籠 選
「遊 ぶ」 (奈良) 坊 農 柳 弘 選
「 白 」 (鳥取) 鈴 木 公 弘 選
「 奥 」 (青森) 福 士 慕 情 選
「ド ラ マ」 (和歌山) 古久保 和 子 選
「ま つ り」(事前投句・9月5日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後5時終了予定

会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇親宴》

と き 同 日 午後5時半～7時半
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛 城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付)

◇事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、
9月5日(木)までに本社事務所宛お願いします。

◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い
致します。

◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々
のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川 柳 塔 社

夜市川柳二十五年

河内天笑

昭和二十年七月九日の堺大空襲で市の中心部は殆ど壊滅状態となり、内川に隣接した私の生家は跡形もなく消失した。その当時までチンチン電車の阪堺線は「宿院駅」(与謝野晶子の生家前)より「大浜支線」が西へ(大阪湾方面)約二キロ余り分岐して、次の「川尻駅」を出た辺りからは南海本線を跨ぐため高架となり、内川を越えた高架の天辺に「龍神駅」があつて南海本線の龍神駅と連絡している。更に西へ旧二十六号線を越えたところでは高架は路面電となつて演舞場のある「大浜駅」終点となる。松林の美しい大浜公園一带には、全国大会も開かれる相撲のメッカあり、野球場ありところに料亭がある一大リゾートエリアであつた。

毎年七月三十一日午後六時きっかりに大浜公園の空に「ドーン」と打上花火が上がると、それを合図に大浜海岸一帯で堺大魚夜市の「競り」が始まる。遠浅の為、大きい船は海岸に寄り付けず沖に碇泊。伊勢、四国、和歌山、瀬戸内等から運ばれる魚を小型漁船が海岸へピストン運転。法被に鉢巻姿の鰻背な若衆が大奮闘、将に夜市を演出する祭りの主役だ。南海沿線は元より、近隣の町や村からこの夜とばかり押し寄せる人の波は夜通し尽きることがない。競りの現場へ辿り着くのも一苦労でこの道も人でごった返し、カーバイト、焼き栗、いか焼きなどの

匂いや砂埃を抜けて、裸電気が目映い競り市に出る。

少々堅苦しい家でもこの夜ばかりは門限なしの咎めなし。それに翌八月一日は漁師の神様「住吉大社」のお祭りや、われわれ出島の漁師町は無礼講の夏のひと夜を満喫するのである。

もう海が見えなくなったプラットホーム 天笑

高度経済成長期に入つた昭和三十年代後半から美しい砂浜はコンビナートに浸蝕され、大和川河口以南の海岸は見られなくなり、コンクリートの堤防とテトラポッドに囲まれた工業団地へと姿を変えた。

真夏の夜の風物詩「堺大魚夜市」を何らかの形で残すべく昭和五十七年六月、川柳堺句報に「夜市川柳」欄を設け今年の六月で二十五年度に入つた。たくさんの中間の熱に支えられ、延べ三百人のすばらしい選者の先生方に助けられて二十五年度を迎えられた事は誠に感激の至りであります。私のセンチメンタリズムを川柳と合体させる事によって共感を得、皆様のお力で夜市川柳を満二十五歳に育てて下さいました。生ある限り夜市川柳を続け皆様と楽しんで参りたいと思います。

自選句

冷酒一献水茄子二つ夏旨し

天笑

音読をして脳みそに風送る

天笑

スーパで暗算をして呆け防止

天笑

鏡見て笑う筋肉鍛えよう

天笑

思い切り丸一日を怠けよう

天笑



座右の句

悪がきがみんな揃った村まつり

(天笑)

私の句

母は近く観音様の顔をして

笠井欣子

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「秋祭り・高取」

■巻頭言 夜市川柳二十五年	河内天笑	(1)
スポーツと川柳	仁部四郎	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (21)	木津川 計	(53)
自選集		(54)
水煙抄	奥田みつ子	(58)
■エッセー 僕はミラクルマン	高瀬霜石	(80)
愛染帖	新家完司	(81)
誹風柳多留 一篇研究 13		(84)

スポーツと川柳

仁部 四郎

「近衛師団が天皇の閣兵を受けて出征した」と書けば、戦前戦中の新聞の見出しになるのだろうが、ドイツで開催されたW杯サッカーへの日本選手団の参加は、テレビや新聞でずいぶん大仰に伝えられたと私は思っていた。

期待が大きすぎたというか、メディアが騒ぎすぎたのか、試合の結果がよくなかったたので、サッカーをめぐる世論は、監督の交代や某実力選手の突然の引退のニュースによって更に複雑な展開をみせるのかもしれないし、アレヨアレヨとばかりに潮が引くのかもしれない。川柳の目で見通しが立つだろうか。

スポーツも川柳の材料に大いになるわけだが、技術的論評の材料にするはずはなく人事諷詠であることは論をまたない。

『三省堂現代川柳必携・田口彦彦編』には、スポーツという大項目があつて、ゴルフ、サッカー、水泳、スキー、スケート、スポーツ体操、卓球、テニス、バドミントン、バレーボール、ホームラン、ボクシング、マラソンメダル、ラグビー、ランニング、野球と各五句ずつが紹介されている。ヨットは「趣味・レジャー」に入っていて、相撲は「職業」のところに「力士」

檸檬抄「法律」……………川上大輪・松本文子共選……………(86)

「慕う」……………宮崎ヒサ子選……………(88)

一路集「宿題」……………早川盛夫選……………(88)

「まだ」……………古手川光選……………(89)

初步教室「長い」……………三宅保州……………(90)

秀句鑑賞「同人吟」……………米田恭昌……………(92)

「水煙抄」……………岩佐ダン吉……………(94)

八月本社句会……………(96)

各地柳壇(佳句地十選／原賢)……………(100)

柳界展望……………(115)

九月各地句会案内……………(116)

■編集後記(ひとこと／関本かつ子)……………楓葉・恵子……………(118)

座右の句

物差しをかえて幸せごっこする

(緑良)

私の句

流れゆく亡夫の思い出遠花火

松尾和香

が入れてある。

そのような分類は、編者の裁量であるが、スポーツ評論家には異見のある人もあろう。

私の裁量であつてある例句を紹介しよう。

ボール蹴るだけに世界が熱くなる

金子すすむ

スケートにしばらくひまな右の足

高橋 散二

スポーツの汗で流している虚栄

福岡 童雄

妹と打つピンボンの玉の音

門脇かずお

ババ年休ママさんバレーベスト4

仁部 四郎

ジャンケンで打順を決める草野球

山口 春子

八勝七敗の胃の腑にとどくチャンコ鍋

田口 麦彦

川柳が、いちばん融通無碍な文学的表現の手段であるという論には大方の賛同がえられていると思うのだが、スポーツに題材を求めてもその特質は十分に発揮される。その種目にハマっている人からは「恨まれる」ような句もあつてよいわけで、スポーツの句だからとて、「清く正しく明るく」とは限るまい。



河内天笑選

鳥取県 佐伯やえ

生きた証に絶滅の花植えておく
花たちはいつも私の外交官
日曜日子らの餌食になってやる
風情ある言葉に感電してしまう
のこり火をおだてに風がやってくる
浦島さんに逢う日髪型変えていく

京都市 都倉求芽

秋彼岸わたしの曼陀羅いわし雲
見つかれば死むかでに生まれたばかりに
染まらない自信朱色の友もいる
幾重もの地層に過去のキナ臭さ
シャボン玉浮かれた順に消えていく
歯車をゆっくり二人して回す

高槻市 大崎侑子

君が代は飾らず歌え始球式
合唱の醍醐味知ってから嵌まり
遺産分け姉妹の仲も分けてくれ

選り分けて今年も減らす年賀状

何度でも聞いて飽きないのはひばり
真っ先に自分を守る災害時

堺市志田千代

大阪をくまなく探す旅もある

梅干しが甘いと祖母を嘆かせる

肩ポンと叩いておくる更衣

ケーキでもいかがつんつんお嬢さま

惜しそうに妻へ三杯目のお酌

三毛ちゃんに死んでは駄目と泣きついた

唐津市丸晴翠

惚けたふり子も試されることに慣れ

あれこれのドラマに満ちた再生紙

脚腰にノックもせず未知の老い

太陽の愛が足りない野菜達

腑に落ちぬことはパソコン様に聞く

免許ない妻が動かす火の車

吹田市 山 本 希久子

夏瘦せの背を追いかけてくる残暑

たった一人の母へ片手は空けてある

五山送り火未練断ち切る炎なり

孝行を死語にはできぬ戦中派

バラ色の嘘とふんわり雲に乗る

古稀の恋血圧計が気にかかる

出雲市 園 山 多賀子

阿と咩が同じ傷を庇い合う

独りいて電話のベルに身構える

蹟いた石に私を覗かれる

本能に負けてはならぬ愛一途

掌で切る豆腐には疑念なし

放浪癖私の踵知っている

橿原市 安 土 理 恵

とりあえず飲もう意見が咬み合わぬ

軽く手を振って別れてそれっきり

かもめ啼く哀しいことがあるんだね

フルムーン愛の満ち欠け月の満ち欠け

あの頃に戻ろう海を見に行こう

なりゆきでちよつとあぶない舟にのる

鳥取市 植 田 一 京

心配が次々あってほけられぬ

或る日から内緒ないしよが溜りだす

追いかけた夢が寂しい風くれる

何もかも中途半端なままに昏れ

崖つぷち翔べるチャンスであつたかも

浴衣着て螢を追った日の遠く

和歌山市 上 地 登美代

パーフェクトに生きようなんて所詮無理

私さえ我慢すれば元の鞘

ふる里の水車小屋から虹が出た

隣のこと全部知ってる片田舎

尺取虫のかたちで少しずつ進む

心喰い虫人の心も食い潰す

大阪市 升 成 好

口下手で敵も味方もつくらない

文章は下手でも日記書いてます

正論を吐く毒舌は許される

百歳は聞かれなくても歳を言い

病名に遂に老人性がつき

一合を持て余してる病みあがり

松山市 古手川

騒音だけど許してやろう蝉しぐれ

靖国が火種英霊眠れまい

大洪水鵜もしばらくは骨休み

優し過ぎふとやぶ医者かとも思い

逆縁を運命などと軽く言う

道端にポイポイモラル捨ててある

光

宇部市 平田実男

見える糸よりも見えない怖い糸
ちゃんづけで呼んで出て来たのはペット

あげ足を取り合い二人とも転げ
ナース服天使の仮面かも知れぬ
新聞でアリコテレビでまたアリコ

美祿市 安平次弘道

潮時を逃がし自叙伝書き直し
カレンダーに印夫婦の秘密です

関係はないが話は聞いてやり
言いたいことあったが言えぬ突然死
尊厳死にしては気になるデスマスク

東かがわ市 川崎ひかり

現況届来て思い出す誕生日
良い事が聞こえるように耳そうじ
老斑と同時進行物忘れ

隠しても性格出てる怒り肩
ルノワールも志功も肥えた人が好き

東かがわ市 池内かおり

へそくりで手品のように生きてます

健診に備え自分自己管理

諦めて踵の低い靴を履く

熟れ頃になるとカラスを目の仇

晩酌で毎日火花揚げている

東かがわ市 原賢

真つ当に生きて明日を信じきる

ご破算にするには星がきれいすぎ
世話されて妻より長く生きるかも
出し切った汗の滲んだタオル干す
腹八分言葉八分で生きてます

東かがわ市 成重放任

ひがむまい隣はみんな良く見える
妻の留守一人侘しい手酌酒

税上げて他国へ持つて行く政府
僕よりも妻のサイフが大きいな
惚れること終えてそろそろ惚け始め

東かがわ市 伊勢八重子

言い訳は聞かない事にして別れ
のんびりと過去取り戻す駅がある
どん底の汗に学んだ人間味

気にしない星占いの軽い嘘
回り道話尽きない星明かり

東かがわ市 神保坊太郎

嫌なことときかないことにして黙る

こけそうな時に掴まる人がおり

あじさいの心変りを責められず

色づけは吾が物でなしサクランボ

つまらない奴だと貧乏神家出

東かがわ市 清川玲子

交わりばえせぬがも一度ぬる鏡

横顔にたしか前より高い鼻

覗いてと言わんばかりの胸のあき

少年の心の闇が覗けない

しょうぶ園色とりどりの美女ぞろい

松山市 宮尾みのり

輪の中に居場所が無くてマイペース

ほっとした油断を嘲うロスタイム

どの色も女にやさしシャボン玉

美人ではないがいい歳とっている

ワールドカップ日本の甘さ思い知り

松山市 高橋宏臣

ヒロシマの傷染め抜いて夾竹桃

八月を待つ青黒い富士の貌

諸行無常鐘は平和がとても好き

都市砂漠金の匂いのする景色

金持ちになろうなろうと悪さする

大洲市 中居善信

遮断機が下りる運命だと思ふ

トマト完熟いっぱい愛が詰められて

南無大師僕は真言宗徒なり

仏とも鬼とも僕の素顔です

多寡が五反の田畑にしがみついて生き

西予市 黒田茂代

汗かいて鬱も迷いも流し去る

水すましの軽さ水面のバレリーナ

来客を待てず朝顔疲れだす

思ひ出の絵もかげろうの向こう側

八月の花嫁へ着る緋の晴れ着

高知市 小川てるみ

幸せな日々にもあつた孤独感

微笑みを返すチャンスを見失う

前頭葉あの手この手の活性化

温度差をつめる思案をして疲れ

ラベンダーの癒しを貰う旅に出る

高知県 赤川菊野

半世紀まだ空襲の夢を見る

人間の命の価値に上下なし

少子化や今に日本は無人島

ご先祖はモンゴロイドか蒙古斑

土佐弁でまくり立ててる超美人

高知県 小澤幸泉

夏祭り見知りの顔がまぶしすぎ

手持ち時間まだあるようで今日終る

ブランコがゆれて夜明けの恋実る

残り火を消さないままに時が過ぎ

もの言わぬただひと言で今日が暮れ

唐津市 樋口輝夫

山の神隣の庭をはめたがる
荷崩れをしない程度の夫婦仲
恋人も杖をついてるランデブー
貼り薬背中に貼れぬ独り者
手こずらす生徒が教師磨いてる

唐津市 宗水笑

野仏に信心抜きのワンカップ
他人様の引き際を得た助言
わがままの持病ひきずり老い進む
上様になれる日もある領収証
煙草ピタリやめた夢みて目が覚める

唐津市 山口高明

国防も国技も外人さん頼り
秘蔵した写真独りで見る果報
酒飲んで不貞寝をしたい時がある
死ぬしぬと言うたお方と朝御飯
顔形変えて人生やりなおし

唐津市 久保正剣

音無しの構えが続くにらめっこ
一律に同じベッドがあるホテル
気がつけば計報の中の八十五
キャバクラにあっけらかんと群れるギャル
営業用のメイク仕上げる夕化粧

唐津市 井上勝視

如才ない初対面には身構える
お茶褒める孫の彼には気を許す
新聞とテレビで一日暮れる老い
法律に義理人情はほっとかれ
虚勢崩れごまかし効かぬ脚と腰

唐津市 坂本蜂朗

様付けで呼ぶ病院で待たされる
様付けで呼ぶ病院で脈乱れ
様付けで呼ばれ私のことですか
様付けで呼ばれ返事をせぬ患者
様付けで呼び入れすぐに追い出され

熊本市 永田俊子

九十になってごらんと独り言
平均年齢こえて年金丸儲け
背なの荷が軽くなりゆく物忘れ
遺言書にまた追加する忘れもの
自分のうしろ姿に気づかなかったミス

熊本市 高野宵草

不要品未練を誘う顔で居る
フルコースふと味噌汁が欲しくなり
先生になりたいうちはいい娘
束の間の夢ありがとう外れくじ
子を殺す国と堕ち果つ大和魂

熊本県 岩切康子

見覚えの木が無く惑う家探し
不覚にも自分の足に熱湯落ち
高齢講習十年若いと喜ばせ(自動車免許)
時々は鋏を握って汗をかく
甘い物朝のみにして自制する

砂川市 大橋政良

よく喋る女が不意に出す本音
雑兵のひのき舞台を考える
リストラという重い荷をどうしよう
真夏日のひまわりの吐く黄の炎
安楽死のように手袋捨ててある

弘前市 高橋岳水

鳩尾が晴れぬ中間管理職
相槌を打った時から縛られる
独りでは生きてゆけないから群れる
赫々の落暉へ明日を予約する
九十九折りまだ年金に届かない

弘前市 宮崎ヒサ子

持ち越した春の宿題少しずつ
カッコーの聞こえる側の窓開ける
つゆ時の台風逸れてほっとする
天候不順まだ長袖が離せない
飛び込んでくる新緑を抱きかかえ

弘前市 相馬銀波

この次の雲に気になる雲がある
司会者の私見玉虫色にする
駅裏に自分を捜す街がある
披露宴想い願いの花束に
シナリオの中で自分の道を読む

弘前市 高瀬霜石

向かい風なんなくかわす丸い鼻
しあわせな人から絵手紙が届く
代償を求めたことがない笑顔
充電完了すぐに放電したくなる
助手席に今日も貧乏神がいる

弘前市 今愁女

地の底で研いた声の初蟬よ
空蟬の爪の先まで透きとおる
夏は夏の闘いがあり裏の雑草
セールのベル午後の憩いを掻き回す
パソコンがペンだこ知らぬ男にす

弘前市 福士慕情

不本意な風を背中で受け止める
真つ黒な手帳を見せて断られ
町内のおまつりというバーベキュー
熱帯夜布団乱れるだけ乱れ
台風の通った道で泣くりんご

弘前市 櫻庭順風

百二十五年シャンデリア照らし次ぐ

堂々と祝賀に参加する津軽

テナントも腕を振っている料理

十八年を探しあぐねている津軽

会場で会わずトイレで会う奇遇

弘前市 須郷井蛙

助手席も一緒に標識見て進む

耕せば宝石になる土が好き

カルチャーで心に酸素補給する

靖国が銃より怖く見える国

医者通い治療費よりも交通費

弘前市 岡本花匠

妻の喜寿よろこび祝う午の会

一位の実ふくみ笑顔のわらべ唄

青紫蘇を添えて夫婦の冷ややつこ

豆蔵の津軽一円情に泣き

白神のまほろばに生き千年樹

黒石市 相馬一花

返信のかしこ代りにキスマーク

宿帳に妻という字を細く書く

妖艶なポーズで審査狂わせる

仙人が乗って居そうな雲の峰

とばかりでも無駄だ認知を迫られる

十和田市 阿部進

願い事余りに多く絵馬つかれ

そつとしてやるのがほんまよさそうだ

まわりの人やさしく長生きできそうだ

小銭なく募金箱前通り過ぎ

猫柳せせらぎ聞いて育ちます

平川市 小寺花峯

おつとつと銚子を上げているオチヨコ

正装が暑さに飛んだクールビズ

言葉のむ風を知ってる森の顔

一病があるから明日へ湧く希望

紫陽花の顔がほころぶ梅雨の入り

さいたま市 星野育子

六十五割引無料フル活用

夜そつと大人のドリルやってみる

戻りたい戻れないから明日に向く

喫煙の医者に禁煙勧められ

褪せぬ間にやり残しある夏薊

さいたま市 八田敏

もうやめる宣言いずこ菊作り

菊鉢の大きさと数順に減り

花作り団地に四季を呼ぶつもり

大小の菊鉢五十老いの秋

菊写すだけにデジカメ買い揃え

日高市 根岸 方子

東京都 長谷川 康子

給食の魚料理に骨がない
包丁の音が乱れる主婦が病む
変わりなしが一番いいと医者が言う
法変わり税が老人追いつめる
健康の秘訣毎日しじみ汁

柏市 河野 桃葉

水滴に夜の静寂を破られる
近道はよそう地球は丸いから
お隣はガーデニングで仲が良い
衰える視力に派手な服を着る
夕映えに風を孕んだ帆曳船

柏市 永峰 宣子

行政のずさんを嘆かせる偽装
せつかくの農葉流すにわか雨
隣から雨の知らせが飛んで来る
水色の水着が好きな珊瑚礁
足の筋痛み覚えて老い進む

佐倉市 岡井 やすお

国連の事務総長はお休みか
サッカーをやるのは監督ではないよ
大関が溢れて俺の休む番
この国土に多過ぎないか一億は
敬老が薄れ子づくりハイライト

引き算はしない楽天家の血筋
観たいものあつて早目の晩ごはん
一パイのウーロン割りでよく眠れ
初夏の風ノースリーブで闊歩する
短かめにカットしました夏間近

東京都 小川 賀世子

花とワイン熟女のツアーてんこ盛り
要るものは要る家計簿はつけぬ主義
窓ガラス拭いて明日の景見てる
自画像にまたひとつ皺足している
土砂降りにしがらみひとつ流してる

東京都 岸野 あやめ

花群れの中にひときわ目立つ白
見ててよね僕は真つ直ぐ伸びるから
一キヤラのダイヤが守る夫婦仲
ちよつとだけ虫も食つてるよい菜つ葉
サッカーの敗軍の将兵語る

東京都 清原 悦子

読み終えて両目に感謝して眠る
真剣に語る瞳に嘘はない
団欒のひとつとき花も喋り出す
やれやれと思つた時の晴れた顔
履き慣れた靴がいつもの場所にある

国分寺市 野崎 勝

図書館の静けさが眼を重くする
逢う度に友の病気が増えていく
雑草の芽に根性を喰われる
昨日よりいい日信じて目覚めたい
いろいろとあつて余生がまた楽し

八王子市 播本 充子

しおらしくしてると饅頭が届く
交番で聞いた美味しいラーメン屋
おしゃべりがしたくて泊る四人部屋
ジグザグに歩く私も阪神も
軽量化男の骨と傘の骨

武蔵野市 亀井 円女

いやなこと全部スライス丸めてポン
夫も逝き返上しました黒子役
孫それぞれに翔ぶ子光る子弾ける子
腹の底からいつも笑える果報もん
女の業は女の証し少しはね

横浜市 菊地 政勝

自惚れの鼻本番で低くされ
追い風と気づいていない自己過信
飛蚊症老化のせいといなされる
介護者が先に倒れていく悲劇
千万円預けて天と地の格差

横浜市 小野 句多留

梅雨期のあじさい寺のローヒール
入園児言葉の知恵をつけて来る
テポドンのかまって欲しい猫じやらし
自惚れの館に入る司法の手
銀ブラに昔ムカシを語る癖

富山市 島 ひかる

沙羅の花落ちて見上げる夏の空
八甲田山夏山に悲話語り継ぐ
山小屋に姉妹の揃う登山靴
やまなみにヘリコプターの音響く
英雄にレッドカードが突き刺る

可児市 板山 まみ子

雨もよしつん読少し減らす時
不器用に強がってみてああしんど
歳なのに丸くならず売る喧嘩
カラオケに淡谷のり子をまだ歌い
捨てることであれば体楽なはず

静岡県 田 獏 杏

筋通す男の意地を高く買う
左遷地の地方喜ぶ妻が居る
眉を書く鏡の前の生返事
玉砂利を総理が踏めば騒ぎだす
好きだから余計意地悪したくなる

大山市 金子 美千代

滋賀県 中 宗明

お誘いを断り主婦の梅雨晴れ間
じゃぶじゃぶと洗い流した梅雨の鬱
しい人で完璧すぎて距離を置き
旅帰り少しやさしくなれそうな
負け惜しみかしらセレブでなくてよい

大山市 関 本 かつ子

見上げてはうちわが止まる大花火
天下る内緒話を知る机
安楽死出来ない犬を抱く涙
褒められもけなされもする同じ医者
無愛想なレジを避けてる客の列

大山市 吉 田 幸子

少年の心も跳ねるバチさばき
ウィルスが同居夫婦の共倒れ
肩はぐす友の温さがジーンと浸み
あかすりの土産話に乗った旅
お蒲団の上げ下ろしにも知る元氣

愛知県 早 川 盛 夫

無免許で妻を運転しています
百歳はそうめずらしい事でない
定年後妻の指図に逆らえぬ
いい事が続くと怖くなってくる
化粧壁落ちて醜い肋骨

乱れた世うまく生きるも達人だ
気休めの焼酎飲んだ休肝日
一人寝で淋しさいやす枕抱き
枕辺に元氣な頃の妻が立ち
路地裏でいきなり出会う債権者

京都市 高 島 啓 子

雨続く心配事は特にな
裁ち切ったままでしまつてある浴衣
鼻のあたまいまたそがれていくところ
子離れをしてから海が凪いでくる
明日のこと解らないけどまたあした

亀岡市 井 上 森 生

天空の余部鉄橋ご卒業（余部鉄橋見納めツアー 4句）
腹一杯鉄橋を船から列車から
トビウオが海面飛翔でお出迎え
島の肌が古代地層の博物館（香住港）
古稀の今ばかりの肩書き川柳使

長岡京市 山 田 葉 子

書けなかった思いゆつくり余白読む
節目には道草もよし友が増え
遠くても母に届いた叫び声
梅雨明けはトマトの赤にきいてみる
囃すだけでは少子化の波とまらない

大阪市 川原章久

楽しみな花火水さす雨男

西からの長途の空を来る黄砂

親が子を子が親殺す世の歪み

夜遊びの喧嘩でタマは傷だらけ

運試し一億の夢これつきり

大阪市 鶴田遠野

哀しみは測らぬ恋の温度計

早朝の散歩で今日を組み立てる

あの方の名前聞いても熱くなり

一度なら許してあげる白い嘘

いつの日も予約不要で待つ貴方

大阪市 古今堂 蕉子

どこへやったお前知らんかといつも

蹴られずに人の恋路をじゃましたい

考えている顔なのか寝てるのか

踊り食い余り好きではありません

甘えるのがうまい男の蜘蛛の糸

大阪市 前 たもつ

W杯審判光る日本人

さつと振り向く訓練してる風呂の中

本物はこんな値段で食べられぬ

ケイタイ無用わたし定年ニートです

海の日に生れやっぱ夏が好き

大阪市 川端 一步

原爆忌敗戦日記繙いて

年金が減ると人間ケチになる

ただ酒は飲むのが父の遺言状

定年から回転軸は妻になる

美しい言葉拾った朝の本

大阪市 岩崎 公誠

新品と書けば売れない骨董屋

追伸に注文多く荷が重い

六桁の暗証数字すぐ忘れ

一病と仲良く過ごし恙無い

裏側で手を絡めあう悪の蔓

大阪市 大川 桃花

いくら遠くへ飛んでも母の掌

走り書きするにも辞書が離せない

なにもせず半分すぎたカレンダー

自信あるらしい背中を見せる服

半分は先に聞き出す古い師

大阪市 池上 清治

遺産分け採めないように使い切る

自衛隊無事帰国ならおめでたい

音符見て歌えるならば楽しから

涙そうそう りみが歌えば泣けてくる

七三に分けてた頃はもてなんだ

大阪市 津 守 柳 伸

現役で過せる幸を旅ごころ

朝風呂に浮く連休のリラックス

太陽がじつとさせない苦勞性

飽きるほど食べる鰻の土用まえ

シソジュースしつかり飲んでいる元氣

大阪市 津 守 なぎさ

青青と波打つ稲を見てあきず

漁火を眺め深夜の露天風呂

入道雲水平線にあるパワ―

大洪滞横のクルマは何してる

旅先のタクシー優し歴史説く

大阪市 松 尾 柳 右子

しょうぶ園俗世界から幽玄へ

孫子来る爺婆競うお献立

一にい三体操かるく旨い飯

献立に冷蔵庫とにらめっこ

不眠症やつと寝つけば電話鳴る

大阪市 神夏磯 典 子

風鈴に惹かれ抜け出た迷い道

隣には大きな犬が居てくれる

お葉が大事ときには妻よりも

長生きはしたいが空気まで汚れ

泡立器わたし一人の世界です

大阪市 小 糸 昭 子

咲き誇る花にも寿命やってくる

筋通る話を聞いて一歩引く

買ってきたお菜に我が家の味を足す

白い服カレーうどんが胸に飛ぶ

素人の駐車違反は厳しいぞ

大阪市 町 田 達 子

辺りのもの皆駆足で行き来する

押入の整理もやつと済みました

自分の歳おもしろいこれ氣が急ける

体調が悪い少しはゆったりと

レガッタでも見よう大川縁を行く

大阪市 清 水 絹 子

みるだけに食欲店の蠟細工

情報のに漂う高齢者

見ればみるほどさすが京都の舞妓さん

バスツアーもひだりもわらべ顔

総裁も人の子偶のミスぐらい

大阪市 津 村 志 華 子

虚勢張る背なに孤独の風が吹く

かもめゝる潮の香りものせて来る

夏野菜朝露つきのクール便

普段着で気軽に旅の人となり

瀬戸内の小魚明日はみりん干し

大阪市 板東倫子

大阪市 小泉 ひさ乃

十六歳昔は少年航空兵

殺伐とした事件続いて梅雨に入る

聞き飽きた言葉民主主義平和主義

勝ち組も負け組ももう草臥れた

怖いけど乗らねばならぬエレベーター

大阪市 渡部 さと美

阪大耳鼻科三食付きの絶景よ

病室ひまよく囁むけいこして帰り

サッカールの欧州勢の面がまえ

これほどの字画をなん度夫の名

世話やきのうるさがられて当てにされ

大阪市 小谷 集一

悔いはないですと精一杯の嘘

清濁を合わせて飲めばほろ苦し

焼き芋を半分こしてお茶にする

さりげなく息子が嫁の肩を持つ

白寿まで賞味期限を引き延ばす

大阪市 安達 はじめ

歩で終わる人生もよし花吹雪

花時計に燃える心を覗かれる

方便の嘘多くなる老いの罪

守らない針千本の山いくつ

父と子に世代を超えた血がかよう

諦めたはずが座右の句に出会い

苦から逃げたら弾まなくなつた毬

いつも駄足宅配便の縞のシャツ

物語盛上げているナレーター

話好き今日を狂わすスケジュール

大阪市 岡本 久峰

野垂れ死にして事終る蟬しぐれ

橋龍が可もなく不可もなく消える

隣国は広い国土を持つくせに

武力無き外交もみ手するばかり

菱富のウナギ一匹平げる

大阪市 中村 叡子

梗塞の病に煙草ぶつとやめ

ニートの子母は送金止められず

大相撲世界平和の四股を踏む

嘆かわし何故親が子を子が親を

ジージャンの娘すだれのような穴

大阪市 井丸 昌紀

携帯でころころ変わる待ち合わせ

歯が浮くようなお世辞覚えて おとな

僕にだけ弱みを見せてくれた父

石垣が城のロマンを語り出す

先祖代々女に甘いDNA

大阪市 福岡末吉

前世はさておき善と自負しきり

談笑の合い間を駆ける国訛り

事欠かぬ約束反故に病む時世

詫び上手見込まれ掴む社長の座

どこまでがご意見なのか出しゃばりか

大阪市 近藤正

年寄りの臍もかじるといふ政治

ノウハウをニュースで知った模倣犯

ケアハウス心を結ぶわらべ唄

絞るだけ絞った挙げ句消費税

五年間よくもブッシュの言うままに

大阪市 奥村五月

もう少し痩せと肥満の医者が言う

見た事もない神仏にすぐ頼る

探偵を雇うほどでもない浮気

丁寧な妻のことばは要注意

だらだらと終り知らない父の酒

大阪市 伊藤博仁

保育所のかげ手土産にひ孫きた

一周忌こなくてもよいメールくる

メールには絵を使うなどはがき出す

一時をすずめと遊ぶパンの耳

容態に揺れ動いてる留守電話

大阪市 中村れんげ

一瞬を燃えてハイビスカスの赤

会える日は昔ときめき今動悸

人の縁炎の縁をもう一度

豆の蔓どっちに伸びよ天仰ぐ

人間という天敵に病む地球

大阪市 熊代菜月

里山を秋が忙しく駆けおりる

惚けんよう膨らませてる好奇心

阪神が勝って我が家は大出費

自己主張燃えて私となかなかまど

音たてて有相無相を滝がのむ

大阪市 星野きらり

来年もまた会おうねと衣替え

雨しとど急げ急げと靴の音

美味そうな顔へするりと心太

腐葉土が花咲かせては答え出す

梅雨晴れ間きりきり舞を踊らされ

大阪市 榎本舞夢

トップの座降りてやさしい父となる

スーパーに行くにも少し紅を引く

じっとして居れぬ私の好奇心

孫連れて海の偉大さ教えてる

言いわけは半分だけを信じます

大阪市 榎本 日の出

アッハハハと笑い飛ばしてふっ切れず
必要とされてやる気が湧いてきた
元氣よく暮せるように医者通い
お互いに遠慮し合つてまともらず
失敗を酒の肴にしてしまう

大阪市 西川 更紗

エレベータ命からがら乗っている
一日を走り回つた夕茜
ダイヤより輝く子等がいてくれる
一人居の叔父の頑固を持て余し
介護する姑の笑顔とおしく

大阪狭山市 矢野 梓

責任は上にいくほど軽くなる
ドラマより生の事件が恐ろしい
体調に合わせて決める旅プラン
遠い日のわたしに逢いに古里へ
忘れてもいい傘ちゃんと持ち帰り

池田市 栗田 久子

聞こえないふりで聞き取る老いの耳
さみしさを見せて紅茶は冷めている
秋めいて街はコーヒー色になる
手抜きした悔いを残してたそがれる
秋風に乳白色の裸婦の肌

和泉市 横山 捷也

焼きたてのパン試食して買うはめに
老犬が日向をさけて通る午後
遠雷がとぎれとぎれの初夏の畝
一病持つ同士の旅や露天風呂
イヤリング光つて愚痴をがまんする

和泉市 西岡 洛醉

義理一つ捨てずに丸く世を渡り
触診の鼓動に医師はそつが無い
善悪を分けて男は道選ぶ
歳の差の違い温めて夫婦愛
前進の歩幅まだまだ登りでず

泉佐野市 山本 蛙城

親殺し子殺し飛行雲にじむ
セピア色した青春を抱いている
愛憎は言わぬが花よ不整脈
柔らかに生きてムリせぬ目分量
年輪の歪みあらわに皮下脂肪

茨木市 藤井 正雄

荒れ球と緩急分けた打てぬ球
場を踏んだ言葉添えた酌がくる
青春を巻き戻したい人に逢う
ゆつくりとしたはずやはり旅疲れ
正論で走る男が一人浮く

交野市 森 本 弘 風

ジীবンの穴からちりり若い肌
トラが負けスポーツ欄は見ない朝
ダイエット酒を飲むから出来ぬ俺
一人行く血液検査母米寿
十五日正午の鐘に街静か

交野市 田 岡 九 好

父の日はついでに作ったものだらね
心配事あったはずだが何だっけ
合わぬ靴難儀やけれどこれも縁
旅の鐘撞いて真昼の寒山寺（蘇州にて）
産道の奥なる臥所見る古墳（石の宝殿）

交野市 山 川 日 出 子

早朝に海亀写生阿波の海
噴水は亡父の手作り寺の池
留守番をしたロボットに首飾り
イナバウアーごっこしている園児たち
満月にタップダンスをする河童

河内長野市 村 上 直 樹

誤解生むマッチ名刺もない無聊
大の字に転ぶベッドのただ広さ
転がった箸の角度よ妻の乱
つつんとするなよあれは出来心
近ごろは妻の直球打ちあぐね

病院へ毎日通う元氣者

思いやり貰い命がひかり出す

虎の子を生まないままの預金帳

サッカークの選手に重い記者会見

八十を祝うて市長諭吉くれ

河内長野市 植 村 喜 代

車椅子積む頃急に降って来た

みんな一人淋しい時は長電話

鬼一匹いるから私元氣です

運不運花の苗にもあるのです

崩しかけたお金はすぐに消えて行く

河内長野市 山 岡 富 美 子

浪花つ子すぐに御輿を担ぐ癖

鉛筆が折れて呑み込む妥協案

長雨に家族でつまむ回り寿司

キーボード叩いて覗く万華鏡

人知れずため息をつく預金帳

河内長野市 井 上 喜 醉

へそくりに決心をさせフルムーン

台湾の鰻で辛抱する猛暑

横着な時代ネットで網を張り

夏山の山彦が呼ぶ大自然

居直るとボタン押すだけ怖い国

河内長野市 坂上 淳司

岸和田市 堤 権代

暑氣払い汗かき食べるタイカレー

大阪のおばちゃん大口で笑う

悪者は大口開けて笑わない

白寿です顔中口で笑います

ティーショット臍も行方を追っている

岸和田市 森元 ふみよ

今の世は貪欲醜態曝け出す

百歳が画面一杯ブイサイン

古稀迎え容姿二の次心の美

ありがとう五体が動く戦中派

右左脳がストを起してクイズ拒否

岸和田市 林 力子

甘い香の中で五感を研ぎ澄ます

悪人に据えるお灸が甘すぎる

野良猫に一度の餌が甘かった

裏切りの予感目線を避けている

花粉症治まり弾む夏帽子

岸和田市 井伊 東吉

雑草の伸びの早さに追いつけず

雨続きリズム狂わす怠惰心

不機嫌な音の挨拶初クーラー

水なす漬送れと友の督促状

モンゴルの二人が綱を分け合うか

電話口元気な声で演技する

身から出た腎石をみやげに御退院

スケジュールこなして美味い夕の膳

七七を喜ぶべきか敬老会

レシピには知らない素材ばかりある

岸和田市 原 さよ子

余りもの無駄なく使う母の知恵

辻褄を合わせた嘘が目余る

叙勲章額に収めて家宝とす

介護保険納めて不満残してる

裏表見せて夫婦の絆しる

岸和田市 岩 佐 ダン吉

八月の六日地球儀が割れた

しなやかに生きる男の聞き上手

一山にされたが僕の旗がある

居丈高に愛国心を問うてくる

広い胸つい告白をしてしまう

岸和田市 雪 本 珠子

惚れっぽい猫に振り回されている

旧姓で呼びとめられた雨の午後

テールライト追って行きたい恋心

ポケットの中で不満が膨れだす

少子化がベットブームを招いてる

岸和田市 土橋房枝

一人住むことにも慣れて母強し

少子化で妊婦威張っているみたい

大好きな君いる夜空星数え

おたまじゃくし翔ぶ日を待つて群れている

雨の音の黄昏どきの寂しい日

堺市奥 時雄

のめりこむきつかけとなるまぐれ勝ち

まぐれです本音と違う顔で言い

二の足を踏んで女神に逃げられる

たいがいの病気は酒で治してる

病室で祭囃子を聞いている

堺市矢倉五月

認知症予防に孫を手懐ける

懐しい歌が夫婦で一致せず

口下手で下戸でチャンスが欠伸する

握ったジョーカー時効になつていた

しっかりと噛めば味あるおこごだ

堺市加島由一

愚痴じゃない未練じゃないと酔ってきた

飲むために恥ずかしながら二度の職

呼び方で分かる二人の間柄

君の名が身体の中を駆けめぐる

満月と酒が男を虎にする

堺市石堂潤子

シースルーエレベーターがビルを裂き

鳥籠がチュンチュン揺れて梅雨晴れ間

時時はでで虫ほどの角が出る

ごはんよー昔のままの妻が呼ぶ

天国と地獄の隙間探してる

堺市山本半銭

父親の顔した男見かけない

海へ来て海に入らぬお父さん

何や彼や言うても父はえらかった

夜干しするおまけのようにお月さん

浮き草の思いの外に丈夫な根

堺市宮本かりん

生かされて人それぞれに色を出し

のんびりした手だなと爪が伸びてくる

大きな声出すなとママのでかい声

曖昧な笑いでその場ごまかされ

七十年嗅ぎ分けてきた丸い鼻

堺市源田八千代

せめてもの罪滅ぼしにゼロ解除

カーナビが斎場までを知り尽くす

通夜客に笑顔でピースする遺影

生前は寂聴さんに似たお声

茶毘に付す人工骨は焼け残り

堺市 柿花和夫

皆から打って出たぞと蟬しぐれ
ハイヒールと決別せよと足が言う
夏休み井戸に西瓜があつたなあ
じじばばに蛸も並んでおいしい初め
車椅子のありがとうには嘘がない

堺市 國見蘭香

汗かいて毒を出したと信じきる
みぞ萩が咲きはじめてぞ盆近し
力まないでも湧いてくる生きる欲
真つ盛りの暑さを凌ぐ木綿服
スーパ一の値引きを狙う遅い客

堺市 近藤豊子

雨づくみミズのたくる花畑
しらずしらずねむりつづける雨の午後
また読もういつか読もうと本を積み
あこがれは赤毛のアンの台所
日本ではテロはなかったこの五年

堺市 和田つづや

大声のお早う今日を夢にする
りきみない愛に不要な変化球
算術をしないがむしやらの暮す
負け犬と認めてなくすものがない
自尊心つよくて愛に孤独感

堺市 西村りつえ

天の川逢いたい人がふえていく
梅干しにパワー頂く朝ごはん
ワイロ脱税モラル無視してのし歩き
幸せの物指しちがう飛車と角
雪の日生まれ夏はよたよた影ほうし

堺市 齋藤さくら

ストレスを散らしに友がやって来た
天引きの軽いボナナス笑えない
正直に年を重ねている写真
百歳を目ざして欲しいお母さん
流行るのか親子の事件続いてる

堺市 村上玄也

些少でも墨すって書く熨斗袋
着飾ってみてもお里が出るマナー
美人には無理をしてでも席を詰め
酔っ払い何度も刺身取りそこね
聞いちゃったからと他愛のない弁護

堺市 神原文

夏の悔い忘却というとおしき
アスターの花横目でチラリ恋想う
僕の生き方アジサイのよう手を広げ
一編の詩を生んでくれそう朝の窓
明日はしゃぐおしやれを思う時至福

四條畷市 吉岡 修

リモコンの届かぬ先にバラダイス

口下手のぶんを扇子に喋らせる

ひそひそと本人以外知れ渡る

玉砂利の一步一步のよい響き

無為無策やつぱりつけが税にくる

吹田市 早川 棲世

発車ベル鳴らず異郷に濃い旅愁(旅の思案 その十二)

街朽ちて古ローマ風呂と芝居好き

詩のエーゲ海で次々蛸釣られ

トルコブルー陶器は海色川の色

街薄暮機窓のビルは墓碑のよう

吹田市 瀬戸 まさよ

女性にはない悪友という親友

サングラス若く見せたい離せない

ゴージャスな扇千景の着物好き

パソコンの若さふうふう言う私

昼と夜店入れ替わるガード下

吹田市 穴吹 尚士

国家とは何か司馬遼読み返す

立ち読みの続きが売れて棚にない

コンビニにいつしか化けていた書店

図書館と言いつきをしてパチンコ屋

食べ物と活字の飢えは忘れない

吹田市 大谷 篤子

兄が逝く父の泪を見てしまう

孫離れ少し車間を広くする

失敗も笑い飛ばして抱きしめる

両方の愚痴を黙って聞いている

浮ついた弁解だから信じない

吹田市 太田 昭

海は汚すまいぞ血でけがすまいぞ

荷をおろし海の軒を聞きにゆく

めし粒をこぼす老母にもある誇り

一輪を挿してわが家が青テント

泣き笑い夫婦の糸を縫り合わす

吹田市 野下 之男

またしても世界騒がす大花火

平凡が国の屋台を担いでる

連れた犬聞いている振りの立ち話

限りあるいのちを歌う夜の蟬

拌んでも返事をしない棚の簞

吹田市 須磨 活恵

土壇場でワラ一本に救われた

ライバルが好きで褒めたり貶したり

月下美人ひと夜限りの切なさよ

梅ラッキョ漬けて今年も達者なり

紫蘇の葉に抱かれてしんなり梅の味

吹田市 木下敏子

高槻市 指宿千枝子

いい仲間いつも笑顔の車間距離
生きがいに人のお世話もして達者

寺巡りふたりの歩幅よく揃い

この足に力ください天の川

笑っても泣いても歳はとってゆき

高石市 浅野房子

フィクションの世界で生きている自由

妥協せぬあなたの赤い長い爪

何もかもいすかの嘴となるブルー

矢面に立たずうしろで指揮を取る

不惑でない八十路でさえも迷うのだ

高槻市 乙倉武史

有難うもつたないで日を送る

健康が基本管理に気を遣い

手間暇をかけて玄米食を炊く

ベランダ農初成りトマト仏壇へ

それだけの男とたかを括られる

高槻市 瀧本きよし

あれこれと考え過ぎて纏まらぬ

合鍵を渡され決意迫られる

バラを摘むあした天気になるように

手相見と易者に余命覗かれる

猫跨ぎされないように男練る

授かってかけがえのない顔で古稀

時どきは自分の顔を確かめる

十年の時は過ぎ去り盆が来る

CDを残してくれてありがとう

じゃが芋を煮てるカルメン聞きながら

高槻市 生田義一

各候補ポスト睨んで本音出す

回診後気になる医師の思案顔

八十路坂満身創痍でやつと越え

閻魔さん僕はまだまだ行かないよ

ナツメロをうっとりとか聞く老いの床

高槻市 左右田泰雄

飛び立ったあとにひっそり燕の巣

リビングから日の出拝める有難さ

ぎこちないフォークさばきでスパゲティー

吊り革につかまり舟を漕いでいる

力量は五分とにらんだ名勝負

高槻市 執行稲子

十二色お蔭で描けた空の色

理不尽なと分かっているも親は親

思案して渡ったはずが泥の舟

ポチの耳家族の癖も嗅ぎ分ける

信頼の眼差し心の窓を開け

高槻市 傍島 克治

自分史にバラ色の章見当らず
落ち込まぬように鏡へ老い隠す
ゆるみだす絆をしめた震災忌
子が巢立ちテレビ一台暇を出す
俄かレッスンホームステイ引き受ける

高槻市 井上 照子

獣にも劣る犯行乱れる世
赤信号渡る大人へ子の怒り
ストレスに声はり上げて歌おうか
当世の恋出来ちゃった計算か
立ち直る男の顔の晴ればれし

高槻市 富田 美義

比べれば俺より下がある安堵
満ち足りて虫の音を聞く洗い髪
たっぷりの自信に暗示かけられる
嘘だけがあなたに会える赤い糸
筋トレに明日を乗せて汗ながす

高槻市 佐甲 昭二

乾杯の音頭に長い尾鰭つき
荷を解かれ今日から肩が軽くなる
回り道誇って本音確かめる
梅雨空に騙されて傘邪魔になり
みんなから当てにされてる固い口

高槻市 西谷 治三郎

尻下の亭主も社ではうるさ型
口だけは老化せんで困ってる
無駄な物あつて落ち着くワンルーム
満員車目の前に立つ臍の胡麻
少子化で児童公園無人化に

高槻市 杉本 義昭

空に干す黄色い旗にあるドラマ
お誘いがありそで空けておく手帳
ほどほどがいいと言いつつ愚痴る癖
裕次郎みたいな足で歩きたい
あじさいの本音の色を問うてみる

豊中市 安藤 寿美子

本にそう書いてあつたと譲らない
その昔読んだ聖書は文語体
エレベーター製造マークにらんでる
下手な字は隔世遺伝やと言われ
この人と相合傘はおことわり

豊中市 吉田 あずき

呑まぬはずの薬そうも言うけれど
もう一さし舞うて果てたい老いた蝶
童謡に思い出あって涙ぐむ
忍従の上に生まれて来た平和
ウソの世に探す本当の手触りを

豊中市 山門タミ

県境先祖代々隣です

お元氣ねおおきに口と手だけはね

今時の若い人達親切よ

苦勞など彼方へ消えた八十路越え

店によりキウイの味も値も違い

豊中市 江見見清

緑青の屋根が昭和を遠くする

天然の緑見たくて遠出する

安い店脚伸ばすには遠すぎる

間違つた道を教えて追いかける

顔あたま親に似ている子の不満

豊中市 水野黒兎

屋根までのち無心にしゃぼん玉

吐き捨てるには大き過ぎ枇杷の種

汲みたての名水で風呂湧かす里

しばらくは色を楽しむ午後のお茶

盲腸の辺りに腹の虫を飼う

豊中市 岸田知香子

客二歳じいじばあばと慕いよる

あじさいのさし木講釈店の前

梅雨空に足遠のいた店の入り

梅雨空の垣間の陽差し当てはずれ

九十歳馴染みの顔が頼み事

豊中市 藤井則彦

悪友とご縁ができたクラス分け

寝顔まで悪くなったと責める妻

おくればせ社歌を読み解く定年日

食べないとすぐ腐り出すお裾分け

祭壇の人と見紛う棺の顔

富田林市 片岡智恵子

悲喜こもごもあつて人生フルコース

ミサイル発射もう軍靴は履かせない

足跡のそれぞれ消せぬ心の灯

なめた塩負けると辛い大相撲

地獄極楽真ん中へんで生きている

富田林市 藤田泰子

ボランティアお世話になった恩返し

どこまでが本当なのか言葉尻

大根の花は多くを語らない

抗ガン剤いつも拌んで飲んでいる

ガン告知重たいものはみな捨てる

富田林市 大橋鐘造

昭和史に風と生きてる兵の墓

情念の雲が流れる炎を抱いて

ぬるま湯に育ち忘れた自己主張

前向きに生きる男の広い視野

心まで映す鏡に怖くなる

富田林市 中井アキ

梅雨あけの歩幅大きく弾み出す

坂くかも知れぬ私もまだ女

恋人の嘘はつるりと心太

逢うて別れていつばいの疑問符

子を生んだ数だけビツクリ箱がある

寢屋川市 籠島恵子

あみだくじのように人生突きすすむ

梅雨もまたよし口実のずる休み

満月と対峙コーヒー飲みながら

月並な恋だと思う阿弥陀さま

駅までの歩幅測っているところ

寢屋川市 江口度

恐竜時代天変地異のこわさ知る

北朝鮮のミサイル世界大騒ぎ

すぐ隣まで来た農産物直売所

朝市でよく売れ生産間に合わず

温泉でうなぎ育てているらしい

寢屋川市 平松かすみ

橋龍が逝ったボマードの匂いも

母さんの元に帰れと祈る日々(拉致)

一パック丁度ふたりのお赤飯

焼塩に隠れていそう添加物

父さんの分まで貰うハリぐすり

寢屋川市 森茜

実山椒ビリリと夏を迎え討つ

月光にぶつかり迷路やつと抜け

始発から終着駅へ株談義

木の闇にくちなしの白匂いたつ

鬼瓦待つ故里の夕焼けよ

寢屋川市 富山ルイ子

株高で友大もうけ五百万

一円も無駄には出来ぬ金なので

こつこつと貯めるのが性に合うらしい

超音波MRI検査漬け

シヨック死の願いを聞いて貰いたい

寢屋川市 太田とし子

梅雨曇りつり合いのよい生欠伸

外交を細木数子にゆだねたら

神の国昔誇った日本海

真剣勝負妻がつくったお弁当

汗かいためしは味噌汁だけでよし

寢屋川市 坂上高栄

拉致霞みミサイルに向く世界の目

緑陰の日毎恋しい梅雨晴れ間

制裁議案お隣さんがうん言わぬ

いよいよになると唱える御念仏

難聴で老人会の隅に居る

羽曳野市 吉川 寿美

増税とセットメニューになる介護

障害の子も難民の子も手をつなぎ

情報に溺れていつか自閉症

説教を垂れる御仁が多すぎる

病院のハシゴが趣味で生きのびる

羽曳野市 徳山 みつこ

懐メロの歌手と同じ歳やねん

お届け印というのが思い出せない

毎日がマンネリズムに包まれる

マッサージ器は芸のこまかい事をする

見る人を見ると分かっていたらしい

羽曳野市 酒井 一壺

おとなしい奥さん今日は叫んでる

一呼吸おけば治まる腹の虫

一日を綺麗に使い仕舞風呂

駿馬駄馬症状話す五人部屋

笹の葉に重い願いがゆれてる

羽曳野市 安芸田 泰子

戸惑いを陰にゆだねて光り出す

無礼講今じゃ部下から言うせりふ

わら半紙高貴に見るは新聞紙

オーケストラ カサブランカはチューバ吹く

雅楽とや不協和音の心地よさ

羽曳野市 三好 専平

東大阪市 谷口 義

東大阪市 笠井 欣子

東大阪市 西村 哲夫

一病を道連れ宥めなだめて二十年
夫退院リビングの灯があかい
あがり目下り目ことさらきつい喜寿の坂
老夫婦の一足す一は一で昏れ
身辺整理献体の事も書いておく
メール打つ親指きつと淋しがり
シュレッダー悪の手伝いした悩み
ともかくも追いつけました交差点
平凡な今日が宝となるやがて
法廷に命返せが吹き溜る
ひっそりと咲いてる花が盗まれる
暖房へ自然の恵み忘れ去る
リハビリに挑む根性にくらしい
限界へ挑んでつかむ金メダル
祭りすみ主人はただの人となり
無口だが笑顔が人を引きつける
他人だから優しい言葉かけられる
親切という名を借りたおせっかい
真夏日に奪われていく思考力
都合悪いことは忘れるまだら惚け

東大阪市 北村 賢子

東大阪市 米田 水昇

マイホーム耐震偽装の城だった

オレオレと知らん男の甘い声

高鳴りへわざとクールなふりをする

指切りへきつと明日も楽しい日

すねたふりしてもほつべが緩んでる

東大阪市 安永 春

消壺に入れてあります恋ごころ

バスデーサービスよくて食べ切れず

はつきりと大きな声がありがたい

反対の意見も言わず黙秘する

歳重ね恥も重ねて化粧する

東大阪市 中岡 妙

呼ばれても直ぐに立てない歳になる

背けたい思いで覗く車内化け

牛蛙声の悪さを競い合う

苦労した話で夫婦風化せず

一つ穴笑い合えねば狂い出す

東大阪市 佐々木 満作

つんつんと鼻つくレモン丸かじり

階段で苦手な顔とすれ違い

寝て待っているが果報は届かない

二時間も待って面接二三分

海原にこころ広くと教えられ

しその赤ひき出す不思議クエン酸

ときめきを薔薇に託して園めぐる

山もみじ透かして仰ぐ青い空

嘘まことつかねばならぬ嘘もある

七夕の笹さらさらと恋偲ぶ

枚方市 寺川 弘一

腹時計時報と合ったことがない

お金があると広い心になりやすい

善人が恥をかいたら赤くなる

鬱病と不定愁訴が持病です

高層マンション天国が近くなる

枚方市 海老池 洋

産科医不足お産もできぬ少子国

総裁は三割庶民ゼロ金利

止まり木の隣も同じトラのファン

大きな顔でゆつくり飲める喫煙場

だんじりの無茶へ控える救急車

枚方市 安達 忠央

君が代は直立不動で歌う歌

ラ・セーヌを白髪が歌う梅雨さなか

世渡りに十八番の歌を二つ三つ

好きどうし見せつけるよう二重唱

スイトンを分けた戦後を忘れない

枚方市 宮川 珠 笑

停年を待つてくれてたガンと生き

悪友の通夜に病院から抜ける

身内呼ぶようにと医者その他人めき

持ち直しサイフ探しているベッド

看護師の巡回寝たふりしといったろ

枚方市 莊 司 弘 之

あと一球コールにビールぐつと飲み

晩鐘の景色求めて秋の旅

うつの日はどしゃ降りもまた清涼剤

目を見つめ愛情込めてする握手

熱帯の夕焼け色は無限色

枚方市 丹後屋 肇

溪流を竿が埋める解禁日

ファイトを焚きつけてくる子の寝息

着メロに慌てて廊下に出るカバン

陣痛に震えの止まらない夫

琴線に触れて追っかけています

枚方市 二 宮 山 久

梅雨晴れ間夫婦旅する西国寺

三室戸寺紫陽花まけじと傘の花

くる夏に体きたえて飲むジョッキ

今年また夏と迎えた六十坂

電話ベル九十四歳のさとの声

枚方市 伊 達 郁 夫

苦勞して掴んだ石の軽いこと

言い訳を上手に言う嘘になる

ネクタイのしわに戦士の跡を見る

出直しが未だ出来そうと顔洗う

自販機の釣りはやっぱり確かめる

藤井寺市 高 田 美 代 子

思いどおりに中々歩けないものだ

シルエットの崩れた影が憎くなる

名古屋場所行司の衣裳暑からう

お返事下さい往復ハガキ出す

父の背中に銃を担いだ跡がある

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

ざりざりの恋人未満守り抜く

デュエットで終るに惜しいこのムード

時間から開放されて鳥になる

責められた心の火傷治らない

泣くことはなかった恋は空回り

藤井寺市 太 田 扶 美 代

六月の雑草なかなか意地っ張り

ご褒美の旅湯煙に酔っている

六十五今から挑む山がある

サンブルは二泊三日が丁度よい

ひまわりの一本だけが拗ねている

藤井寺市 中島 志洋

栄光の影で裏方玉の汗

病院で反省してゐる不摂生

酒飲める内が花だと梯子酒

嘘だけは吐かぬと言つたそれも嘘

男勝りのひとには見えぬ京訛り

藤井寺市 楠 昭子

拍手したその手で欠伸隠してる

ホームレスいつかいつかと思う

ほどの雑音あつて良く眠れ

あつさりと告白したが悔い少し

大きな欠伸うっかり入歯すり落ちる

藤井寺市 若松 雅枝

風さやか村の祭りの触れ太鼓

さりげない優しさ老いの身に沁みる

亡夫の靴まだ玄関の正面に

お中元やりとりしてた頃が華

少年の心の中の深い傷

藤井寺市 鈴木 いさお

脳みそがどうやら減つてきたらしい

お彼岸の冬瓜汁に亡母を恋う

口下手の嘘が案外見抜けない

体調不良今日は病院やめとこう

関白で淋しがりやで子煩悩

箕面市 出口 セツ子

金が無いから見えてくる温み

落ちつくまでかき混ぜてゐるティースプーン

尽しがいなくて淋しくなりました

子の笑顔あしたへネジを巻いてくれ

必要とされるとファイト湧いてくる

守口市 井上 桂作

心豊かに平常心で過したい

一度だけ還らぬ命大切に

ひたすらに明日を信じて生きるのみ

時々大きな声で叫びたい

ひそむ毘投資勤める電話口

八尾市 吉村 一風

ひねり過ぎしゃべる話の堅うなり

転居通知出すの忘れた福の神

お父さんあまりしゃべらぬ休肝日

実印を男の顔で妻は捺す

ナツメロに弾むリズムの老いふたり

八尾市 宮崎 シマ子

方円の水ほど人は和にとけず

丸いポストが人待ち顔に立つ長閑

保護色で世渡りうまい青蛙

道徳が机の上から崩れだし

タッタッタと私をせかす朝の音

八尾市 高 杉 千 歩

音たてて平和崩れる夢で覚め
相槌を打った罪が重くなる
価値観の違い我が家もハイビジョン
安定剤単細胞が安堵する
失敗を仏に愚痴る昼の月

八尾市 村 上 ミツ子

ミサイル発射標的は不明です
三室戸寺浄土を見せる蓮の花
時計を見ないくらしがしなくなってくる
かあさんの鞭に涙の跡がある
やりかけて無駄だと悟るダイエツト

八尾市 生 嶋 ますみ

一番茶摘みとる鉢のような指
冷や奴妻へ一口つぐビール
帽子目深煙たい人をやり過ごす
何処へ行く当てもないまま服を買う
裏通りゆっくり昔溜めている

八尾市 山 本 宏 至

ケータイが思いがけない罪を生む
ゴキブリがびっくりしてる叫び声
妻という大きな山に敷かれてる
騙したのは大きな顔をしてる方
火をつけて姿を消した悪い奴

八尾市 長谷川 春 蘭

あるだけの靴をみがいて夏至暮るる
かき氷べちゃつとつぶす男の掌
街角に来て風鈴の風見ゆる
抱き取るや初孫匂う天瓜粉
梅雨じめり一字をさがす広辞苑

阪南市 森 村 美 花

またあしたそのひと言が温かい
マンションが並び都会の熱帯夜
水色の紫陽花ビュアな朝くれる
お出かけの嫁にメニユーを渡される
夕食は今日も野菜とお豆さん

大阪府 初 山 隆 盛

新涼の風がいのちを撫でにくる
散り際の美学花火に教えられ
冷凍のたこやきチンの酒のあて
使用前必ず読めと転嫁する
一病があって健康気を配り

大阪府 米 澤 俣 子

這い上る力 女と豆の夢
嘘発見器よりも確かな妻の鼻
若さへの挑戦だろう空元氣
お肌しっとり不思議のタネは恋らしい
中味より見かけ気にしている頭

大阪府 野田 栄 呼

神戸市 伊勢田 毅

法律で決まっつてほしい尊厳死
折れないが転倒のたび曲がる骨
一日を大事に咲かそ茄子の花
心髓の和に癒された華道展
陽を浴びて雑草に触れ元氣維持

大阪府 桑田 ゆきの

まだ生きるつもりで種を採っている

マッターホルンを入り陽が染めて月昇る(スイスの旅)

母のため延命鈴を振っている

モンテローザはバラ色朝日今昇る

川二ナで蛭が育つ水の澄む

氷河特急パノラマ展望右左

七発もミサイル射つてあがいてる
親の背を鏡としない子が増えた

アルプスのお花畑にむかえられ
天国に近いホテルへ野鹿の群れ

大阪府 澤田 和 重

神戸市 木村 貴代子

通された部屋に灰皿おいてない

山が好き君居る天に近いから

妥協せぬ仏頂面が揺るがない

少年法子に善悪を教えない

寝返りが打てる幸せ病い抜け

みんな変親も子供も世の中も

次ページもどうぞと風にめくられる

都合よく持説を変える選挙前

ダイエットの苦勞別腹知っている

身を守る嘘はそのうち綻びる

神戸市 山口 光 久

神戸市 山田 婦美子

差し障りあるからちよつと遠回り

ずつこけた母が居るから帰りたい

不器用なくせに出しゃばる好奇心

星空を見ても感動しない子等

浮かれてはおれぬ一児のパパになる

一度だけのかえる時あり自嘲する

薄給に耐えたワイフの細い腕

一滴の水は生命を繋ぐ糸

鳩がいる公園だから落ち着ける

神戸市 池田善守

他人の子を叱った昔なつかしむ
精一杯生きて良い日を積み重ね
健康寿命延びて本当の長寿国
わが携帯どこに居るかと電話する
今ここを強く生きよと花菖蒲

神戸市 田中章子

連合がいいのだ娘いい笑顔
嘘ひとつ次々嘘を生んでいく
間引き菜は一品になり生かされる
初孫の報に思わずストレッチ
リタイヤー仮面を脱いでいい顔

相生市 中塚礎石

退職後まだ三十年という元気
犬の散歩飼主よりも偉いらし
休耕田草を刈ったら鳥が来る
八十路坂まだ若いから恋もする
群れとなる雑魚の本心夢無限

芦屋市 黒田能子

気持だけ先へおっとりする手足
一滴のかくし味あるプロの技
母さんが楽しそうだと子も楽し
副作用承知で飲んでる薬
スタートを頑張りすぎて続かない

尼崎市 春城 武庫坊

箸二膳このあと長く並べよう
人間の欲がからんで建たぬ土地
我は海の子歌って海と遊びたい
記憶ぼろぼろ迷い始めた昭和初期
七夕に極楽予約掌を合わす

尼崎市 春城 年代

欠伸ればつ長生きしてるせいでない
若い日の着物は今も鮮やかだ
身の内の老いはまだまだ見せられぬ
度忘れも人間らしくあたたかい
肩書さは問題じゃない男だよ

尼崎市 軸丸勝巳

英霊の眠る靖国騒がしい
靖国の御霊は知らぬ敗戦日
朝ドラの出征風景八月忌
教育の改革急かす社会面
老い二人風呂ゆつくりの声がくる

尼崎市 長浜美籠

デミタスを干して親娘のパラダイス
意あまり視線を外す飛行機雲
聞く耳と聞かない耳を使い分け
この辺が身の引きどころ箸を置く
泣き笑い共に生きるも行きがかり

尼崎市 田 辺 鹿 太

禁煙を決意たばこの値上がりで

帰ろかな堂や蟬が呼ぶ故郷

おばちゃんが居るから街も活気付く

心にも無いことをいう脳である

味気なや紙のコップに紙の皿

尼崎市 松 下 比ろ志

妻や子と飲む父の日の父の酒

そよ風に田圃の空が揺れている

緑陰に寝顔笑顔の乳母車

山や川に昔話のある故郷

やり場ない時は鏡と睨み合う

尼崎市 林 昭 三

国会の審議白熱テレビ用

使い捨て勿体無いが同居中

人使い荒い社長が太り気味

うきうきを通り越して三代会

梅雨晴れ間月命日の花買いに

伊丹市 山 崎 君 子

朝ドラに遠い青春そえている

慰問文返事を待ったおさげ髪

夕顔もつぎつぎ開く今日は七夕

蘇鉄の新芽我が家を守る命なり

手も足もままにならない老いひとり

川西市 西 内 朋 月

平のまふ父が迎えた定年日

気の強い母に寡黙な父がおり

まだ動く父の形見の古時計

遺産分け悩むことない子が二人

半分に割れない家と土地がある

川西市 米 原 雪 子

一人旅方言で道教えられ

七癖を知って連れ添い五十年

頑張れば出来る事ある有り難さ

気持ほど動かなかった身の誤算

華やかな裏に潜んでいた私欲

三田市 久保田 千 代

コンチキチン祇園囃子の響く京

盆踊り太鼓の音に輪が揺れる

ストレスを秘境の宿の湯に流し

飛ばされた帽子を取りに引き返す

少しだけ嘘が洩れてる軽い咳

三田市 北 野 哲 男

くしゃみ出たはずと拍手で迎えられ

禁酒三回禁煙五回まだ傘寿

待ったなし行司の声と弥陀の声

戒名で呼ばれたことのない先祖

坊さんも凡人寄せる策を練る

三田市 堀 正和

女性誌もしっかり読んだ雨宿り
無職だがちゃんと三食たべている
寝るまでの時間が長い休肝日
しっかりと釣針ついた試食券
惚れるとは惚れることだと気がついた

三田市 石原 歳子

浅漬けに茄子と胡瓜はかかせない
悲しみに涙のでないドライアイ
ひげ面の男家では甘いパパ
小半日腰の治療につぶされる
捨てられる運命にある紙コップ

西宮市 山本 義子

その先を聞くとモゴモゴ言うている
秋彩り認知症など追っばらう
青空市ブランド服が風に揺れ
食べる会お断りしたことがない
歳ですネテレビの喋り早すぎる

西宮市 西口 いわゑ

一杯のビールが距離を近くする
視点など変えつつ夫婦しています
人を許して風のワルツが心地いい
すばらしい返事をくれた花の種
火のように水のようにも生きている

西宮市 亀岡 哲子

父の日の子も父であり乾杯す
おっとりが嫁ぎ見事な肝っ玉
駐車場空けておきますお越し待つ
古希すぎて踏んばっている徳俵
完璧を目指した先の落し穴

西宮市 緒方 美津子

デパートのまつり娘と鉢合せ
夫入院けんかの種はとっておく
夫の機嫌直してくれるそば処
こんなにものだかなる通夜九十五
祭笛待ち切れなくて飲んでいる

西宮市 牧 潤 富喜子

出たついで言ったついで荷が重い
先見えぬもののひとつへ時早し
こんな時古いことばが胸に来る
好きでない生き方見せるテレビ消す
筆談も律気口の形を読んでいる

西宮市 坪井 孝一

明日信じ今日も目覚しオンにする
胸襟を開き過ぎては嫌われる
ライバルも実はいい奴だと思ふ
好き嫌い絵文字で送る自己主張
酒呑むと饒舌になる母のこと

菜園に汗と笑顔を結ぶ風

西宮市 井上松煙

日本の歌ジャズのリズムでまた楽し

若やいで歳一回りさばを読む

六甲おろし今日の僕への応援歌

人に看護任せて妻は旅に出る

西宮市 菊池トミエ

古墳内壁画の色を大切に

ゆつたりと生きる垣根を低くして

さくらんぼ送りましたと良い返事

この山を越せばのどかな里が見え

つつましい暮し彩る豆御飯

西宮市 片山忠

惚れたのはお前が先じゃあの頃は

美味しいの一言外でいう夫

パチンコが好きでへ理屈こね回す

悪気ない人だと軽くご紹介

無防備になれる夫が側にいる

西宮市 秋元てる

母米寿古い女と思うてない

百の会と命名同級会弾む

古里に自分独りの山がある

日本での謝罪はこれと頭下げ

花咲いて物干し場所がまた替る

わけありの西瓜も夏の味くれる

鶴折ってプライド保つ喜寿の父

デパ地下でヒントを貰うお惣菜

珍客と野戦料理で飲み明かす

瀬戸の海波頭に生きて古稀となる

兵庫県 大谷幸次郎

父の日の軽さ知ってる宅急便

薯作り精出し猪に贈りもの

さわやかと言われる人の若作り

中干しの稲を揺らして渡る風

鶯が上手に鳴けて夏木立

奈良県 渡辺富子

二駅を昂と歩きプロポーズ

へソ出して破れジーパン里帰り

試着室私の夏が見当たらず

Eメール地球の裏の子とつなが

上げ底の土産を配るおつき合い

奈良市 米田恭昌

北方四島祖国恋しと吠える海

鬼課長の欠伸見つけた昼下り

子に招かれちゃっかり年金たかられる

ひよどりも少子化二羽の雛を抱く

雛探す悲鳴にも似た親の声

奈良市 天正千梢

忘れるとなしにわすれている四思

睡蓮がきれいすぎます途中下車

句の呼吸うなりながらに酔うている

箸袋男弱音を吐いている

あの人に会うから少しうす化粧

生駒市 飛永ふりこ

ありのまま言うてしまった風当り

もぎたての野菜に夏が弾けます

正直でどこが悪いと居直られ

裏声で豪雨を知らず蛙達

責めるのも逃げ道あける思いやり

橿原市 居谷真理子

おはようのメール妻ある男から

修羅抜けて変わる女の眉の位置

善人が余計なことをしてくれる

老骨といえど婦人に譲る席

清貧の父に供えるわらび餅

香芝市 大内朝子

毎日がとても自由な不自由さ

カマキリの赤子も鎌を振りあげる

ふる里の山ふところは母に似る

クールビズ男のお洒落はびこりぬ

幸せを招く眉間のマッサージ

大和郡山市 坊農柳弘

しなやかなレモンの主張アフターティー

行間にトラの勢いはみ出して

口裏を合わせた友が酔い潰れ

過去からの旅人八月の踏み絵

カンナの新ゆめり解いて秋は其処

和歌山市 川上大輪

生きてるか人差指で突いてみる

紙コップぐらいの仲が丁度良い

影法師少し太ってきたようだ

勝ち組も負け組もない幼稚園

遮断機がキケンキケンと降りてくる

和歌山市 木本朱夏

今日という旅路に咲かす赤いバラ

ワールドカップ二時間ほどの愛国者

また一軒潰れて街はモノクロに

あさがおの夢あさつてへ伸びてゆく

つんつんと妻の機嫌の辛子和え

和歌山市 田中みね

それにしても暑い暑いと行く夜市

魚心ないと判ったお付き合い

へびに怯えムカデに怯え夏来たる

陰ながら案じていますジャイアンツ

MRI先ずはめでたし異常なし

和歌山市 福本英子

雨蛙鳴かぬむしむし続く梅雨
梅干にお礼言いたい茶漬です

ちくはぐで長く付き合ひできる友
死ぬまでにくぐつてみたい縄のれん
たった一度の京の店からご案内

和歌山市 古久保和子

紫陽花の色鮮やかに酸性雨

つぎつぎとめだか孵化する佐び住まい

水琴窟あれは私の涙壺

腹立てて飲めば水にも角がある

ミニバイクで走る私のテリトリ

和歌山市 喜田准一

割勘にきっちり出して来る端数

どうせならでっかい夢にしがみつく

ためらいの傷はいくつも胸の中

輪の中に居るから耳にする噂

気まぐれに言うて来るのは聞き流す

和歌山市 武本碧

かさぶたがボロボロ落ちる古日記

節くれた老樹の根にもある誇り

運命に叛けば神も背を向ける

垣根越し幸せごっこしてる薔薇

宗次郎のオカリナ聞いて今日終わる

和歌山市 榎原公子

青春がささくれている記事その他
少子化の子へ降りかかる世の乱れ

言うべきでない事言うた日の疲れ
コキコキと膝を泣かせる古稀の坂
スペアリブになって冷蔵庫で眠る

和歌山市 楠見章子

麦わら帽子昨日を忘れてはいない

好きなかたちになれるハートも風呂敷も

私が笑うと雀までわらう

野良猫に仲間の数が負けそうだ

風呂敷にすいか包んでちちが来る

和歌山市 松原寿子

梅干しの酸味のような痛み抱く

秒針が流れる余韻掌に包む

澄み切った蒼にえ切れぬ胸に沁む

想い出の深さあの日を離さない

便箋の裏までおもしろ透きとおる

和歌山市 細川稚代

通話料少し気になる長電話

所在なくまた開けている冷蔵庫

泣くことも笑うことまで管理され

無意識にかけたロックが気にかかり

不揃いのサイズでうまい自家育ち

和歌山市 玉置 当代

三年日記同じリズムで梅漬ける
はる苦いゴーヤ恋しくなつて夏
渡米の子慣れたか便り遠ざかる
太陽に追われ忙しい小商い
ドライフラワーふる里の庭恋しがる

和歌山市 堀 畑 靖 子

自己紹介ねんきん暮しですと付け
頼まれて演説聞きにゆくホテル
蚊をピシヤリ話とぎれた座談会
図書カード当たる小さいことだけで
金貯めず身体に石をためていた

和歌山市 松 尾 和 香

海底の魂叫ぶ八月忌
光る物ないが輝く母の指
平和の世言えぬ災い多すぎる
年金でラストダンスへかける旅
ふるさとの蛍守つて水光る

和歌山市 福 井 桂 香

食前薬めんどくさくなつて来た
フェロモンがちよい不良おやじ寄つてくる
七夕にちよつとはずかしことを書き
御老公をまねてダイケア漫遊記
雨続き織姫さまもむくれ顔

和歌山市 宮 本 三喜夫

後任もやつと決まつて落ち着いた
晩婚で子すくなくなつて国瘦せる
取り締まり監視員とか発足す
止めました取り越し苦労つまらない
花は好き正直ですな時季に咲く

海南市 三 宅 保 州

脱ぎやすい服を着て行く診察日
奇蹟など起こりっこないバーコード
公衆電話も俺も時代に乗り遅れ
ゼニカネじゃねえと悟つた振りをする
拝んだら賽銭箱を覗きたい

海南市 堂 上 泰 女

同窓会ピチピチ弾む過去の風
女の孫へ踊つて見せる日の佳境
熱帯夜人魚のように眠つてる
梅雨最中カサブランカの白い肌
曇天を待つてましたと買物に

鳥取市 有 沢 せつ子

羨まず年金に合う暮しする
篤志家の新聞記事に癒される
みな鼈買家族ひとつになる野球
コマーシャル待つてたようにふたり立ち
あの時の握手の動悸忘れない

鳥取市 録 沢 風 花

一日に一句一笑して暮らす
視野検査脳も確かと言われたが
愛猫は淋しいなどと愚痴言わぬ
漁火が夜のロマンをかきたてる
オアシスの方へ傾く影法師

鳥取市 近 藤 佳 子

深緑の葉がみな踊る山の風
愛憎の一人芝居をくり返す
五月晴れの山で全身晒したし
若い日が逃げ水となる白日夢
親戚も知人も横を向く落ち目

鳥取市 吉 田 弘 子

ダイエット膝の悲鳴に妥協する
団塊を辿れば戦後へと続く
乗せられて冒険好きが投資する
自然体逆らいました白髪染め
軽老にして医療費をアップする

鳥取市 夏 目 一 粹

かたつむりぼつぼつのぼれ上の座へ
粉骨碎身にんげんとり戻す
気まま過ぎまた首切られちぎれ雲
四コマのマンガに頭ひねってる
湧き水を売って暮らしの糧にする

鳥取市 杉 本 孝 男

短足を誇りに仲間睦み合う
お付き合い短い割に仲がよい
わくわくと武者震いする入社式
ポイントを稼ぐライバル憎らしい
肝試し見馴れたお化け苦笑い

鳥取市 倉 益 一 瑠

わたしを炙る確かに角が生えていた
虹追って紙ひこうきは戻らない
作り笑いと握手でわたし売りにゆく
縄とびに入って来ない好きな男
内緒ですハートにゴジラ飼ってます

鳥取市 西 村 黙 光

忘れ得ぬ死闘の日々の灸の跡
死線越え傘寿の峰を踏破した
生命賭けの灸へ先祖の玉手箱
灸据えてくれた姉妹に唯感謝
頭上から足の裏まで日に三度

鳥取市 山 宮 愛 恵

大好きな豆でビールと差し向い
ありがたいことが続いてありがとう
外反拇趾夏は素足に下駄とする
まあいいかいと妥協癖がつく
携帯を娘が叱る不携帯

鳥取市 福田登美

優しさに触れて孤独が癒やされる

装えば少しは凛と背を正す

生き下手も上手も同じ空気吸う

好きな人灰汁の強さに一歩引く

揺れながら余生の夢を積んでいる

鳥取市 岸本宏章

まだ脈があるらしティッシュ渡される

まだともう使い分けして世を渡る

認知症いきなり惚ける訳でない

多機能に故障のおまけ付いている

平和な世にもいる軍事評論家

鳥取市 岸本孝子

年金日テキとワインで弾む膳

気を許す女同士の酒が効き

傷口にふれられ他人だと思ふ

仲良しの湯の宿主婦を忘れさせ

幸せは自分で決めることにする

鳥取市 永原昌鼓

地団駄を踏んでも若さには勝てぬ

人間のシミを閻魔が炙り出す

ごちそうを前に思案の血糖値

浄土へは先にどうぞと遠慮する

色気より塩け気にする老いの日々

鳥取市 奥谷彩子

神仏に白紙委任をして余生

鬱を消す胸すく啖呵切ってみる

帰って来いと星降る里の山が待つ

ほっこりとしてる笑顔に友が寄り

ライバルの辛口ジョーク傷に沁む

鳥取市 福西茶子

少子化をよそにたんぼ旅に出る

老介護決まらぬままに夜が明ける

産め増やせそんな時代に受けた生

はるばると来たつばくろに軒を貸す

鳥盗られテポドン撃たれても九条

鳥取市 福永ひかり

忘れてもすぐにあきらめやすい傘

虫めがねあつちこつちへ移動する

ギブアップできない意地が身に応え

捨てられずもつたいないのコレクション

お役所の付けが纏めてくる仕組み

鳥取市 徳田ひろこ

賑わしく暮らしたくなり白を着る

ひよつとこと隣合わせてからの劇

三拍子シャンシャンシャンと至福の日

ころろざし半ばで電池切れそうなの

凡人のひとりに過ぎぬ半世紀

鳥取市 宮脇道子

毎日を無意味に過ごす老いの海
無駄のない残る時間を磨きたい
ゴーヤ蔓網戸にさばる強かさ
歳だからと片付けられて痛む腰
夕陽落ち今の命に感謝する

鳥取市 加藤茶人

糖尿で思う国の平和ボケ
髪抜けるほど悩んでもみたい恋
昼茶漬け俺は気楽なひとりもの
妻の影踏み事もなく倦怠期
猫ごろ寝俺もごろ寝の大あくび

鳥取市 土橋はるお

死ぬ刻はチクリと痛いかも知れん
年金が余り返ると言うでない
狙の鯉の覚悟にやうなずける
気短で阿呆になれぬ情けなさ
そつとして見て見ぬ振りも板につき

鳥取市 土橋睦子

集中力欠けて西瓜もゴロリ落ち
鉛筆も私に飽きているようだ
もう歳だひねる頭に鬆が出来る
よく笑う女が主導権握る
威張らせて置けば自由になれるから

鳥取市 塔寛子

梅雨晴れたあじさいの首打ち落とす
膝のご機嫌とりつつこなすスケジュール
九条の呼びかけ人に並ばされ
テポドンの二個目砂丘にとどくかも
はりあげる音読空気がいいよ

鳥取市 中村金祥

ウイルスに乗っ盗られそうこの地球
いい気分になると水虫かゆくなる
孝行も妻の機嫌をみてしてる
その道の達人顔もそれらしい
挨拶も出来ぬ子供を憂いている

鳥取市 山本益子

エンマ王やがて裁くか覚悟する
タイムバーゲン走る女の息弾む
拉致家族きつと戻ると信じ待つ
人間はやがて寂光ああ不滅
老夫婦年金で足る暮らし立て

鳥取市 武田帆雀

百歳のガッツポーズにただうろうろ
金銭で割らずに愛と情で割る
穫り残されて曲り出す胡瓜のうつ
ほめ言葉たくさん用意して逢おう
エーエーが長い頭に味噌がない

鳥取市 富山 檳榔樹

傷心を抱いた女は胸痛む

うつ憤を洗い流して痛さ知る

よく飲める顔にすましてねばり客

利用価値まだあるのかと役戻る

夏ばてに妻のスパイスやがて効く

鳥取市 西川 和子

折々に厄を被って生き延びる

ドリンクに力を貰い畑を打つ

ひと汗を掻いてビールの一気飲み

暑氣払う狸も胡瓜すきらしい

蟬の声聞いて土用の風になる

鳥取市 田村 邦昭

口べたが弱音ばかりを吐いている

美しき女の匂いに酔わせられ

いくつもの恥を重ねて敬われ

少しでも辛味効かせたい仲間

記念日を忘れて妻の顔見ぬ

鳥取市 春木 圭一郎

チャンスの種はいつも自分の中にある

まずチャンス生かす力量蓄える

前向きに探せばたとあるチャンス

行動を起こせばチャンスついて来る

本当のチャンス違った顔で来る

鳥取市 下田 茂登子

崖つ縁で迷うています古希過ぎて

頑固爺の顔色ばかり見て暮らす

目の前は忘れ過去だけ浮いて老い

可哀そう嘘吐いている拉致の男

哀しさを紛らすために吹くラッパ

鳥取市 平尾 菜美

ドンと打つけじめ花火を胸に持つ

枝先の猫が謙虚にひき下る

花咲かぬ異常気象に氣がもめる

またひとつ増えた持病の薬づけ

小波のプライドダムの果てまでも

倉吉市 山本 玲子

一病にちよつぱり見せた気の弱さ

ゴミ拾い捨て場がなくてまた捨てる

暑い寒いと人間さまはだらしない

文殊の知恵あれこれそれと言ひ出した

言い訳をまことしやかに聞いてやる

倉吉市 猪川 由美子

根性アジサイに涙元氣貰い受け

尻ぬぐいさせて小泉席を退く

勝負服着て句会へと出陣だ

運命の人と出合って心編む

川柳に癒やし救われ日々紡ぐ

倉吉市 米田 幸子

宗教はどうあれ神に掌を合わす

将来に自信失くして神頼み

草臥れたテレビとじーじお留守番

やりくりでやっと手にした兎小屋

春は花秋は月見に誘われる

倉吉市 最上 和枝

大根とごぼう人參三姉妹

母さんの背の細さにほろりする

ライラック後振り向かす香を放ち

折り折りに胃のポリープが気にかかる

あの頃の肌はお餅の顔してた

倉吉市 野口 節子

思ひ出の花を咲かせた夏の夜

ドライフラワーになっても自己主張

贅肉と余分な財は邪魔になる

ジェラシーも入れて膨らむのし袋

加速する老いに歯止めの策がない

倉吉市 松本 よしえ

ふる里の空気が母を離さない

子も孫も帰り空気の抜けた毯

土壇場でイチかバチかの綱渡り

舵取りに口出しをして叱られる

風向きを確かめてから舵渡す

倉吉市 牧野 芳光

神様を度外視すれば出る理屈

蟻の列金はなかなか貯まらない

耳鳴りの遠くで蟬が鳴いている

二泊三日で仏も客も帰路につく

夏の陽に我を失いそうになる

倉吉市 山中 康子

水くさい料理に耐えた正常値

学童を見守りたいが老け過ぎる

ミサイルに島の怒りと疑問符と

甲高い声もとどき出してます

喋りたいしゃべれないこのじれったさ

米子市 政岡 日枝子

ひびいてる仲間の音を真似てみる

途中下車遊び心がそのかす

紫陽花の赤を絵手紙で知らせる

私の古稀に弟達が病む

生きかえる手術ぞ側で泣くでない

米子市 林 瑞枝

陽だまりを感じる人と薔薇を抱く

藍を着ておんな茶道に癒される

茫々と夕陽ところを得て沈む

ふくいくと香る林檎に羽根がつき

広い野の花は胎児のへその位置

米子市 門脇晶子

足の痛みを流してくれよ天の川
ひたひたの水がもれ出す壺のヒビ
コップの底に私をのぞく眼が見える
耐える時泣く時亡母は鍋みがく
神様は旅路の涯をしらさない

米子市 木村春枝

忘れ物私より先家に着く
名も知らぬ花も一緒に御仏壇
故郷の地図にお城を書き入れる
何気なく貰った松が金を食べ
紫陽花がエールをくれる梅雨の空

米子市 光井玲子

平穩に過ぎる暦のありがたさ
三食をしつかり食べて健康だ
身の上話親身に聞いてついほろり
完全に二階一間が老父の城
時々呼吸が乱れ老いを知る

米子市 白根ふみ

夏山に軽薄だった軽装で
夏休みだから駄わすれそう
脳味噌も耐えねばならぬこの極暑
最後には笑えるものを残したい
土壇場まで傘と予報を握りしめ

米子市 中井ゆき

無にかえす白に來世をまかせよう
三日月も丸くなる夜を信じまつ
年金が松の手入れに首をふる
ほろりする度に財布がかかるくなる
岡城跡想いあふれる風が吹く

米子市 青戸田鶴

あの角を曲れば母が待っている
親よりも少し長生きしています
ケイタイも持たず時代におくれている
下り坂用心深くなっている
水源地で米子の水の自慢聞く

米子市 野坂なみ

星あまた集めて宇宙重たかろう
どこからも神のひびきのする出雲
松の気品のような総裁出てほしい
老いの身に城の広さがうとましい
その余白淡いブルーに染めたいな

鳥取県 谷口次男

善人もいたずら好きの神の作
真つ白な氷河人間の為すがまま
公約は誠きれいな字が並び
乱暴な性格にする夜の闇
小さいが村のシンボル沖ノ島

鳥取県 竹 信 照 彦

草刈機畑の中は使えない
収穫より多い胡瓜のもらい物
減る友を数え同級会をする
賑やかな漁火イカは不漁という
この暑さ我が物顔でゴーヤ伸び

鳥取県 深 田 俱 久

六億円の仔馬も飼い葉食べている
先代の掲げた看板磨く日々
最高の時を奏でる君と居る
汗をして祈りと感謝一日終え
ボキヤ貧はスゴイの一語で何も彼も

鳥取県 盛 田 夢 路

バーゲンに鵜の目鷹の目格闘技
山椒の実素早くピリリ威嚇する
余り物さらえるわたし太鼓腹
人目を忍ぶには恰好のラブホテル
健康に覗らつきよう効くらしい

鳥取県 太 田 幸 枝

長旅のわらじせつせと編んでいる
御祓いをしたに養錢ぬすまれる
千鳥足顔バスつかい梯子酒
乗せられてつい損得を忘れてた
歳忘れ生のビールで浮かれてる

鳥取県 山 本 正 光

トラ勝って晩酌うまい一人酒
梅雨晴れ間庭の草抜き忙しい
明日逢うために体調ととのえる
日本を愛して今日も生きている
大山を朝夕拝んで今日も無事

鳥取県 蔵 本 悦 子

ひとひねりほしい男が増えて来た
鯛よりも家は手頃な鯛食う
口は肥え心はやせて来るこの世
テポドンには北よ気弱な証拠かい
アメリカよ骨までしゃぶるつもりかい

鳥取県 澤 裕 子

気配りを忘れ天狗になる愚か
ひと粒の遺伝子過去を解き明かす
貫禄のある人みんな肥えている
親のすねかじるニートに骨が無い
村おこし地産地消で活気づく

鳥取県 山 下 節 子

水虫で気象判断できそうだが
騙すのもだまされるのもみんな人
赤い糸炙り出したら纏れてた
咲く花に四季のうつろい知らされる
価値観をちぐはぐにする年齢差

鳥取県 石谷 美恵子

花束を抱かせて貰い姑となり

珍しい物に飛びつく悪い癖

可も不可も気にせぬオール3どころ

下戸と聞く造り酒屋の御曹子

モリモリと胡瓜を食べて痩せよかな

松江市 松本文子

花を育てる誰のためのものでなし

煩わしいから一人で飲んでいるビール

呑気な所も短気もみんな遺伝です

ロソクを足して下さい閻魔さま

どうしたのだ同じ所でまた転ぶ

松江市 小川 注湖

僕の哲学者人を決して騙さない

目立ちたがり喜寿の今でも変わらない

食卓にベットの皿が並ぶ家

一つふたつ秘密持つて楽しいよ

心配は殺しゲームで育つ子ら

松江市 川本 畔

夜という得体の知れぬベールかな

窓の外みんな嘲笑っているように

やや褪せた約束心待ちにして

これからを思案している水ぎようぎ

咳込んで車窓の海を見逃した

松江市 松本 知恵子

百日草今年も夏が始まりぬ

夏草の丈に埋もれてなるものか

父さんの空咳ひとつ主張する

わたくしの居場所を探す旅続く

ジベタリアン品位は問わぬ若さかな

松江市 安食 友子

追想も共生もない無言劇

可憐なら厭いはしない崖つ縁

褒め言葉その裏にある底の底

涙腺も苛まれてる罪作り

錯乱か高血圧が潜んでた

松江市 津川 紫晃

歳月を煮込んで深い夫婦味

敗北を認めぬ酒が荒れている

うぬぼれを食べて味わう挫折感

人間のドラマ豊かな笑い皺

灯を消せば今日の戦の影がある

松江市 佐野木 みえ

名水を口に緑を満喫す

くちなしの花がこつしも咲いてくれ

ファインダー覗けばあすが見えてくる

高原に来て雲海に包まれる

命日は着飾って行く墓参り

松江市 三島 湫 丘

うたかたの虹を追いかけてベダル踏む
ひとり飲むキリマンジャロがほろ苦い
口笛を吹いて弱音を踊らせる
したい事山ほどあつて生きる甲斐
いい朝にひと味違ふしじみ汁

出雲市 岸 桂子

もうすぐ喜寿に爪は変らぬさくら色
空っぱの頭を抜ける梅雨の風
笑いから余分なものを削ぎ落す
為すべきを成してすつきり夕日見る
気がつかぬうちに地球も老齡化

出雲市 富田 蘭水

信一つぶらさげこの世わたつて
七福神弁財天の持つ威力
テポドンも七夕も同じ空にらむ
情熱が足りず歯ざしりばかりする
髪型が胸の思いをせつせつと

出雲市 小玉 満江

ころころと百円玉が逃げちゃった
あれこれとまた品定めするカラス
勤め終え絶頂過ぎた百合の花
めぐり来る八月祈り深くする
登校と下校で違う子等の声

出雲市 石倉 美佐子

それからは黙したまんま老い二人
一瞬にかくれんぼうの鬼になる
いづれかは前か後かのちぎれ雲
蜚ならそこらあたりに居ましたと
最前列の椅子から役者よう観える

出雲市 伊藤 玲子

テポドンのもてなし受ける日本海
台風も出雲の神にや遠慮する
虎ピンチテレビの前で熱くなる
お疲れの帽子大事にしてあげる
短命な虹そこはかと美しい

出雲市 多々納 テル子

自立する小ツバメ青田低く飛ぶ
診察券四 五枚さげて管理する
困ったら支えてくれる電子辞書
老眼鏡いらぬ二人の麦ご飯
幸せは身の丈ほどの暮しかな

出雲市 吉岡 きみえ

風鈴を吊ってひとりの夏が来る
なんべんも仮面修正してのぼる
大事にならねばいいが梅雨末期
方角がよくてまっすぐ行ってみる
すかすかのわたしの骨を陽に晒す

出雲市 森 茂美

青葉風吹いて風車の回る里
新聞と同じ量ですこのチラシ
風鈴が目覚めて鳴らす今朝の歌
草を出て草に消えます蟻の列
七月の風が網戸を抜けてくる

出雲市 持田 多輝子

雨しとど肩のこらない友が来る
夏本番しのぎを削るコマーシヤル
怖いのは医師の手による医療ミス
幸せを受けつぐ祖先の墓守る
老いの愚痴ナース笑ってきいてくれ

出雲市 小白金 房子

デイスービス車見送る夫の杖
車椅子介護やさしい手にすがる
衣紋掛旅の疲れに陽を貰う
生かされて燃える夕陽の中にいる
父の日へ清酒 煙草で祝われる

出雲市 小豆澤 歌子

切取線向こう側だけ晴れている
掃除機も必死になって埃吸う
本当は戻りたくないブーメラン
根気よくいやいやばかり合飲の花
虚しさを包んでくれる母の星

出雲市 多久和 敬子

嘘混じり大きくなっていく話
つまりいた石に人生考える
さりげない言葉が相手傷つける
頼られる主婦がいつまで続くやら
肉じゃがをじょうずにはさむ箸づかい

出雲市 佐藤 治代

太陽をうつかり抱いて火傷する
優しいが時にうるさくなる主
日照不足地球の旬が狂い出す
おしやべりと一緒に届く茄子胡瓜
ひらめきを忘れた脳を持て余す

出雲市 竹治 ちかし

熱さめてみれば何でもない話
捨てきれぬ夢が余熱を抱いている
長寿国痛し痒しという介護
熱帯夜四季の恵みを否定する
良し悪しの中も一日二十四時

雲南市 毛利 幸

もやもやが溜まって堰を切って出る
爽やかに振舞い周り座が笑う
どきどきの気持ち忘れる古希の春
一日を終えて感謝の灯をともし
むらむらと鼓動高まり血が騒ぐ

島根県 伊藤 寿美

美作市 大石 あすなろ

送り仮名も句読切るのも難しい
年金の池にわたしを飼ひ馴らす
嫁姑よらずさわらず縞模様
過ぎ去った月日に残す悔い数多
搾乳の牛も聞いてるモーツァルト

岡山市 井上 柳五郎

年金減り介護保険も税もふえ
パソコンもケイタイ無縁日が過ぎる
わがままと自由の区別まだ迷い
情報洪水もまれ生きのびる
ゆつたりを流れるままに任せ生き

倉敷市 撰 喜子

出払って一人静かに昼寝する
人のこと覗きたい虫飼っている
逆襲のことばおぼえる幼稚園
感動の減り一行ですむ日記
親未熟愛を求める子に無情

美作市 福原 悦子

忘れたで済まない義理が棲んでいる
この道は脇役ながら生きている
いろはとは無縁で私は土まみれ
残り火がまだ燃えている老い二人
ストレスを水に流して米を研ぐ

語り部にエールをおくる八月忌
森林浴ゆつくり肺を洗います
タンポポが咲いて更地の居住権
人間ドック賞味期限をチェックする
いつからか地盤沈下をした父権

美作市 小林 妻子

キッチンの椅子買ったしている家族
渡り初め予約されてる三夫婦
駐車場有りますかしら新車買う
朝採りのトマトがあさの食卓に
台風は来ないか蜂の巣が高い

美作市 山本 玉恵

伴走者選ばれました走ります
我が家の夜明け一年生のランドセル
負け犬になっても意地は捨てませぬ
髪型を替えて私の道を行く
アドリブで生きて来た日の泣き笑い

真庭市 国米 きくゑ

ゆつたりと夕陽を拝む今日も無事
写経する心静かに亡夫偲ぶ
職退いて名刺不用の軽い肩
転ぶなとメモ用紙置き孫帰る
立ち合いの気力の違い転がされ

真庭市 福嶋 智恵子

土佐の旅女の鑑観て帰る

ばあさんも食べてみなはれカップ麺

留守電の元気な声に疲れとぶ

辿り着きほっとしました喜寿の旅

テポドンと鯨が脅す日本海

竹原市 正畑 半 寛

ヒロシマの夏熱くなれ熱くなれ

八月の平和祈念という熱さ

きのこ雲どう償っていくつもり

仏壇を開けっ放して見てもらう

ふるさとの地球をいじめ過ぎている

竹原市 石原 淑子

諸行無常蛙嘆くか啼きやまぬ

薄墨の深さ私を離さない

差し向かい気付いたらしい妻の老い

今日のツキ宝籤でも当たりそう

笑顔いっぱい心の錆びる隙が無い

竹原市 岩本 笑子

海は痒がり船をたくさん走らせる

山には山の言い分があり土石流

雨雨雨猫が返事をしてくれる

幸福そうにアジの開きで昼にする

時々陽干しにガンという地雷

竹原市 森井 菁居

二階から降りたら猫が待っていた

災いと背中合わせに住む日本

モナリザの模写なら僕は笑わない

途中から頼りにならぬたすけ人

記念誌に父礼をして侘しかり

竹原市 時 広 一 路

守らなくてもいい気もするがバラの刺

過去は過去何も語らぬ丸い石

生きている証で白髪増えてくる

頑張っているけどよいしょどっこいしょ

竹の元気を目の前にして竹の里

(前月分) 寝屋川市 江口 度

何度にもかに食わされる冬の旅

退屈している煙草に手がのびる

献血をして煙草を吸うてます

ヤゴの苦勞が生きているホタル川

選り分けてゴミを捨てている文化

第96回 大阪川柳の会

日時 会場
宿題

10月10日(火) 17時開場・18時締切り
大阪梅田駅前第2ビル5F第1研修室
▽手玉・上原 翔▽包む・住田英比古
▽熱・西口いわゑ▽動機・磯野いさむ

各題2句・席題なし・会費千円
欠席投句 10月9日締切

川柳塔の

川柳讃歌

(21)

木津川

計

落書きにまともなことが書いてある

神夏磯 典子

トイレに落書きが減ったのはパソコンが代用しているからです。それにトイレの壁面がタイルになったことも一因でしょう。昔は惨憺で、あまりの猥褻に「落書きへ少し知性をほめかせ」(参平)と番傘系の柳人もたしなめたのです。ある日、小用のトイレに「君はいま人類の未来を手中にしている」とあって知性をうかがわす落書きに、僕は大人物になった気がしたものです。

トイレの落書きを女性が題材にするにはためらいがあります。そこを踏み越えた典子さんの思い切りを買います。

ストープも扇風機もある五月なり

古今堂 蕉子

「五月とは」なら人さんのお宅でのあきれた、であります。が、こは蕉子さんの季節にとらわれぬおらかさです。五月にストー

プは不用です。扇風機も使いません。ということとは年中蕉子さんの居間にあるのです。ご主人がものごとくに拘泥しない大人です。蕉子さんのお父さんも茫洋とした方だったのでしょうか。お母さんは輪を掛けて動じないひとでした。そんな家庭に育った蕉子さんは、きつと大柄でこころの広い方に違いありません。句は体を表します。それにこの句、繕わぬ作句方法の大事さも教えてくれています。

どん底に地下もあるとは知らなんだ

山門 タミ

ゴリーキーの「どん底」は木賃宿が舞台。寝泊りの彼らが歌います。へ夜でも昼でも牢屋は暗い／いつでも鬼めが窓からのぞく。

そこが人生のどん底と思っていたら、その下にまた地下(室)があり、息も絶え絶えの半屍たちが横たわっているのです。辛酸の人の世です。タミさんはお気の毒に、耐えていたどん底からさらに地下へ追いやられたのです。こんな世界があったのか？ タミさんの開眼です。そんな人がいま続出しています。

高僧と言われる方が太り過ぎ

奥 時雄

一二〇キロはあろう僧の誂経する葬儀に辟易したのです。もしキリストが巨軀だったら世界宗教にはなっていなかったでしょう。日

本に仏教が渡来した初期の仏像もみんな痩せさらばえていました。精神の優位性は肥満を遠去けるのです。瘦せたソクラテスもむべなるかな、橘高薫風もまた然りであります。

天平時代に東大寺の大仏が豊満になったのは国力の増大、その反映でした。のち平安貴族の下影れな豊満は富裕の象徴でした。

この句、格別にどうというのではありませんが、太り過ぎた高僧への時雄さんの疑問を採りました。

般若経面白おかしく説く和尚

横山 捷也

般若経に限らず、仏法を面白おかしく説く僧は絶滅したと思っていましたら、捷也さんの身辺に生き延びておいででした。

仮にも地獄を語るとしてあれほど怖く興味深い世界がありましようか。極楽は空想も交じえ、理想社会を夢見することができません。にかかわらず説かれないのは、僧の不勉強もさりながら伝道への熱意がなくなったのです。

サーカスには道化師(ピエロ)がいて、その所作で笑わせます。起りは、仏道の道を説いて仏教に帰依(化)させる説教僧に他なりません。聴かせるには面白おかしく説いた筈です。それがピエロと目されたのは仏教が墮落し、崇敬の念が薄れたからです。

(「上方芸能」誌代表)

自選集

波多野 五楽庵

大役を果した笑窪もみほぐす
道端の石にも涙あるのです
泪もろい老鬼になつてゐる孤独
如何ほどの苦悩か頬に艶がない
月光のシャワーを浴びて帰ります

芳 地 狸 村

膨らんだ河豚に似合つたおちよぽ口
うれしさがだんだん満ちる祝い酒
山百合を追つて歩いた女人道
万灯のあかりに祈る大師廟
幽幻の気配ただよ奥の院

宮 口 笛 生

知らぬ間に來てた人生八十路坂
あつち痛いこつちも悪い八十路坂
八十をあえいで生きた昨日今日
八十路坂なかなかきびしものと知り
八十路坂米寿はとて無理だらう

宮 西 弥 生

生きている存在価値のある居場所
雲の流れに見た青春のひとつから
とんがった言葉に横を向く西瓜
熟年の別れが渡る華の橋
ブライドが見て見ないふりそれでよし

森 下 愛 論

あいまいな余生を暮らす木偶の坊
飲んで寝てヘソ天にしてボケてゐる
汗を出す仕事が無くてほんやりと
反省も三日ともたず飲んでゐる
諫め合う戦友少なくなつて虫の声

八 木 千 代

集まりやすいように広場を掃いてゐる
スポーツ公園に集まつてくる未来たち
エネルギーあふれ炸裂する広場
太陽に焙られ試される広場
いくさ静まれば玲瓏たる月夜

八 十 田 洞 庵

どんちようはゆつくり余韻残し降り
悪法であつても決める多数決
込み入った核の話は聞かぬ耳
猿芝居種も仕掛けもばれてゐる
腰曲がる母炎天を背負い來る

兩川 洋々

夢追つてばかり未完の絵が乾く
愛情の残高ゼロという別れ
煩惱の川で溺れてばかりいる
ため息に飽きた影法師の家出
地下足袋へ夢のつづきをいい聞かす

阿萬 萬的

年金暮し手持無沙汰な雨つづき
まあまあで済ましストレスためていた
茶化されて下手なアドリブ腰くだけ
不器用な癖にこまごま口はさむ
日々平和財布に小銭だけたまる

石川 侃流洞

ドア閉めて私一人の小宇宙
空くじばかり買つて些細な人助け
カジカ枕に聞いて山宿夢心地
三等分確かに包丁切り分ける
道問うに子供が逃げて寄りつかぬ

板尾 岳人

約束があつて離れぬ影法師
拝啓に始まる恋がありかしこ
道端の小さな花に頑張れよ
約束を忘れたことがないパセリ
頑張つて走りつづけている蟹座

奥田 みつ子

吾も亦紅しと答え続く恋
真実より嘘に元気をもらう日も
振り返る日々愛おしく疎ましい
狙うほどの小小さく遠くなる
風鈴を聞きつつ昼寝深くなる

河井 庸佑

捨てるには惜しい石だが策がある
近道に思いもしない急な坂
氣を許し滑った口へ自己嫌悪
緩い坂だんだん辛くなるも年齢
九合目結び直した靴の紐

木村 あきら

赤々と燃える朝陽に掌を合わす
過労死か蟻が一匹死んでいる
台風銀座四国路狙い攻めて来る
無駄のない処で打つてる父の釘
一日一善淋しい心満たされる

小島 蘭幸

三太郎語録と信濃川上る
信濃川慕情となつてくる窓よ
新潟は近いぞ握手攻めに合う
女装の麗人さつき披露をした人か
梟の眼となりし師の一句

小西雄々

火の鳥が運ぶ逆転劇を待つ
鬱の日へまだ涸れてない泉抱く
雨の海眺めていても絵にならぬ
白桃を贈られ梨を届けます
ぬるま湯の中では見せぬ力瘤

小林由多香

さわやかな目覚め毎日日曜日
中元も歳暮も酒と決めている
朝鮮のゴミまで海を越えて来る
赤飯のおかわり僕の誕生日
おみやげを配り小さな旅終る

斉藤 嘉

あじさいの藍に引かれて梅雨の道
太陽をたつぷり浴びたトマトです
教え子の豌豆だからなお美味い
清純さ演じ続ける薯の花
シャガールの青に私を遊ばせる

塩満敏

芋見れば飢えた少年の日を思う
赤色が一番好きな戦中派
孫娘花嫁になる日まで生きたいな
九条にノーベル平和賞あげたいな
平和行進今日はどこまで行ったやら

新家完司

気分いい日も稀にあり人に会う
ともだちの形見のシャツが勝負服
出口まで金魚掬いや歌留多取り
まだ何か掴み足りない指である
綾取りで首吊りの輪が出来る

田中正坊

編集が日川協で役に立ち（日川協功労賞受賞）
見る人は見てくれていた貢献度
金ピカの賞状仕舞うには惜しい
一日で良し苦しみも楽しみも
威張っても男はみんなあかたれ

玉置重人

今にして輝く仁義礼智信
身の丈に合わず歩幅を大切に
身がまえて歩く悲しくなる夜道
絶対の自負宮内庁御用達
一匹が二匹になった飛蚊症

恒松町紅

夜店から風に乗ってるいい匂い
少々の恥には馴れているバツジ
老化だとはつきり出ているカルテ
やれるだけやった未練はないスーッ
沿線の景色はいいが無人駅

大切な方へ無沙汰の辞書を繰る
ココホレワン男死ぬまで夢を見る
飛入りのブービー賞から病みつきに
肉親という再会の血の温み
ふところが寒うて妥協しておこう

太陽の光の方へ芽を伸ばす
認知したこと懐に仕舞いこむ
日本語が通じる女護が島がある
反対をする年寄りには島流し
平凡に生きて泣いたり笑ったり

斜めから吹いてわたしを試す風
ブライドの中途半端をもて余す
雨三日身の置き処考える
ウォーキング十萬億土歩くため
チャングムのような娘が欲しくなる

飲む真似を主治医笑ってしてみせる
盃を一人息子に選ばせて

百薬の長と長女はのたまわす
辛口も甘口もよし子の土産
もう少し飲みたい日なり本日は

遠山可住

土橋 螢

西出 楓 楽

仁部 四郎

第40回 東大阪市文化祭参加 第34回 市民川柳大会

日時 10月15日(日) 11時30分開場
会場 東大阪市社会教育センター 3階
☎06-6789-4100

ビデオ放映「河内の街道物語」他
宿題 (各題2句・出席者のみ) 出句締切り13時

「情け」	宮崎	シマ子選
「きつい」	大堀	正明選
「ゼロ」	前	たもつ選
「読む」	本田	智彦選
「揺れる」	赤松	ますみ選
「妻」	藤原	一志選
「線」	久保田	半蔵門選

各題秀句に市長賞・他・佳吟賞・参加賞
軽食・発表誌進呈

会費 1,500円
懇親会 4,000円 (希望者当日申込み)
お問い合わせ 片岡 湖風 ☎072-965-1341
主催 東大阪市文化連盟・東大阪市川柳
同好会・わかば川柳会
後援 東大阪市・東大阪市教育委員会

第57回 富田林市民文化祭 川柳大会

とき 10月22日(日) 午後12時30分開場
(昼食は済ませてお越しください。)
ところ 富田林市中央公民館2Fホール
TEL0721-24-3333

(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ約200m)

お話し 北澤 紀味子氏
「あげつらう人、あえかなる人 それも われ露子」
宿題 「安」 荻野 浩子 選
「名」 前田 咲二 選
「多」 濱邊稲佐嶽 選
「牙」 村上 氷筆 選
「素」 森中恵美子 選
「生」 池 森子 選

締切 午後1時30分 (各題2句)
会費 1,500円 (作品集、お茶)
賞 秀句呈賞
懇親会 4,000円 (当日受付)
問合せ 池 森子 TEL(FAX) 0721-25-0603
主催 富田林市・富田林市教育委員会ほか
後援 富田林市川柳協会

水煙砂

奥田みつ子選

大洲市 花岡順子

薄墨の筆から涙こぼれ出す

運命の時は立ち止まってはくれぬ

傷口を叩く雨なら降らないで

後ろ指星を眺めて耐えている

キッチンに立てば心が癒される

癒し系と呼ばれストレス溜めている

香南市 桑名孝雄

頂門の一針亡父の怒鳴る声

地震雷火事まではそのまんま

ひとつ走りすればまだまだ追いつける

茶柱はどうあれ今日はデートの日

腹蔵はないとカメラも褒めてくれ

失言はやっぱり酒のなせる業

堺市 大久保伸子

群れたがる癖にんげんで寂しいね

事あるたびに人の心がよく分かる

点滴のしずくを誰も疑わぬ

神様の手にすがりたい時もある

死ぬ病死ぬ病よ雨が降る

波静かテトラポッドは暇らしい

相生市 村木信子

地下足袋が舌打ちをする雨続き

悔いのない人生夫へ寄り添うて

無理算段している親という愚か

結び目に思い出つなぎ夢を編む

再会を抱く駄頭の国訛り

八月の慟哭耳をつき破る

今治市 塩路よしみ

切り取り線決断つかず辛夷咲く

この町が好きで安心して眠る

かたつむり梅雨を味方にほつとする

運命の鍵は神さま掌の中に

迷いから脱皮少年風になる

和歌山市 田中 すす

奈良市 乾 春雄

一頁捲る心に炎がついた
新鮮なわたしをお見せする努力
幸せの滴を受けるよい話

少し甘えて肩の力を抜いてみる
去りゆくもののおいてゆくもの荷は重し

京都市 清水 英旺

倦怠のほころびを縫う湯場の旅
雨だれがつくる気鬱の水たまり
外務財務主要ポストに妻が居る
山上憶良の宝いま受難

団塊の世代生きざま問われてる

大阪市 森田 明子

深海の魚となつて梅雨籠る
クチナシというには強い自己主張
夕闇をカサブランカが深くする
顔かたち親のせいにもできぬ歳
自転車をとばし少女に駆け戻る

大阪市 吉田 富美

まだあつた汲めどもつきぬ故里の井戸
針運ぶ指先止まる秋の風
人生のラストスパートカンナ燃ゆ
新しい布巾おろして盆供養
つまずいて新涼の風手でつかむ

石仏の無口に紅いよだれ掛け
古文書を開くと古い紙魚に会う
拝観料詫びてゐるような仏の目
下積み頃の素うどんうまかつた
延びている寿命の先に地図がない

大阪市 岩崎 玲子

子育てを楽しんできて今がある
山ほどの洗濯は山ほどの幸
子を書いた肩たたき券今もある
色褪せた子の文ははの宝物
転勤について来た子に感謝状

八尾市 赤木 妙子

ご隠居が閑持てあましもて余し
体型を隠してくれるLサイズ
どくだみの花の白さにある悟り
胸を張り雑草の花赤白黄
腐つても鯛鰯には負けられぬ

泉佐野市 稲葉 洋

何を知り何に気付かずこの歳に
衰えを知った時から口たつしや
荷物にはならぬ人情貰ふ旅
砂時計返して以後の早きこと
捻子のないメトロノームのわが鼓動

府中市 馬場利子

明日の夢皿に盛りたいひとりとばかり
ひとり言好きなコケシと語り合う
虹消えて野良の仕事はまだすまぬ
暑い日はゴーヤの味がよく似合う
脱皮して明日へ向かう風を選ぶ

京都市 中野六助

二十年夫してます疲れます
ここは折れ妻を上座に座らせる
振り向けば僕を信じる顔ひとつ
吹き荒れる風は承知で逢っている
しばらくは蚊にも功德の血を吸わす

八尾市 松葉君江

便利さのかげで本能衰える
肩書きをかくして街のボランテニア
美しい言葉に心磨かれる
親の愛三つ子心に根をおろす
さりげない言葉ストレス軽くする

札幌市 三浦強一

逆回りする個性派の回遊魚
赤字線廃止ふるさと遠くなる
ふるさとの方へ流れる天の川
ともだちの友達と飲みともとなる
こんな日もあったかアルバムの水着

和歌山市 柏原夕胡

子が巣立ち二人の時間温める
明日からがあつて決心つかぬ今日
君にだけ開いたところ閉じたまま
いつ死んでもいいもう一度会えるなら
君が逝く君を卒業できぬまま

大阪府 神野千恵子

辛口と頑固の影に父が居る
父親の存在感がセピア色
七色のテープで夢を留めておく
地上でも浮輪ほしいと足が言う
熱っぽい顔して咲いているカンナ

寝屋川市 小嶋みさと

空高く何を語るかからず鳴く
親と子の絆断ち切る闇深し
感性を磨いて臨む締切日
粗衣粗食読書三昧心満つ
人はみな無くて七癖人模様

和歌山県 森下よりこ

紙コップで乾杯をするいい仲間
無人駅季節の花が出迎える
おいお茶一人の家で言ってみる
まだ動く身体に合やす農作業
一人ぐらしに笑い袋がやせてゆく

取手市 葛西 清

ざりがにがランドセル見てハサミ振り

日本語の買うは通じるパリ―街

母来ると朝のメールで休みふい

振り子時計明治の愚痴がおしとやか

味噌汁がハミングしてる妻の朝

日立市 加藤 権 悟

飢餓の子にすまない朝のバイキング

強い子になれよと祈るお食い初め

平凡なくらしの幸を気付かない

耕せばみんな多弁になる土だ

エリート過去の過去には触れぬ青テント

草加市 飯土井 健 夫

あと四年百歳までを歩く杖

歩くだけ続ける事のむずかしさ

理屈より先ず実行という明治

戦犯と同居嫌がる兄の霊

W杯知らない国を探す地図

東京都 井上 つよし

一病が増えてもひとつ角がとれ

ざわめきをシンと静めた咳払い

偽札でミサイル飛ばす金作り

忘れ物戸締り終えて思い出し

児童より参観席が騒がしい

昭島市 野口 忠

握手する力加減で肚を読み

脳ドリル三日坊主が孫にばれ

お互いにまだ空気にはなれません

大福が今日も幸せ連れてきた

忘れたことがしよつちゅう顔を出す

横浜 川島 良子

加減したはずの言葉に蹴躓く

ネクタイが野良着に替わる定年後

一つ屋根天使と悪魔同居する

孫がきて夫婦喧嘩もひと休み

毎日が日曜日です疲れます

横浜 中尾 哲代

添い寝のママが先に寝る昼下り

定年後満点主婦になる夫

甘く見た天気予報にしてやられ

女です喉うるおして長電話

人力車重量級も同価格

横浜 金森 徳三

試される昨日 夕飯何食べた

カナダから来た甘えびの殻をむく

大切な常識潰すカタカナ語

増税を今朝も怒っている投書

怖いけど乗らずにおれぬ十二階

佐渡市 高野不二

あと何年生きられるのか歯を入れる

おいしそうに食べて見せるも芸の内

瓶代があるから足して酒を買う

年金を減らして税を上げて来る

梅雨空にこたつがほしい老夫婦

岐阜市 平野あずま

年齢に触れず乾杯パースデー

山車囲む若衆産土神の子ら

いか焼きの匂い祭りを煽り立て

朝起きることは忘れぬ記憶力

少子化の国から消える童唄

浜松市 杉浦恵夢

おしゃべりの輪の中にいてあたたまる

手花火のつかのま照らす物語

地図にない人それぞれの現在地

老けたわね彼女の眼にも書いてある

燃えたって燃えなくなつてマイペース

京都市 榎本宏子

時々は恥かかぬため使う金

八十八カ所歩き続ける杖と傘

ここだけの話に踊るうすい耳

亡母の声そんな気がした朝の五時

愛した地名断わりもなくカタカナに

大阪市 三浦千津子

老いるには少し間があり辞書を買う

風向きが変り二の足踏む破目に

核心にふれる手前の匙加減

勝つよりも負けぬ心で出す結果

晩学の視野を広げる詩と出合う

大阪市 原田すみ子

自分でも知らない自分いる気がする

自分史は自分が主役逃げられず

分かり合う努力はやめて認め合う

途中から折り合うようにする喧嘩

溜めている素敵なことは出番待つ

大阪市 吉川弘泰

秋の浜目にさわやかな砂模様(目の手術後)

ボール追う術後の瞳二百ヤード

広々と紅葉の山が目映えて

視力一・五町並み元氣至福の目

迷いなしホームの文字が皆読めて

大阪市 尾崎黄紅

勿体ないも孫に惜しみなく出して

愛国心という愛がわからない

もう一度着てはまた着て捨てられず

間違つて混ぜた彩から冴えてくる

引き算を好きでやつてるわけではない

大阪市 寺井弘子

柔らかなタオルで祖母の背を流す

欲望を抑えストレス溜めている

花愛でる心に花は背かない

ふにゃふにゃの赤子抱く手の力瘤

秘密主義人の秘密は聞きたがり

池田市 上嶋幸雀

紫陽花へ意地悪をする梅雨晴れ間

紫陽花に負けぬ女の変わり様

忘れたい過去が疼いて梅雨の冷え

戻り梅雨恋しさ募る片想い

仰いでも逢える当てない天の川

池田市 北出北朗

侵略を誤魔化し東亜新秩序

征く人と一夜千夜の乱れ髪

軍服ともんぺ引裂く発車ベル

玉砕島骨と皮でも戦せよ

軍国の妻は仮面をかぶせられ

泉佐野市 備後三代子

果てしなし母は老いても子を案じ

どことなく他所行きの顔初がえり

一泊で帰る娘は他家の人

いとし児と指切りをした夏を待つ

影のよう後追うて来てダイヤ婚

門真市 矢阪英雄

むぎわら帽夕闇の中忘れられ

西空へむかつて帰るもの悲し

淀川に花火打上げ水熱し

祭には蛸をかみしめ夏送る

鱧の骨きざむまな板夏町家

岸和田市 坂口英雄

ひとりごと増えてきたなと思う歳

雲行きの怪しい時は寝ています

趣味を持つ人には老いも遠慮する

ほいほいと安物買つてすぐ捨てる

つくつく法師鳴けば宿題急かされる

吹田市 二宮栄子

里の味折りよく届く七回忌

仏壇にまず挨拶の孫が来る

発表会家とはちがう孫を見る

他人の肩かりて歩んだ青い空

いい顔に映る鏡をはなさない

吹田市 元田さとえ

帰り舟聞けば戦後が懐かしい

心地よく酔わされ本音つい洩らす

屋根たたく夜半の雨のいい調べ

母の恩しみじみ思う誕生日

聞き役にされて酒つぐ縄のれん

吹田市 早泉 早人

ネット上妻の知らない株資産

講演会終わる頃には目が覚める

終章は幼き頃の無垢な色

長雨に歩調が狂う万歩計

親切そうな人をみつめて道を聞く

高槻市 峯村 勲 弘

茶髪にはやはり浴衣は似合わない

我が子には翼与えぬ親の愛

子は巣立ち我が家夫婦に広過ぎる

環境を破壊してから知恵が出る

単身の父にメールの応援歌

高槻市 安田 忠子

刻々と過ぎ去る時にくるあせり

列島の絶景秘境つづく旅

雲上の悟空になった檜穂高

新穂高神秘のパワー浴びる幸

小刻みな継投勝利タイガース

豊中市 源田 啓生

W杯負けて愛国心も冷め

平和ボケ脳にミサイル撃ち込まれ

老夫婦喋るドールで笑い合う

子も親も薄い風船胸に持つ

直ぐ切れる糸で紡いだ命綱

富田林市 古田 千華

それぞれのバッグに扇子クールビズ

世間さま知らぬふりして笑つて

薔薇園の赤白黄色自己主張

炎天下ハマナスが待つ日本海

十五夜に長い二人の影法師

寝屋川市 岡本 勲

変人奇人競い合つて阿波踊り

見て見ない振りしてチャンと見てる父

どれがどう効くのか薬タントくれ

都会のトゲ抜きに田舎へ独り旅

したたかに昭和を生きて今がある

寝屋川市 長濱 賢山

どの顔も明るい朝のランドセル

人間を失いそうで花植える

老いてなお両手に余る父の夢

生きているうれしさ朝の茶がうまい

よく効くとあるが治ると書いてない

羽曳野市 吉村 久仁雄

人間を創った神の忸怩たる

そば打って碁を打ち老いて打つくさび

辛い水飲んで世間を知る蛭

うわばみの僕に刺客の森伊蔵

善人と誤解をされてから落ち目

羽曳野市 森 下一 知

言い訳を遮る妻の塩加減

里からの電話酸素が満ちてくる

縁日の夜から棲みつく金魚鉢

運命を妻に任せる二日酔い

親離れ渋るニートに蒙古斑

枚方市 二 宮 紫 鳳

紫陽花とベストショットの三室戸寺

蓮の香をかいで菩薩の域に入る

紫陽花に負けじと咲いた傘の花

檜扇を活けて祇園は夏に入る

打ち水に風鈴鳴らし背戸の風

枚方市 小 林 和 子

靴音を猫は聞き分けお出迎え

梅干しに勇気貰って咬む命

笑った泣いた日記はみんな知っている

瞳の奥に思い出カメラしまつとく

プレゼント包装紙にも顔がある

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

温かい家族揃って今日暮れる

三分の主役私の晴れ舞台

我慢にもほどがあること教えてる

大口を叩いた後の締りなさ

頑張った父さんだから今がある

藤井寺市 西 村 栄 一

おとぼけのうまさもさすが年の功

平凡な一日でした秋の空

ちっぽけな悩みを論ず澄んだ空

逃げ道をふさぎ明日へ賭けてみる

披露宴花よめさんはよく食べる

藤井寺市 俣 野 登志子

噂ばなしに尾ヒレ付けたの誰ですか

ひと月分の家事した気分梅雨晴れ間

過保護だと言われようとも孫の顔

込み入った話に脳が回れ右

歳聞いて驚きました顔の艶

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

好きだよと言わずに逝って三年目

袋小路信如と遊ぶ夢の中

愚痴言う猫は尻尾で駄目という

電話の声あまりきれいで逢う不安

病癒え生命線が伸びできた

藤井寺市 吉 田 喜代子

梅雨晴れ間愚痴もついでに干しておく

限りある命も延ばすストレッチ

たまの暇家事は横目に昼寝する

にが瓜をすだれ替わりに暑い夏

隣国からきな臭い風吹いて来る

箕面市 寺井柳童

新緑が包む一山勝尾寺

丁寧に洗車 決つて黄砂降る

生まじめに駐車違反のステッカー

降りる階押すと天まで停まらない

総裁戦誰が勝つても後を引く

八尾市 田邊浩三

3DK孫ら上手にかくれんぼ

携帯でわが子を探す遊園地

座禅組む格好だけは悟り顔

愛の鞭今はうつかり振れませぬ

地球儀を抱いて夏場所見えています

八尾市 脇俊子

踏んばつて生きた証は汗ひかる

気持ちだけゆれて足元自己嫌悪

今日のこと今日で帳尻合せとく

空つ風逆手に掃いている私

水上げぬ生け花に似て四面楚歌

八尾市 平川幸枝

陽は西に見つけてくれぬ隠れんぼ

空元気鞭は地面を叩くだけ

ゲンマンの約束指が覚えてる

脳と声ギャップがあつて甲高い

子は巣立つ渡る世間に含羞草

八尾市 西川義明

夏バテにスッポン鰻マムシ酒

身の丈に合つた暮しの中ジョッキ

京の床早くも並ぶ風物詩

いつまでも君ひと筋とデカイ嘘

子の心親が見抜けぬ核家族

大阪府 小栢こずえ

ふき出る汗元気の証野良仕事

米つくりするからごはん大好きだ

焚き上がるごはんの香り惚れている

働いた農婦にほうび雨が降る

夕やけが今日の元気をほめて燃え

神戸市 両川無限

モナリザが額抜け出して泣いている

その時は気付いていない愛のムチ

アリバイをひねり過ぎるとボロが出る

情熱が冷めた頃から太りだす

替え唄のほうは覚えている唱歌

神戸市 木村忠義

冗談も出て笑い合う回復期

梅雨晴れ間外の空気を吸いに行く

雨の中オーキングするのも楽し

西瓜選る育てた方の写真見て

蝉時雨あれば父へのレクイエム

尼崎市 小池 幸子

道端の花微笑んで雨あがり
歳重ね生きた証の背が丸い
寮歌祭やぶれ帽子にある誇り
万歩計一度も万を越えてない
もう一人産みたかったと老いの愚痴

加東市 黒崎 美紗子

朝が来たカボチャ黄花に元氣出る
遠足の明日を夢見る菓子売り場
無花果へ私と烏熟れる待つ
雨もよしのんびり休む畑仕事
祭りには火花あがると招くふみ

篠山市 谷田 多美子

白寿まで夢を見てます八十歳
山百合が咲いて亡夫を思い出す
つらい事こえてうれしさ倍になる
雨の音聞きつつお湯に浸る幸
晴れ舞台鼻の頭がかゆくなる

三田市 阪本 藤朗

饒舌な古女房の顔見詰め
木霊にも真似されている老いた声
面倒な種も要ります西瓜の絵
平等にケーキ切れずに孫の顔
レシビには腕前要ると書いてない

三田市 白井 二英

他人目にはひとの悩みは見えてない
この年齢で煽てられたらすぐに乗る
冗談の中に本音を潜ませる
感性のちがいが分かってハツとする
こちらから仕掛けなくても突いてくる

西脇市 七反田 順子

国内は何時でも行けるまずはパリ
来客に嬉しい悲鳴小半日
五分刈にされて拗ねてるうちの犬
一言に笑いが飛び火輪になった
生姜飯ブルーな気分忘れさせ

奈良市 矢野 良一

プレゼント孫への返し高くつく
恋しくて何度したろう途中下車
付き合いが良いと言われて午前様
誰を待つ野辺に一輪鬼あざみ
毎日を薬頼みで生きている

生駒市 小西 稔

麦を踏む姿も消えた田舎道
同じミス踏むこと無きと祈る日々
病氣して健康のよさ知らされる
気まぐれの旅で心が癒される
まぐれでも当ればよいと籤を買う

和歌山市 土屋 起世子

母だから乗ってやりましょだまし舟

これからも人という字で支え合う

ほどほどの幸せ今日も缶ビール

平凡な暮しでうまいにぎりめし

もったいないよく言う妻のゴミ袋

田辺市 大峠 可動

罪と罰真つ赤に溶いて曼珠沙華

躓いて老いの入り口身を倒す

女の旅路男の旅路炎天下

改革を追うて日本くたびれた

逆説も自説も民に返すべし

和歌山県 辻内 次根

定年のない関節を撫でている

年金の暮らし酸素が薄くなる

炎天下はくが乾いてしまいそう

バリカンのまだ現役でいた故郷

意のままに暮らし猫背になっている

和歌山県 木村 徑子

少年も父も哀しい大惨事

一触即発世界もうちも抱く火種

日本語のキャッチボールで温い部屋

真夏日に右脳左脳も空回り

みどり児と瞳と瞳で語るテレパシー

和歌山県 宇野 幹子

寄り添えばこんなに温い人と人

愛という財産惜しみなく残す

空腹を知らぬ心が飢えている

あかんと一歩引いた時から負けている

嘆れの森の叫びよ命とは

鳥取市 山岡 紀子

さわやかに踊るワルツに汗をかき

つじつまを合わせる嘘に汗をかく

失恋でやさしくなっていく女

通販の服が泣きベソかいている

人間の勝手で雨を待っている

鳥取市 近藤 秋星

辞書にそう書いてあるからそうだろう

死ぬために人は生きてる生まれてる

納涼祭踊りましょうと輪になって

逝く夏の哀歌奏でる蜩よ

巣作りの名人蜘蛛は芸術家

倉吉市 前田 喜美子

感謝して感謝されたい欲もある

ねぎ刻む音も可愛いお嫁さん

瞑想中いきなり呼ばれ句が散った

看板を見ながら歩く一人旅

古希すぎて趣味も似通う三姉妹

境港市 遠藤 那珂子

朝の陽に野良着もしゃんと背を伸ばす

青空の下で病む身を嘆いてる

幾山河顔の皺にも輝きが

初体験手術の前のこの不安

亡父母がきつと守ってくれている

米子市 小塩 智加恵

空気読む女の五感冴えている

隣との塀高からず低からず

逢うたびに会釈をくれる知らぬ人

黄色好きだし巻き玉子大好きだ

夫から生かしてくれてありがとう

松江市 松浦 登志子

夏色の花あしらって渡る橋

いつだって親の声援熱くなる

婚約に嬉しさもあり寂しさも

竹籠でたとえ届いた夏野菜

検査終え今日一日は無礼講

雲南市 福岡 博利

風が好き背中押しくる風がすき

どたん場だ白紙で望むことにする

思い切り赤を着ようかあと少し

物忘れやがて優しい風が吹く

書道展燃えさせるもの余白の美

雲南市 武島 ちよえ

止り木はもう選ばない傘寿です

承諾はせずに笑顔で受けておく

こんな時亡夫が居たらなと思う

娘が去ぬる両手に余るほど提げて

物忘れ口がサポートしてくれる

雲南市 近森 功

ジョギングが俳諧となる祖父の足

ダイエットおへそも見せるコマーション

フィルタまで吸って値上げに挑戦し

夕焼けにテルテル坊主ほほを染め

明日もある命へつなく酒二合

宇部市 高山 清子

一寸先見えれば夢は追いかけぬ

飲みこんだ本音が喉にひっかかり

逆らって見たい日もある風車

ライバルと同じ目線に椅子がある

溝が出来た二人尊敬語を使い

今治市 渡邊 伊津志

左手は大事な人の為にある

物言わぬ父は我慢を教え込み

慌てまい運も不運も回りもの

人思う心が覗く有難う

健康が一番今日もそう思う

香南市 百田 幸

シドニー 三谷 たん吉

良い言葉頭の中へメモしよう

雑草は踏まれるたびに根を広げ

五十年空気の夫婦まだつづく

日々多忙これが生き甲斐かもしれず

鈍感をモットーとする姑もいる

山鹿市 松岡 純子

省みて言えぬ身なれど言う小言

揺れ動く心かかえて生きてます

可愛くて怒れませんよその笑顔

麦の秋いちめん黄金豊かなり

我が心紫陽花色に七変化

山鹿市 阿部 ミツ子

土の家設計ミスか巣が落ちた

ツバメさんそこは危ない隙間風

草刈りにドクダミ草と根くらべ

イヌ年にまた来るイヌに逢えるかな

七夕や願い空しく姉が逝く

シドニー 坂上 のり子

つかの間の再会だった遠い道

外国語ところで話さねばならぬ

損や得ばかりで心寂しがる

子の目線でもっと優しく見ておやり

色彩のセンス野鳥を観てごらん

おこらずに厳しく叱れ子供には

どなつたらすつとする親傷残す

小さい子なんだかみんなかわいそう

日本海ひとを頼らず守りぬけ

騒がれてほんとの自分見失う

シドニー 森本クックバラ

嵐去り碧天高く月わらう

脳味噌にや増えない皺が顔に増え

無反省修行重ねて政治家に

政治家も賞味期限で消えるべし

クールビズ留置所を今出てみたい

シドニー 内山 佳代子

眠れない夜のお伴にハーブティー

モーツァルトやさしく眠り誘いだす

髪とかしスカーフを巻く祖母傘寿

星屑のカーテンゆれる田舎道

ターザンの彼がだんだんブーさんに

メルボルン 藤原 ボン吉

青ざめたサムライやはり蹴散らされ

外交の最終カードプレスリ

抱っこして息子の重さ心地よい

グラランドで子供と流す汗キラリ

低燃費それは困るとさする腹

寝屋川市 北田 ただよし

背中へは人の言葉がよく刺さる
カレー作りネットのレシビそのままに
何にでもアタックかける猫の爪
降りる駅一つ手前でウォーキング

横浜市 巖 田 かず枝

キヤスターの顔が陰しくなるニュース
リウマチはほけぬと慰められてる
ブローチにしたい蛙に出会う梅雨
審判も選手も走るひた走る（W杯）

大阪市 伏 見 雅 明

よくひびく声で囁く内緒ごと
目玉剥き無念のままで一夜干し
会社では豪腕で鳴る恐妻家
催促をされた蕎麦屋は出たところ

松江市 山 根 邦 代

雨の日が雨でなくなる笑い声
気負わずに話が出る人が好き
赤い花今年も咲いて母のこと
菓子鉢が話し上手を待つ笑顔

枚方市 小 川 良 吉

喜寿近し染み皺ふえてケセラセラ
ケイタイが家族の絆薄めてる
かあさんと妻を呼んだは何時からか
社会面見出し見るだけ暗くなる

愛知県 八 木 百合子

みどりごの笑顔の中に見る仏
ただ酒の怖さ知ってるコップ酒
梅雨晴れへ竿の足りない布団干し
家中の健康あつて続く趣味

和歌山市 山 田 侃 太

企画書に男の意地が滲み出す
侍が去って明日が見えぬ社史
出生の秘話です父母の恋愛記
恋人は目隠ししても見える人

東京都 笠 原 乃りこ

横に乗る無料カーナビうるさすぎ
貧しくも気高く清く生きて今
胸焦がす相手タレント罪がない
嘘に塗るまつ赤なルージュ苦い味

鳥取県 橋 谷 静 江

お疲れが一晩寝ても取れぬ歳
クーラーで寝つきクシャミで目を覚ます
バラの香へ棘の痛みも忘れてる
花作り好きで友達増えてきた

加東市 安 達 厚

出てこない名前隣にそっと聞き
村だった頃がよかった里の山
雨蛙いたのか雨に知らされる
水くさい食事で長寿強いられる

檀原市 藤 永 実千代

和歌山市 根 田 よしこ

剪定を免れ花の恩返し

合いの手を入れて一人のラジオ聴く

優秀な親子にもあるプレッシャー

拉致家族目は真実を訴える

羽曳野市 福 田 悦 子

雪月花九月は月で酒を飲み

親の見栄節約しても行くハワイ

亡母の形まだ出来ませんにぎり飯

ペットボトル麦茶離せぬ夏終る

池田市 多 田 契 子

寒色系好きですがまだ着たい赤

はんなりという京の色さがしてる

御用心あたふた歩くその背中

つつましく挨拶だけでつなぐ縁

横浜市 長 島 亜希子

子育ては難しいなと聞くニュース

忠告はやめておこうかよその子だ

知らぬ間の増税不安募らせる

動物病院増えて小児科減ってきた

大阪府 高 木 道 子

せせらぎのような手口に流される

風鈴を捉えて鳴らす梅雨の風

はじめに爪先歩きの猫がゆく

六十路坂後の祭りを繰り返す

癒される天下一品孫の顔

世話好きも過ぎればただのお節介

エレクトーン手足と口の呆け防止

老母と娘で労りながら愚痴こぼす

大阪市 島 田 誠 一

妻だから運転出来る火の車

不景気に両手をあげる招き猫

病氣持ち自慢のような待合所

横車押した分だけきついツケ

出雲市 荒 木 英 子

花に囲まれ長生きしてる暢気もの

夜明けから感謝忘れずウォーキング

頼もしい福祉バスのりい仲間

今日もまた命があつて花に水

出雲市 川 島 和歌子

瑠璃色の茄子の初生り光る露

散水のホースの霧に虹が立つ

耳寄りな噂拾った散歩道

見舞客愚痴をこぼしに來て帰る

山鹿市 栗 川 四代目

持ち上げて手の平返すマスメデア

我が老後国が手を退く町も退く

頼みます向こう三軒両隣

寝顔まで眉間に皺をよせる妻

可児市 鶴留百合

再検の通知気分は病人に
紫陽花は晴れにも魅せる七変化
見ないふり耳はしつかり立てたまま
バーゲンで選ぶ目光のおしゃれ好き

静岡市 中西雅

前頭葉切れ味鈍く九十代
梅雨晴間心の湿り吹きとばせ
茶柱を信じる朝の新茶飲む
遠花火留守居の老いに音ばかり

尾張旭市 三浦きぬ

流行は無駄を生み出すものを知る
あの世とは流行すたりのない世界
眼鏡かけルーベ覗いて読む活字
よくもまあ生きて来ました不思議です

北名古屋 片岡文男

妻の留守セールス電話しか来ない
震度六サムライブルー負けた朝
意気込みでどうにもならぬサッカード
鼻の穴きれいにしてく歯科の椅子

京都市 西村益子

同窓会今年も参加出来ました
蚊の餌になりつつむしる庭の草
カレンダ―の自分で書いた字が読めぬ
いやな事明日にする癖直らない

大阪市 平井露芳

梅雨入りと言った途端に雨降らず
総裁もやっぱり諭吉欲しかった
何時の間にオレにも付いた高齢者
下手なりに歌ほめられていい気分

大阪市 平嶋美智子

色も褪せず母の形見の紺紵
夏野菜のカレーを炊いて里恋し
古里は悲しいほどに荒れはてて
うまい水うまい空気のある田舎

大阪市 吉内福世

梅雨だから派手目の傘に買い替える
インフレやデフレ景気とゆさぶられ
曇り空紫陽花だけはピンク色
風鈴の微かな音で癒される

泉大津市 助川和美

背に夕日畑のトマト挽いで母
蟬の声いまだ終戦忘れえぬ
大盛を買ったトマトを腐らせる
ケータイで喋る時だけ友がいる

河内長野市 木太久正一

ひとごとのような金婚長寿かな
この暑さ老いにきびしく当りくる
健康の話互になぐさめる
不注意で妻を迷子に天王寺

河内長野市 黒岩靖博
退社後の憩いは何時も縄のれん

あいまいな男 女の多いこと
甘辛のくぎ煮はその家の味
人生は浮きつ沈みつ川下り

河内長野市 宮守正博

去年より綺麗になったと言ってみた
咳一つもしやと思う母九十

プロみたい誉めてあげたらプロだった
彼の岸へもって行きたい過去もある

河内長野市 内海綾乃

早朝から草刈機音やかましく
騒々しい旦那の帰宅静かなり

合鴨を楽しく眺め田の中を
前頭葉クロスワードでみがきかけ

岸和田市 中岡香代

捨てにくい子供の机ランドセル

少子化で広く思える兎小屋
核の道選んだ先は生き地獄

歌声に泣き声まぜる演歌歌手

堺市 荻野象山

総裁と予報士似てる無責任
責任をとらぬ頭が垂れている
長生きをするなとばかり薬代
絶食の上に生き血を抜く天使

まな板の鯉にはなれぬ手術台

麻酔覚めまず確かめる五七五
病室へ人情の機微様様に

肩書が消えて肩の荷軽くなり

堺市 阪井智之

病い経て息子との距離縮まった
人は皆修羅場を踏んで強くなる

新雪に足跡つける心地良さ
一言が耳に刺さってうなされる

豊中市 荒巻夢

かまきりの子どもを見たよ風に揺れ
眉墨を足して闘う顔となる

寝て食べて泣いて笑っていいらしいね
満月に心の中を見透かされ

豊中市 神野宇乃子

風鈴をうるさいと聞く歯の痛さ

音消せばトーク番組間が抜ける
通販の品なんとなく欲しくなる

デジカメで試写した妻はすぐ消去

寝屋川市 森田麗

よく噛めと砂時計にも睨まれる
誕生日薔薇百本は無理ですか
一応は子の親無茶ができません
七癖の一つ直すも処世術

羽曳野市 永田章司

お見舞いを断る友が気にかかる
改革の痛み家計は火の車

歳かいな病氣かいなと思案する
まぐれです謙遜の裏自信見え

羽曳野市 松本静子

夏祭りユカタの二人下駄の音

はたる舞う古里今は遠くなり
窓ぎわのあじさいで鳴く雨蛙

からすがきて畑のトマトかじつてる

藤井寺市 津田シルク

化けるのも限界来たと古鏡

雷鳴に泣き泣き帰るランドセル
猫社会も大変らしい野良やせて

目まいかと思えば震度二の古家

八尾市 笹倉ひろし

下手な世辞よりも笑顔の方が利く

矛盾した心を持ってウツになる
万歩計美人に出会い今日も躁

縄のれん愚痴を肴に義兄弟

八尾市 田中トシエ

家々の匂いが好きな裏通り

水鉄砲真昼の庭に虹を生む
四捨五入四捨の世間にある温み

説明に変えて言い訳押し通す

八尾市 中島春江

線香花火したころ多くいた家族

農園の枝豆があるカンピール
無料という誘いに少し身構える

ゴミ収集共に捨てたいストレスも

大阪府 若月祐作

散り急ぐことはないぞと言いつ聞かす

玄関に金のある木を植えてある
剪定に磨きをかけて姿よし

手をかけるほどに植木はものを言う

大阪府 畑中節子

てくてくと自分見つめる旅遍路

山頂の空気を吸って無に帰る
おしゃれして顔もよそ行き今朝の紅

不揃いの胡瓜もうれし糠漬に

大阪府 西川冷子

活けいかの透明にして姿盛り

水害の跡生々し城下町
ミサイルが我が旅邪魔す日本海

海静かけれどテトラの底うなる

大阪府 大屋敷 婦美子

脳てんき川柳塔誌でみたされる

視点かえ裏あり表はざまあり
それぞれの人間模様幸祈る

あるがまま老いなればこそうけいれる

神戸市 武田 惠美子

観光バス食べてはねてる二人旅
目の中に入れては痛いなめまわす
あじさいとおなじくかわる孫の顔
音程がくるつていても酔いしれる

尼崎市 河津 正治

気のおけぬ仲間と交わす古稀の酒
慣らされて虚空を睨むホタル族
絶叫と歓喜に濡れる川下り
会者定離敬語をうまく使い分け

尼崎市 桑 原 東 園

忘れてもよいことばかり覚えてる
しゃぼん玉飛ばそ小さな夢込めて
待ちぼうけもう雨傘も重くなる
腹立ちにドンと鳴らしてみろ花火

尼崎市 古川 正子

小さい星一つ見えてる明日は雨
目の手術すんで肩の荷下りました
爪切草咲き次は知らない花並ぶ
厄年か何処か悪いか疲れます

加東市 岩 本 美緒子

お絵かきは主婦らの余生週一度
生き重ね描いて哀楽手漉紙
簡単に百までなんて恐ろしい
朝寝ぐせ辛いボランテア続けてる

三田市 辻 開子

豆台風祖父母の夏を狂わせる
亡き母の声が聞こえて義母介護
介護の手生きてほしくて続けてる
晩酌をたつぷりそそぎ仲直り

三田市 上 垣 キヨミ

うちわ蚊帳打ち水をして越えた夏
不祥事に五秒頭を下げるだけ
字のくせは昔のままの旅便り
まだ夢は捨てぬ今でも好きだから

宝塚市 丸 山 孔 一

保険では傷の痛みは消せません
恋の鍵捨てて閉め切る過去の窓
返不要言いつつも待つメール待つ
厳かに呉越同舟高野山

宝塚市 河津 寅次郎

頑固者煩わしいが頼もしい
ボンと膝打った着想先越され
老医者 of 気風に命あずけます
今日もまた背筋伸ばさぬまま暮れる

西宮市 藤 本 直

大海の鰯であれど群れはせず
虐待か嫉かど聞く反抗期
よう生きた清く正しくさておいて
老骨と言えどしたたか骨太で

金髪にしても体型日本人

西宮市 石野 照代

ゆかたきてすこし女を取りもどす
いやなこと蛇行しながら流れゆく
目標をもって苦勞は氣にならぬ

兵庫県 永井 かほる

ほどほどのおしめりで草生いしげる

朝二時間汗びつしよりの野菜世話

リハビリと思えば世話もたのものしい

収穫はお礼い一つ取って行く

奈良市 尾畑 なを江

朗報が飛び込んで来た熱帯夜

隠すもの自慢することなくくらし

握った手離してくれぬ魔女が居る

見渡せばあまり変らぬ暮し振り

和歌山市 たむら あきこ

風鈴の下に聞こえてきた噂

片付いているから居心地が悪い

にんげんのかたちを探す流れ雲

まだ夢の続き変換キーを押す

和歌山市 坂部 かずみ

領いて他人同士も道ゆずる

形から入りネクタイ締めなおす

長雨のチャンス生かしてするさし芽

糠漬けのナスも色よく元氣でる

一言の金言となるただの人

和歌山県 村中 悦男

決断は少しぬるめの風呂がいい

チャンスとは他人が知って惜しむもの

老妻の愛を病で倍を知る

海南市 小谷 小雪

自信ないこともシグナルかも知れぬ

梅漬けて娘の吉報を一人待つ

ちらしずし作るよ盆にお帰りよ

君に逢い生きる自信がついた夜

鳥取市 岡田 信恵

響き合う心と心介護の手

来客に裏声出して愛想する

バーゲンの一目ぼれには落し穴

玩具箱子どもの夢が詰まってる

鳥取市 横田 春名

親思い粒の揃った我が子達

停年だ気合を入れて歩こうよ

活火山抱く老妻もてあます

目が肥えて縁をつぎつぎ遠ざける

鳥取市 中宇地 秀四

生命線越えて平気で生きてます

もう一杯薬と毒の曲り角

熱帯夜ふらふら回る扇風機

心では許し顔では激怒する

鳥取市 山口 千代子
ベランダで空見てふかすパパの背な

一筋に夫を信じ五十年

美味しいとお茶飲む夫もう居ない

叫んでも泣いても母は逝ったきり

鳥取市 谷岡 清子
お願いと一日の欲経にこめ

移りいく四季の早さに後れがち

改革は老いにきびしいやせていく

あじさいをめでて一時気をはらす

倉吉市 酒井 美美子

メダカ居る川へ笹舟浮かべたい

触られた手の温もりに愛感じ

ほろほろになって初めて我を知る

不合格自信の鼻が折れ曲がる

倉吉市 福光 京子

盆に来る西瓜と並び経あげる

ままごとをしているような寺の膳

あらかじめ帰省の予定聞いておく

古希過ぎるこれも後厄友が逝く

境港市 中井 虎尾

人波に押されているが皆他人

エレベーターなぜか気になる会社の名

さす人をのぞきたくなる蛇の目傘

水打てば気持ちいいよと石の声

鳥取県 岩崎 和子
握手する右手の老化恥しながら

箱庭のような我が家に花が咲く

三猿の真似で生きよう思うとき

すれ違う車種や色見てはしゃいでる

鳥取県 小飼 和代

名水へ冷やした西瓜舌づつみ

人相も喜怒哀楽へ七変化

海外へ翔んで心の錯落とす

フォーマルな装いやさし百合の花

鳥取県 岡村 孝明

ボケ防止手頃な遊びグラウンドへ

靖国へ触れずビジネス足しげく

少子化へ苗木二本を育ててる

夢描き色づけ少しずつしてる

鳥取県 大田 勝誉

きっぱりと姑の匂いの布団捨て

交代の時期を待ってた城がある

居すわって交代せずに逝った姑

面倒な事はまっさき済ませたい

松江市 相見 柳歩

恋人に湯あたりしてはいけません

来世への希望を持って今生きる

声変わり柱に傷をつけた頃

幼子の言い訳ならばちゃんと聞く

松江市 柏井 日出子

ナツメロでデイスコダンスよああ愉快
向日葵が燃えあゝの世びと目を覚ます
特急号過ぎれば夏の海そこに
太陽のお蔭嬉しくなるこの世

雲南市 菅田 かつ子

井の中を出るとお洒落の眩しすぎ
こんなとき見せる笑顔の温かさ
一つずつ忘れ楽しく生きている
留守番も時に用事で不在です

安来市 原 煩惱児

プロポーズ言わず聞かずで金婚に
本山で理屈はいらぬ座禪組む
爺婆が四人揃えば孫話
結局は財布を空にした叙勲

府中市 岩本 雅代

頬杖をついて思案に暮れる雨
同窓会嬉しく弾む衣に悩む
カレンダー曾孫見る日に花咲かす
古通帳利子が子を生み大家族

東かがわ市 中塚 寿々女

再雇用妻の声援追い掛ける
早咲きの押し花添えて春便り
口ゲンカ急所は別に取って置く
急がずに孫子の後についてゆく

もてあましぎみの体をいとおしみ
決心は九十までのわが生命
嫁がずに親孝行をしています
涼風にゆったりきたり赤とんぼ

唐津市 岩崎 實

堺まつり協賛 秋の誌上川柳大会

投句締切 10月10日(火)
用紙 各題毎に便箋の左右に2句
ずつ(4枚使用)、番号で整
理するため便箋には記名し
ないで下さい。

題と選者	各題2句	
「夢」	山本希久子 高瀬霜石	共選
「ゆっくり」	松本文子 川上大輪	共選
「命」	奥田みつ子 小島蘭幸	共選
「拝む」	森中恵美子 河内天笑	共選

投句料 1000円
投句先 〒593-8305
堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会
TEL・FAX 072-278-4706

お知らせ

このたびの主幹・理事長選任投票の結果
は次のとおりとなりました。

主幹	河内 天笑
理事長	西出 楓楽

正式決定は同人総会の承認後となります。

川柳塔社

僕はミラクルマン

高瀬 霜 石

本誌の平成十五年の八月号に、生まれて間もない時に小児がんにかかったが、運よく生きのびた話を「僕はラッキーマン」と題して書かせてもらった。今回はその「続き」です。

三十年前の小児がんのデータ。確か「五年生存率は一割弱」だった。つまり、大体の子はアウトだったわけだが、今はなんと七割以上が治るようになったというから凄い。

「がんの子供を守る会」の会員は、がんで子供を亡くされた親御さんが大多数である。僕も趣旨に賛同し入会した。三十年が過ぎた。

ある日、ふと思った。僕が「元気に生きている」そのことだけで、ひよっとして同病の後輩(?)たちや、親御さんたちに勇気を与えることができるかもしれない。もしそうなら、こんなにラッキーなことはないなと。

会報誌に「僕でよかったら、どうぞご利用下さい。どこへでも手弁当で行きまっせ」と書いた。小児がんの子を持つお母さんから、

是非会って話したいということで、青森や盛岡へも足を運んだ。とても嬉しかった。

そんなある日、僕より年が一回りほど上の(昭和十三年生)埼玉県に住む佐藤さんという同病の男の方から手紙が届いた。

「この病気は小児がんでも特殊な病気。私が今日まで生きてきてこの病気の持ち主(?)に出会ったことはありません。貴方の年代の生存率は、奇跡に近いと思います。どうか今後よろしき友としておつきあい願いたい。できれば一度会って、ゆっくり話したい」

僕は、自分というのナンだが、とても人見知り(誰も信じないが)で、正直困った。誰だつて、わざわざ上京して、見知らぬオッサンと会って話すなんてのは苦手でしょ。

ところが、僕の連れ合いが「せっかく先輩の佐藤さんがそう言うのだから、会いましょ」と言う。ぐずる僕に「アタシも一緒に行くから」と、心強いことを言うので、会いました。

佐藤さんは、酒も煙草もやらぬ真面目な人で、煙草は止めたが酒は毎晩欠かさない僕に「小児がんにかかった人は、がんの抑制遺伝子が欠けているから、普通の人は違うのです。もっと気をつけないと」と叱つてくれた。

その彼が、この五月、「日本一の桜」見物に弘前にやって来た。高速バスツアーで、朝

の六時に着くが会えるだろうかの電話。

「勿論。それで、帰りは？」と聞く。

「八時」「随分と強行軍ですね」「そうだね」どこへ連れて行くのか。昼はあそことあそこ。

こ。夜はやっぱり津軽三味線だなと、考える。

「なにせ、正味一時間半しかないから」と突然言うから、こっちは「ナヌ？」である。

深夜、埼玉を出る。高速に乗り、一路弘前へ。その後、あちこちの桜を訪ね南下するツアーなんだとさ。結局彼は、朝五時に着き、僕らと公園を散策し、七時に発って行った。

この話を友人にしたら「なんだよ、そのツアー。津軽塗りも買わず、りんごも齧らず、ただ弘前公園を素通りかよ」と憤った。

でも、地元人間がとにかく親切にすれば、夏のねぶたでも、秋の十和田湖、白神でも、冬の雪灯籠まつりでも、とにかくもう一回ゆっくり来てくれると、僕は信じているのだ。

「あなたは運がいい子」と、小さい頃から言われてきたので、自分で自分のことを「ラッキーマン」と名付けてきたが、佐藤さんと会ってこの際改名することにした。

新しい名前は「ミラクルマン」。それを名乗る前に、まずは節制しないと駄目なのだが。

愛染帖

新家 完司 選

西宮市 牧瀬富喜子
なる程と聞いている間に貧富の差

(評) 格差が顕著になってきたのは、個人の能力を超えた「政策」が作用しているのか。

逆上がり出来る六十路に職がない
弘前市 高橋 岳水

(評) 体力も気力も能力も、若者たちには負けない、と自負しているのではあるが…。

DNA確かに孫はよくしゃべる
和歌山市 楠見 章子

(評) 遺伝子の仕組みなどはよく知らないが、舌の回転の速さは、確かに一族の血。私の血。

頃合いに寄るがビールは出てこない
大阪市 岩崎 公誠

(評) これで何度目？ 先方はビールが嫌いなのか、それとも、歓迎されていないのか。

テポドンが飛んできそうな空模様
和歌山市 福本 英子

(評) 「テポドンが降ってきそうだから傘を忘れないように」ともゆかず、困ったものだ。

和歌山県 三宅 保州
由緒ある家柄だけど火の車

播磨市 居谷真理子
渾身の作を器用とほめられる

八王子市 播本 充子
母の忌よカボチャの花が咲いている

和歌山市 喜田 准一
介護車とだけすれ違ふ過疎の町

奈良県 渡辺 富子
田舎町有名にする大事件

奈良県 渡辺 富子
好きな顔嫌いな顔もみな仲間

大阪府 小谷 集一
好きだからセクハラだとは思わない

池田市 北出 北朗
将来の不安など無い猫の顔

和歌山市 木本 朱夏
忍者かと思えばひらりと黒揚羽

東京都 岸野あやめ
にんげんの脆さをわらう鯛の骨

鳥取市 岸本 宏章
六法全書よりも生活笑百科

京都府 中野 六助
首締める手前で止まるループタイ

図書館は働き盛りばかり居る
三田市 堀 正和

ひらがなになってしまった本籍地
女文字中身はきつと請求書

高槻市 瀧本きよし
庭の植木はつたらかしの老いふたり

京都府 籠島 恵子
うさばらし息子の竹刀振ってみる

シドニー 坂上のり子
服いっぱいあつても着るのきまつてる

高槻市 傍島 克治
嫌な奴だ相手も俺が嫌らしい

交野市 田岡 九好
お隣に男世帯の皿の音

香南市 桑名 孝雄
頃合は卒寿と決めてあるけれど

ウオーキング三里に灸を据えてから
尼崎市 長浜 美籠

情人れぬよう簡略に書く手紙
せつかなところも生きている証

美作市 小林 妻子
晩酌は独り 胡瓜丸かじり

豊中市 安藤寿美子
言付けが来る田圃から畑から

和歌山市 古久保和子
親切な人善人とはかきらない

イケメンのセールス丸めこまれてやる
広告の裏でも書ける直木賞

アイスキャンデーならばやつぱり炎天下
松江市 津川 紫晃

いい人に会って時計がじやまになる
最初はグーだんだん肩の凝る電話

和歌山市 田中 みね

揚げ足はよくお調べになつてから
糠床のナス笑つてゐるいい朝だ

藤井寺市 太田扶美代

三日目に飽きたきれいすぎる景色
コーヒーと薬一緒に飲んでみる

寝屋川市 森 茜

相槌もしどころに炎天下

堺市 加島 由一

夏祭り男は高いところが好き

和歌山市 たむらあきこ

ビール傾けて花火の音を待つ

茨木市 藤井 正雄

出席は顔ぶれ聞いてから決める

倉吉市 野口 節子

善人の振りが息切れしてきたよ

唐津市 樋口 輝夫

二次会になつて恩師はひとりぼち

松江市 三島 崧丘

ウミネコに成りそこなつた飛ぶ魚

東かがわ市 池内かおり

気に入つた写真めつたに下さらぬ

高槻市 左右田泰雄

折りたたみ傘では防げない嵐

唐津市 市丸 晴翠

子等巣立ちベジタリアンになる夫婦

今治市 渡邊伊津志

点滴の滴が虹を映し出す

出雲市 園山多賀子

記念樹を仰ぎ背伸びを強いられる

唐津市 仁部 四郎

物産展法被が似合うおらが知事

東大阪市 北村 賢子

遠ざかる背を背伸びして送る母

鳥取市 中宇地秀四

夢がある時間もあるが金が無い

富田林市 中井 アキ

無欲にはなれず眼鏡が外せない

大阪市 前 たもつ

がまん強さクモと守宮のいい勝負

和歌山市 武本 碧

他人から見ればのどかな家族の絵

尼崎市 春城武庫坊

鶴を祈る手順忘れて老い自覚

八尾市 高杉 千歩

パソコンに入れたがプリンター故障

米子市 政岡日枝子

枯れかかる老樹の肌を撫でてやる

神戸市 田中 章子

雨の日はプラス思考のジャンプ傘

鳥取市 福西 茶子

嫌われることは覚悟でする嫌

弘前市 福士 慕情

慶弔の弔の袋がよく歩く

美作市 山本 玉恵

歳はかくせぬ手の動脈の浮きあがり

大阪府 米澤 偲子

宣伝の化粧品でものびぬぬ

大阪市 川原 章久

人並みにコーヒー沸かしパンを焼く

倉吉市 松本よしえ

三つ編みの頃に出逢つて幾山河

羽曳野市 吉川 寿美

無欲にはなれず白足袋汚れてる

和歌山市 坂部かずみ

長雨で寝ころんで聞くモーツァルト

岸和田市 中岡 香代

父に似たこの性格を父嫌う

鳥取市 福田 登美

借りのない分だけ地味に暮らしてる

八尾市 吉村 一風

のみ屋でもちゃんと序列のあるらしい

大阪府 澤田 和重

フェロモンの効果が男寄つてくる

富田林市 片岡智恵子

張り合いもなく床を出る雨の朝

吹田市 早泉 早人

ほろ酔うてダンス教室見て帰る

羽曳野市 森下 一知

関わりを嫌う隣のドアチエーン

東かがわ市 川崎ひかり

順調な時はひとりもいいもんだ

鳥取市 倉益 一瑠

夕焼ふんわり着地するつもり

黒石市 相馬 一花
山菜の宝庫で睨むクマの糞

加東市 黒崎美紗子
合併で聞き馴れぬ名へかしこまる

三田市 北野 折男
和尚にも一句聞かせて法事済む

島取市 有沢せつ子
大工さん槌よりラジオよく響く

交野市 山川日出子
れもん湯で天国のゆめ見ています

大洲市 中居 善信
いのち万歳日の出の頃に歩いてる

奈良市 尾畑なを江
毎日が休日となり忙しい

枚方市 海老池 洋
入門書三日坊主を積み重ね

境港市 遠藤那珂子
この辛さきつと肥やしにしてみせる

泉佐野市 稲葉 洋
夏が来た忘れ得ぬ日のあの時刻

西予市 黒田 茂代
癒える日が来れば焦らずとも癒える

松江市 相見 柳歩
胸の内弾むボールを集めてる

和歌山県 木村 徑子
多機能をもてあましてるあかんたれ

和歌山県 辻内 次根
何となく立ったついでにくトイレ

鳥取市 永原 昌鼓
病院へ行けば病人らしくする

堺市 羽田野洋介
真夏でも長袖のいる冷房車

大阪市 柴本ばつは
お疲れさまこのひと言が薬です

倉敷市 撰 喜子
新聞を読めば疑問符渦を巻く

日立市 加藤 権悟
麦秋の海に夕日の応援歌

鳥取市 徳田ひろこ
双六の途中ともだち消えており

藤井寺市 中島 志洋
江戸つ子をいらいらさせる京言葉

大阪市 森田 明子
旧友に会って自分の歳気付く

東大阪市 中岡 妙
ざわめいた胸に妥協のお香焚く

河内長野市 村上 直樹
納豆を捏ねとじ込めた痴話暗嘩

吹田市 元田さとえ
カタログで旅立つ前に土産買う

鳥取市 田村 邦昭
感動を忘れたままで老いがくる

吹田市 穴吹 尚士
少子化に歯止めをかける知恵がない

尼崎市 小池 幸子
一人しか子を産んでない不満足

米子市 青戸 田鶴
幸せになった気分で選るブラウス

奈良市 矢野 良一
雨音が心身癒す昼下がりに

大和高田市 鍛原 千里
音のないポストを今日も待ちつづけ

奈良市 乾 春雄
生と死を見つめて耐えるナースの目

海南市 堂上 泰女
じいちゃんの車が好きとせがむ孫

豊中市 吉田あずき
親つばめ命をかけて運ぶ餌

池田市 上嶋 幸雀
鼻ばかり鳴らし尻尾を振らぬ犬

藤井寺市 鴨谷瑠美子
責任者手土産もって飛んでくる

倉吉市 福光 京子
核家族手抜き料理を覚える子

泉佐野市 備後三代子
世の浪に一皮むけた帰省の子

東かがわ市 木村あきら
バアさんの巾着数珠が入れてあり

竹原市 正畑 半寛
白チヨーク四十年の友でした

鳥取市 近藤 秋星
道化師の悩み道化師だけが知る

唐津市 坂本 蜂朗
棒グラフ大の男がむきになる

誹風柳多留一篇研究 13

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清 博 美

78 はりひぢをしてハ辻番とつて喰イ

山口 はりひぢ【張肘】は、手を懐に入れて肘を左右に張った様子。威張った様やくつろいだ様。(日国)

辻番は辻番所ともいい、町方の自身番に相当するもので大名、旗本屋敷の辻を警護するために設けられたものである。寛永の初期辻斬りが横行し、これを警戒するために寛永六年に初めて設置されたと『武江年表』などに述べている。

大名、上級の旗本は個々の屋敷の一手持ちで、下級の旗本は何軒かが合同で組合辻番を設けた。その数は江戸市中八百から九百カ所に及んだらしい。なお、「六十歳以上の者、

二十歳以下の者、歩けない者、病人などは辻番所に置いてはならない。」とか「人数は昼四人夜六人で、不寝の番を申しつける。」などの覚書が幕府から何回か出されているが、時により、人数もまちまち、年齢もむしろ老人が多かったのは給料の関係であろうか。

主題句はこの辻番が張り肘をして懐の蚤や虱を捕つて口でつぶしている図である。厳めしいと云うよりだしらない姿である。様にならない姿でもある。

首斗り出して辻番火にあたり 明二梅 4
うまそうに辻番とつちや口へいれ

清 賛
虹を蛙が張肘で見る

明八礼 5
武二二三 5

79 ぬけた夜着いますがごとくふくらませ

山口 難しい語句はない。夜中か朝かは分からぬが、寝ていた人が抜け出したあとそのまんま寝ているように夜着がふくらんでいるというのである。

「夜着」は綿入れの袖のある寝具で、掛け布団のようなものである。「居ますが如く」が皮肉っぽいので、吉原で隣に寝ていた遊女がどこかへ行つてしまったケース。則ち、振られた図かもしれない。

思ふまゝ、夜着へ戻てとりの声 宝九義
小栗 「居るかのごとくふくらませておく」のであるから、やはり偽計を使つて遊里へ抜け出す光景としたい。ドラ息子でもよいが、お店者か。

寮所へ細工を仕かけ手代ぬけ 傍四 37
ぬける晩よぎと枕にのみこませ 拾七 27
げんじゆつを遣て手代ぬけて出る 一二 20
なお、「祭ること在于すが如くす」(『論語』)の文句取。

山田 同。お店者でしょう。
清 賛

80 五六番迄せんじろと月行事

小栗 月行事は、江戸では地主の代理人である家主が中心となって五人組を結成し、五人組員の中から毎月交代で、町用・公用を務めるものを出した。これを月行事という。

〔江戸学事典〕

句意は、月行事が「五六番迄煎じろ」と言っているということで、煎じるものがはつきりしないが、『江戸学事典』に月行事の職務として、

名主からの触の町内への伝達、町内訴訟・願届の加判、検視・見分の立合い、罪囚の保留、名主の指揮のもとでの火消人足の差配、喧嘩口論の仲裁、捨子・行倒れの世話、町内道路の修繕、木戸番屋の修理、冬から春にかけての火の番・夜回り、切支丹宗門や浪人の取締り。

とあるなかで、主題句は「行倒れの世話」の場面ではあるまいか。行倒れの病状がかなり重そうなので、煎じ薬をたくさん用意しろと、補助員である書役などに命じている様子である。

酒ツくさいで月行事先ッ安ッ堵 三六17

裁医者へ金百疋八月行事 六22

伊吹 ケチな月行事が、番茶を始末しているとも。

山田 前説「番茶を始末」に賛。煎じ薬なら

「五六番迄」とはいまい。

山口 伊吹説に賛。番屋にかかる経費の節減ではないか。

清 伊吹説賛。

81 おはぐるの邪ノ鼻先へちよいとつけ

小栗 母親がお歯黒を付けているところへ子供がつきまとい邪魔するので、子供の鼻の頭にお歯黒液をちよいと付けて、たしなめている様子。

おはぐるの尻へだかつてだ、をいふ 四5

清 賛。

82 式分がものかりたら下女ハ立手のまゝ

小栗 立ちのままは、着の身、着の袂。身一つ。(江戸)

はつきりしないが、下女の前渡金の句ではなからうか。

『江戸学事典』によれば、奉公人の採用について、

「目見え」が無事にすむと、人宿が保証人となって「請状」(奉公契約証文)が作成される。請状を奉公先に差し出したとき雇主は奉公人の給金の一部を前渡金

として渡す。

とある。下女の年俸は一兩二分といわれているので、二ヶ月分の前渡金があったと考えても不自然ではないし、前渡金は事実上「前借金」であるから、主題句ではこれを「借りる」と表現したものと考ええると、二分ほどの前渡金を手にした下女が、この金で身の回り品を調達すればいいと、着の身着のままで着任した様子という解で如何か。

請状が済と買いたいものはかり 初22

伊吹 下女が質屋で金を借りるため、二分ぶんの質種を預けたら、着の身着のままの状態になってしまった、というのではないかもしれませんか。

下女か色ねこそぎかりて式分かまし 明六宮2

増田 同右。色が質種を召し上げる図でしよう。

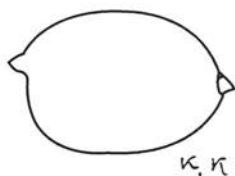
山口 色がめし上げるか、下女が誰から借りるのか、両方が考えられるが、二分の金が動いたら(貸し借りがあつたら)下女は全く意のままになる。もう欲と色との二筋道で、メロ／＼になるのではないか。色が借りたケースの匂いがする。

清 伊吹説賛。なけなしの質種。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「法律」

川上 大輪 選

六法に長けて常識欠けている
六法の通り歩けば儲からず
法律の真ん中辺で丸く生き
駐禁に庶民の暮らし乱れだす
均等法今日は息子の夕支度
法律が恋を不倫にしてみよう
同権を忘れ閑白午前さま
独房の中で六法読み返す
不眠には法律本が効くらしい
今朝の妻裁判官のように見え
アメリカが世界の法でいる恐ろ
家訓色褪せて夫と二人棲む
法律のすき間をあさる魚の群れ
必携は六法全書です詐欺師
法律が届かぬ末席に座る
法律を持ち出されると腕を組む

岸和田市	井伊	東吉
東大阪市	森下	愛論
弘前市	宮崎ヒサ子	
和歌山市	玉置	当代
大阪市	清水	絹子
和歌山市	柏原	夕胡
大阪市	奥村	五月
藤井寺市	鈴木いさお	
尼崎市	田辺	鹿太
岸和田市	土橋	房枝
箕面市	出口セツ子	
堺市	石堂	潤子
大阪市	森田	明子
和歌山県	三宅	保州
米子市	政岡日枝子	
松江市	川本	畔

「法律」

松本文子 選

法律で裁ける悪は知れている
法律がカシヤリビシヤリと音たてる
夏の居眠り法律にはふれぬ
六法全書一度も読んだことがない
なん人も信号無視をしています
法律に触れる行為はしていません
法律の矛盾口惜しさ込み上げる
丸い世を四角にします法律家
権利義務なんと冷たい文字だろう
法律が身近となつて遺産分け
法律が味方するとは限らない
六法のような返事をしてくれる
寄せ鍋の中で法律煮くずれる
法律を守らぬカラスいて困る
法律に罪を許すと書いてある
少年に保護法という非常口

大阪市	前	たもつ
出雲市	伊藤	玲子
八尾市	宮崎シマ子	
枚方市	海老池	洋
鳥取市	夏目	一粋
出雲市	佐藤	治代
大阪市	三浦千津子	
唐津市	坂本	蜂朗
唐津市	井上	勝視
和歌山市	田中	みね
松山市	宮尾みのり	
和歌山県	喜田	准一
和歌山県	宇野	幹子
出雲市	小玉	満江
鳥取市	土橋	螢
柏市	河野	桃葉

挨拶ではじまる我が家の法律

世話役が法律でした裏長屋

遠浅の海に判例集が浮く

法律に弱い虫だが生きている

子だくさん法が守ってくれますか

呆け気味な法がうろうろして困る

法律の余白山頭火を愛す

多くの法律くつ下を立ててはく

法律には触れぬが少し太り過ぎ

法の輪をくぐり隣の猫が来る

法律がなんだと酒が言っている

車椅子まだ法律にある段差

法律はそうなつてると譲らない

二枚目の舌も使って法曲げる

駐車違反高いうどんに付きました

床柱わが家の法はここにあり

法律はないが並んで待っている

法律が三步おくられている時代

年寄りをいじめる案はすぐ通り

秀句

法律で裁ける悪は知れている

神さまがちよいちよい法に裁かれる

ミルクから骨壺までの消費税

軸吟

法の手が痒いところに届かない

鳥取市 土橋 睦子

東大阪市 中岡 妙

八王子市 播本 充子

和歌山市 坂部かずみ

海南市 小谷 小雪

雲南市 菅田かつ子

和歌山市 牛尾 緑良

八尾市 村上ミツ子

東大阪市 谷口 義

和歌山市 榎原 公子

鳥取市 倉益 一瑤

大洲市 花岡 順子

豊中市 安藤寿美子

大阪市 岩崎 公誠

和歌山市 古久保和子

大山市 金子美千代

堺市 志田 千代

神戸市 木村貴代子

西宮市 緒方美津子

大阪市 前 たもつ

篠山市 遠山 可住

弘前市 高瀬 霜石

法律は知らぬが道理知っている

法律を少しかじった口答え

花吹雪阿成敗という裁き

遠浅の海に判例集が浮く

掟かも知れぬが冷たさが匂う

胡瓜が曲る法にはないが規格外

午前さま我が家にあつた禁固刑

門限という法律の赤い靴

法律が恋を不倫にしてしまふ

法律を学び薄情者になり

改憲論もう赤紙は出させない

法律はいかに裁くか花泥棒

六法を枕に念を押す眠り

六法を掌にお隣りの枝を伐る

小川にはメダカが作る法がある

法律の余白山頭火を愛す

背負い切れぬ想い家裁の戸を叩く

法律に押され流されここにいる

法律が届かぬ末席に座る

秀句

試すかのよう百円玉が落ちている

法律には触れぬが少し太り過ぎ

ミルクから骨壺までの消費税

軸吟

法律の前も後も風が吹く

藤井寺市 若松 雅枝

鳥取市 加藤 茶人

堺市 志田 千代

八王子市 播本 充子

出雲市 竹治かし

米子市 白根 ふみ

平川市 小寺 花峯

島根県 伊藤 寿美

和歌山市 柏原 夕胡

鳥取市 倉益 一瑤

唐津市 樋口 輝夫

倉吉市 野口 節子

黒石市 相馬 一花

羽曳野市 吉川 寿美

枚方市 伊達 郁夫

和歌山市 牛尾 緑良

美作市 山本 玉恵

境港市 遠藤那珂子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 楠見 章子

東大阪市 谷口 義

弘前市 高瀬 霜石

慕
う

宮崎ヒサ子選



慕う方いるからわたし生きてる
捨て犬に慕われ連れて帰る羽目
想い出の影を慕って独り住む
先生を慕い続けてまだひとり
つい降りる父母居ない無人駅
慕わしく思うがおくびにも出さず
師を慕い眠れぬ夜のあったころ
学風を慕って讃美歌の中に
マドンナを慕い続けてまだひとり
好きだよと言えず横から見てるだけ
みぞおちにやがて火となる思慕がある
園遊会陛下ももうすぐ目の前に
ちちははを慕うところは失わず
地曳網貴方をたぐり寄せている
手折られぬ高嶺の花を慕う日々
師と仰ぐひたすらなるを胸に秘め
行間に慕う心を忍ばせる
慕われてからの言葉がまるくなる
慕われて慕うて母と娘の絆
母慕う鏡の妻は母に似る
師を慕う気持川柳続けさせ
作風を慕って著書を買ひ漁る

ばっは 倫子 鐘造 幸雀 (岩) 玲子 ルイ子 婦美子 みつこ きよし (蘭) 輝夫 扶美代 猿杓 一粹 シマ子 一花 實 英旺 弥生 柳弘 花匠 ミツ子 充子

敬慕する師から学んだ人生譜
敬慕した恩師と出合うクラス会
転出の恩師へ子等の目が潤む
慕われていると気付かず樹を揺する
霊柩車追慕の足が一步二歩
突然の訃報に慕情気付かせれ
喪の列で好きでしたよ手を合わす
師と慕う薫風先生今は亡し
老いてなお野菊の君を慕う胸
ひたすらに思慕の声する日本海
山荘を慕って友が集まる日
愚痴溜めてかつての部下が来てくれる
捨ててきたふる里を恋う彼岸花
年ごとに慕う気が増す捨てた里
下戸なのに山頭火真似ひとり旅
佳
結論は目と目でわかる愛があり
慕ってはいけない人を追うている
阿修羅さまそのほへみに惹かれます
縁寺に慕情をひとつ置いてくる
五百羅漢慕う亡夫の顔がす
人
線香が灰になるまで追慕する
地
あの人を想えば眠れない枕
天
句会場に向田邦子風のひと
軸
初恋でした今も風鈴鳴っている

愁女 志洋 岳水 雄々 藤朗 四郎 耕治 九好 愛論 六助 順風 盛夫 富子 ちかし (蘭) 正和 銀波 那珂子 孝一 修 彩子 慕情 北朗 高瀬霜石

宿
題

早川 盛夫選



宿題を出さぬ先生好きになり
美しく老いる宿題難しい
宿題が溜まる地球の黒い影
人生にいつも課題が付きまとう
北の島宿題のままほつとかれ
永遠の宿題 地球儀が重い
呆けるまで続けてゆくと締切日
宿題が無いから好きなカルチャーだ
かけつこの宿題ならばまかせとき
宿題は全部すませた七回忌
宿題が多い少ない保護者会
一つだけ宿題があるやせること
秒読みになって宿題慌てです
九条の是非は後世への課題
大物と思う宿題忘れる子
宿題を忘れて朝の保健室
運不運宿題しない子が出世
考える時間ほしいと持ち帰る
子育ての宿題置いて妻が近く
宿題と塾で子供の影がない
宿題の泳ぎプールで溺れかけ
宿題の最後あなたを看取ること

ゆきの 富子 (字) 朝子 徳三 遠野 ちかし 日の出 (蘭) 正和 (田) 章子 耕治 注湖 智加恵 (大) 朝子 セツ子 東吉 百合 公誠 (奥) 五月 ばっは 慕情 正剣 (矢) 五月

名の知らぬ花が宿題くれました (岩) 玲子

宿題へ親の程度が試される 一 壺

これからをどう生きるかという余生 千里

宿題に追われています元気です 理 恵

気になって宿題親がしてしま しのり子

しゅくだいにあこがれているようちえん 充 子

宿題へ残り少ないカレンダー あずま

宿題に悩んだ頃が懐かしい 庸 佑

年金という宿題が片付かぬ 准 一

宿題を開いて眠る DNA 美 義

宿題の前にゲームでリラックス まみ子

宿題もリュックに詰めて孫が来る 正 雄

宿題をしたら西瓜を切つてやる 蟹 住

宿題で立たされた足よう走り 可 住

宿題は気にしないけど腹は減る 雄 々

佳

ロボットが宿題やつてくれる夢 霜 石

宿題の無い日の毬がよく弾む 岳 水

墓の守り重い宿題引受ける 英 子

宿題の上に涙の跡がある 六 助

宿題に親戚の子も呼び出され キヨミ

人

これからの課題になった今日のミス 美千代

地

宿題を残した椅子を譲られる 強 一

天

宿題を子はもう聞きに来なくなる 黒田茂代

軸

宿題の間違ひを子に叱られる

ま だ

古手川 光 逸



まだまだと油断してたら呼びにくる

独身を翔んで娘がまだ嫁かぬ

まだ若いリストラしなが受けてたつ

まだともう行き来しながら見る鏡

ときめきを忘れぬハートまだ若い

触れないでまだ埋み火を残してる

真似ばかりまだ人間になれぬ猿

七十年生きて生き方まだ迷う

まだ若い医師の手腕を信じよう

まだ食べる育ち盛りの皿の数

まだまだがもうそろそろの寺参り

定年の視野にまだある活火山

四万十にまだ残つてるよき日本

ビリオドを打つたが未練まだ残る

彼岸にはまだまだ遠い写経する

一票の格差へ法はまだ未熟

まだかいな着たり脱いだり試着室

まだ背すじしやんとしてます元兵士

荒れる海まだまだ怒り治まらず

老いてなお夫婦茶碗にてんこ盛り

北の海まだ還らない島がある

叩くたび西瓜はまたと言う返事

佳

英 子

志 華

慕 情

富 子

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

打つ手まだあるかもしれん別の医者

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

まだ燃えるものあり翼畳めない

妥協してまだ胸の炎は消してない

色香まだあるのか蝶が寄ってくる

切り札をまだ持っているらしい顔

まだ嫁は来ぬかキリンの首になる

ポックリを願う両手が捨てぬ欲

へその緒がまだ付いているフリーター

嗅いでみてまだいけそうで紙めてみる

軸

天

百 子

まだ直切つてないのに五割引きされる

まだ期待されてる喜寿の年金日

まだまだと思つた粒一つまだつまむ

おばちゃんはまだ座れると尻を入れ

まだ誰にも漏らさぬ事が一つある

天井はまだまだ先と売りそびれ

まだ生きるつもり汗を掻いている

佳

幸 子

可 住

岳 水

章 子

お迎えはまだ現役と追い返す

初步教室

題—長い

三宅 保州

【ワンポイント・アドバイス】

長月の九月に因み「長い」という出題をしました。が、橋高薫風師の句の「夏の風邪瀬古とマラソン走るなり」を思い出します。夏の風邪と瀬古のマラソンという対比と比喩の、非凡な発想と的確な表現力に畏敬を禁じ得ません。師ほどの作句力があれば一見難なく作句されておられるようですが、そうではなく一句一句に呻吟と推こうを重ね尽くされておられたことをお聞きし感慨いたしました。

私達も師の作句姿勢と円熟の作句力を目標に、一句一句を大切に作りたいものです。

【添削・批評句】

次の四句は、何がどうしてという理由が分かり難い句です。作句したら読者に句意が伝わるか先ず考えるようにしましょう。

原 あの時へ一瞬にして舞い戻る 柳 歩
原 長いことくだわっていた意地捨てる きぬ子

原 長かった沈黙破りおめでとう

アヤ子

原 長靴に出番ですよと声を掛け

夢

原 長いこと待った甲斐ありゴールイン

雅明

祝吟には良いのですが川柳としては平凡

原 一日が長い老後を持て余し

みさと

淋しすぎますね。長生きを楽しむ句に

原 長茄子は嫁の居間に焼いて食べ

美智子

「秋なすは嫁に食わすな」の本歌取り過ぎ

添 秋なすも嫁と一緒に食べてます

次はほとんど同様の二句で惜しくも相討ち

原 長い髪切つて失恋かと訊かれ

亜希子

原 長い髪恋と一緒に切り捨てる

松風

原 長く生き私楽しい知恵袋

福世

添 長生きのお陰知恵袋と呼ばれ

原 気短は気長の人とうまが合い

順子

添 気の長い人とうま合う短気者

原 あの人だ ガス止め 座る 長電話

京子

一字空けは不要です。

添 まずガスを止めてから出る長電話

清

原 おーいおい長い呼び声山仕事

孝子

添 呼びかけも長い呼び声山仕事

原 長風呂に顔出し覗く心配性

綾乃

添 長風呂を覗いてくれる妻が居る

原 調子よいで長く歩いた足だるい

麗

添 調子に乗って歩いた心地よい疲れ

原 亡き夫の命貰って挑戦中

乃りこ

添 夫の命もらい長生きしています

原 長いお経有り難すぎて痺れます

添 お布施はすみ過ぎたかお経長すぎる

原 ショッピング一寸のつもり長時間

添 知らぬ間に時間がかかるショッピング

原 長い旅地球にとどく星ひかり

秋星

添 光年の星からとどく長い旅

原 三日でもうんざり長い夏休み

添 親にしてはうんざり長い夏休み

原 長い脚にものを言わせて闊歩する

添 ジーンズで闊歩している長い脚

原 長くないと食事制限はすされた

添 好きなもの食べよと医者に見放され

原 長話合つち上手が聞くはめに

添 相槌の良さに話が長くなり

原 長生きはいやといつつサブリ飲む

添 長生きは嫌といつつ医者通い

原 長い電話嫁いだ娘愚痴になり

添 嫁いだ娘の愚痴聞いてやる長電話

原 クーラー代心配性の長い夏

添 心配はクーラー代の嵩む夏

原 出世して長居下積み生きてくる

添 下積みの長さを生かしたい出世

原 長いとも短かいとも言える古希

添 短いとも長かったとも言える古希

原 長いからつれもつれる天蚕糸

添 欲張って長くしすぎる天蚕糸

原 長い目で見守ってやろ子も必死 美恵子

添 長い目で見れば子供も立ち直る

原 長々と欠伸に聞かすこ 秀四

添 挨拶の長さあちこちから欠伸

原 どのめきが秘策ゆるがす水の入り 蘭洋子

添 場内興奮水入りの大相撲

【少し工夫すると佳くなる句】

原 長生さをいくらしたとて子は増えぬ

クックバラ（シンドニー在住）

切実なテーマですが言い過ぎの感もします。

原 長すぎる裁き何とかならないか 徑子

添 それにしても判決までが長すぎる

原 かきむしる心手術が長すぎる 幹子

添 それにしてもなかなか終わらない手術

原 これ以上長く居たって何も出ぬ たん吉

添 これ以上居ても何にも出ませんよ

原 肝心な用件忘れた長電話 道子

添 肝心な用事忘れた長電話

原 ジョギング中リードが延びて犬も駆け 宣子

添 ジョギングのリードが延びて犬も駆け

原 長い髪はつさり切つて夏が来る 忠子

添 長い髪はつさり切つて夏迎え

原 秋深く長い小説読んでます

添 秋深く長い小説読んでます 千華

原 右手だけ倍の速さだ長い爪

ただよし

添 利き手だけ倍の速さで伸びる爪

原 私を長持ちさせる薬三つ 智加恵

添 私を長持ちさせる薬漬け

原 長命に秘訣と聞けば腹八分 義章

添 長命の秘訣を聞けば腹八分

原 長い目でお願ひしつ古希の坂 蘭洋子

添 長い目でお願ひしつ古希迎え

原 熱帯夜時の長さを持て余す

原 長い舌アイスの蓋をそつと舐め 孝明

原 ヒゲ長い爺様とんと見なくなり 賢治

【佳句】

長雨をばんやり見てる万歩計

長生さをしてねと孫が泣かしよる

一服も仕事のうちと長くとる

茶を替えて長い話の腰を折る

医療費が増えて長生さ気兼ねする

長い列何はともあれ行つてみる

妻の愚痴尽きて夜長を持て余す

お出かけのママの支度を持つ欠伸

長いこと待つて私も今来たの

長い目で見れば和らぐ反抗期

駅からの長さに馴れぬランドセル

夏休み出だしは長い筈だった

命短し乙女はきつと長い髪

長いこと泥縄式で生きている

仲直り長い手紙を書きました

母に書く手紙ついつい長くなる イセ

ちちははへ長い手紙を書いている 六助

ほどほどに距離をおくから長続き みち代

長雨に膝の関節駄々こねる 燭節子

長雨に土踏まずまで疼きだす 章司

悶々と秒針という長い闇 甘信子

【今月の推せん句】

待てば長く追えば短い砂時計 井上つよし

時は逃げ水の如し。巧みな心理描写です。

ダ・ヴィンチよりオレは長生きしてるんだ 田邊 浩三

ダ・ヴィンチの傑作モナ・リザは何歳にな

ったのでしょうか。発想の意外性が良い。

物分かりきつといいだろ福祿寿 岡本 昇

「長い」の題で頭の長い福祿寿に着目した

川柳眼が良い。長寿の神でもある福祿寿はき

つと物分かりも良いことでしょう。

喜寿までを生きて長いと思わない

中上千代子

喜寿なんてまだまだ、その心意気やよし。

立ち話ネギが伸び出す籠の中 加藤 映子

オーバーな比喻による風刺の効果抜群。

【私の句】

それにしても番組名が長すぎる

もう長くないとカルテは知っている

秀句鑑賞

同人吟 米田恭昌

— 8月号より

約四年振りの同人吟秀句鑑賞の依頼がきま

した。最近何かと忙しさにかまけて、少々たるんでいる私への叱咤激励かと有難く（大変やなーと）受けさせて頂きました。前回、川柳は省略の文芸で、趣味のビデオ作品も然りと書きました。が私の省略の下手さ加減は相変わらずで、それでも過日、やつと約十五時間もの薫風先生との思い出のテープを、「追憶」という題で二時間に編集しました。その最中の事です。手伝って頂いていた先輩が、クスクス笑うではありませんか。訊いてみると、「蚊が鳴いて僕を探しに来てくれた」の句を思い出すたびに、おかしく、笑いがこみ上げてくるとの事でした。瘦身の先輩も療養中でした。堅物の先輩をクスクス笑わせる句、これが川柳なんだと今更に知らされました。

数多の珠玉の句の中から、私なりに「一読明解重からず軽からず」の句を選ばせて頂きました。幸い難解句がなかったため、凡才凡夫の私としてはたすかりました。それではご紹介します。

関白で困りますのと妻の嘘

穴吹尚士

まさに賢夫人、女の鑑のような奥さんである。横に居る尚士さんの満足気な顔。これで男の外音が保たれているのです。たとえ家では小さくなっている。下五の妻の嘘がいい。

ひっそりと今年も父の日が過ぎる

伊勢田毅

ひっそりと過ぎる—にお父さんの、母の日、子供の日と違って、誰にもふり向いてもらえない言いい知れぬ哀感が伝わってきます。

身辺整理もつたないで進まない

大橋政良

でもご心配なく。ご自身の思い出も、宝物もポイといつの日かご家族に捨てられます。その日まで持っていていいのでは。

二階から歓声トラが勝ったよう

森本弘風

他人事でなく、弘風さんご夫妻も猛虎を応援よろしくお願いします。「阪神が負けて楽しい筈がない 鬼遊」

待つ女などは演歌のつくりごと

加島由一

同感。演歌の女と言えはただ耐えて、一途に待つ女の事である。かつて一世を風靡した「女の道」がその代表だろう。そんな女はもういない。今宵も身勝手な男は、そんな女に逢いたくて、裕次郎の「宴のあと」などを唄うのである。下五の「つくりごと」に感服。

流されぬ旗一本を立てている

岩佐ダン吉

北朝鮮というならず国のミサイル発射もあり、九条の改憲論が喧しくなってきた。時の流れか、それでも「核廃絶」の旗だけは必死に流されまいと持ち続ける、信念の人、ダン吉さんである。

早寝して明日を待ってる休肝日

鶴田遠野

肝臓は少々辛くとも、黙黙と身体に悪い物を解毒するため働いている沈黙の臓器です。眠れば飲めません。休肝日は早寝する事。明日になれば飲めます。ただし適量を忘れずに。赤ちゃんがイナバウアーしてこ出した

森本節子

イナバウアーの句は、各柳誌、句報で何句もお目にかかっているが、小さい身体を反ってこてている赤ちゃんには脱帽です。

暗黙のルール待合室にあり

谷 口 義

この待合室は病院だとは思いますが、病院では殺伐としてしまうので、演歌好きの私としては、上りの始発を待つ少女、片田舎の待合室とよみたい。狭い町、顔見知りだけに、つい話そうと思いつつも、何か理由ありそうで黙っている老婆―解釈自由も川柳の楽しさか。

ネクタイを取ると普通の人である

長 浜 美 龍

これはテレビでお目にかかる、クールビズ実践の関係センセイの事でしよう。確かにネクタイがないと普通のおっちゃんに見え、つい本音がきけるのではと期待してしまいます。

もう少し頑張れと言つ電子辞書

中 村 れんげ

もう少し頑張れ―は「まだ〇時ですよ」の時間とよみたい。まだまだ若いれんげさんだから。

花が散る死なねば逢えぬ友ばかり

秋 元 て る

住所録思い出多い人が住む

大 石 あすなろ

二句とも淋しい句です。でも現実です。一人逝きまた一人逝き、住所録に朱線が増えます。書き直して新しくとは思いますが、思い出多い人の名についていそのままに。

お悔みはゆつくり消えた方がよい

川 原 章 久

お葬式等をおかしく穿って、何句も詠んでおられる筆頭は土居耕花さん。「涙あく真似も悔みに添えておく」等。そのお悔みも、語尾の定まらぬ消え入るような声で、ほそぼそと言ひ、そしていつの間にか帰ってしまうのです。いい得て妙、その通りです。

最後まで聴かずにそつと金を置き

池 森 子

肉親ならみなまで聴かずに―とはいかないだろう。みなまで聴かずに出せる金はせいぜい三万円位だろうか。友人も決して楽な生活ではないだろうに。氣遣つてそつと置いてくれている男の友情を温く詠んで素晴らしい。

社長室のように娘の部屋ノックする

岸 本 宏 章

子の部屋は治外法権です。お父さんは昼は会社で、夜は家でも氣を遣つてゐるのです。

医師の指示妻同伴で聞いた悔い

坂 本 蜂 朗

煙草は即やめて、酒ひかえめにして歩きなさい―と日頃妻にうるさく言われている同じ事を、妻の前で医師が言う。「しまった」と思つてももう遅い。得々とした妻の顔。怒るまい、うるさがるまい。全て奥様の愛なのです。

役人の遺憾は詫びてなどいない

古手川 光

北朝鮮のミサイル問題、当初日米は「非難すべし」露中は「遺憾に思うでよし」と「案にわかれていた。遺憾とは「気の毒に思う」「残念」とまるで他人事のように、社長も役人も真から詫びてなどいない。正にその通り。

バスツアーいつも二人でひとり旅

正 畑 半 寛

我が家を含めて老夫婦の旅行はどこともこうではないだろうか。「二人でひとり」とは絶妙の表現、「夫婦ならあんなにしゃべる筈がない」の句を思い出し、ニンマリ笑いました。

はちきんもしよぼかれて来る誕生日

大 内 朝 子

高知のおてんば娘はちきんの朝子さん、しよぼくれるのはまだまだ早いはずぞ。

物忘れ不意に自分が怖くなる

太 田 扶 美 代

あんたもか俺もあれこれの老い

加 藤 茶 人

私もとつさに住所を訊かれて番号が出てこずゾッとした事があります。一日十萬の脳細胞が退化します。でも最近鍛錬で、一部新生される事が解明されてきました。諦めず作りにもつともつと励みましょう。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 8月号から

岩佐 ダン吉

疲れます潔癖症で几帳面

川島 良子

おりますね、こんな人。旅先でも部屋の灰皿の片付けから調度品なども、自分の流儀に移動する。いやあ、良子さんの「疲れます」が目につかび：実は私も、疲れさす派。

正論が最後はいつも宙に浮く

両川 無限

「そもそもこの話はなあ」と話の流れも駆け引きも抜きで、辺り構わず「正論」をとうとうと。だが力関係や利害で正論はいつか宙に浮いたまま、私には寂しい風景ですが。

言いつ分はあるが黙って目をつむる

塩路 よしみ

「黙って目をつむる」によしみさんの無念の思いが。どんな言い分だったんだろう、でも黙る、ましてや目をつむる。相手さんには結構な打撃になっている、ご存知ですね。

飲み込みが早い忘れるのも早い

三浦 強一

大阪弁で忙しい人を「いらち」だ。ただろくに話していないのに「よし、解った」と了解はしてくれたのですが、後で「ごめん、何やったかいなあ」。こんな人に限ってメモも取らない、悪人ではないだけに…。

上を見ず下も見ないで前を向く

巖田 かず枝

高望みしなければ卑下もしない。「前を向く」にかずえさんの生き方を見ました。人生に曲折はつきもののですが、私にとつての「前」とは何だろうか、久しぶりに考えさせてくれる一句に会いました。

今日もまた口先だけの詫びを聞く

伏見 雅明

大企業から警察まで、テレビで頭を下げる場面に会わぬ日はありません。「遺憾などと言ってお詫びになりますか」は私の句ですが、雅明さんの「口先だけ」は鋭い。

目に青葉サプリメントに負けません

多田 契子

体調や疲労回復などにサプリメント（栄養補助食品）ばかり。でも契子さんは「青葉」の効用を説くのです。マラソンを走る私も、ルームランナーより自宅近くの青葉の山で。

早よ逝けと福祉だんだん削られる

坂口 英雄

年金や医療費：「早よ逝け」とばかりの国民苛めの政治が続きます。かつて「老人は死んで下さい国のため」の句も話題に。働きぬいてきた英雄さん、国のためぜひ長生きを。

支持率の高さ知るたび首ひねる

寺井 柳童

重税は今に消費税まで。米の尻馬に乗り自衛隊は海外へ、誰が支持をしているのかと柳童さん。同感、私も聞いてほしいもの。

青蛙ふと目の合うて畏まる

高木 道子

対峙した青蛙は身じろぎもしない。お前も自然界の一員、バタバタするなと言われているようで道子さんは「畏まる」のです。

舌噛まぬよう指さして買うケーキ

木村 忠義

横文字のオンパレードです。「指さして」に忠義さんの閉口ぶりと、見事なユーモアに私も拍手。それにしても高くなりました。

正論を隅へ押しやる多数決

乾 春雄

火の粉がふりかかるのを承知で正論を述べているのに、いつか「隅に」。性急な多数決に潜む危険性を春雄さんは力説するのです。

〈神戸川柳祭'06〉
第29回 神戸川柳大会

日時 10月28日 午前10時開場
場所 兵庫県民会館9Fホール
(JR元町駅・阪神神戸駅北へ7分・
地下鉄県庁前駅東1・2出口すぐ)
TEL 078-321-2131

兼題 「知性」 斎藤 功選
「モダン」 佐藤寿美子選
「上品」 飯田 良祐選
「ぜいたく」 赤松ますみ選
「神秘」 赤井 花城選
「ストレス」 平山 繁夫選
「あこがれ」 大森 一甲選

アトラクション 講談 旭堂 南海
震災遺児のためのチャリティ色紙展(理事及び名士)

各題2句・欠席投句拝辞・席題なし

出句締切 11時30分 開会 13時

各題秀句呈賞

主催 神戸川柳協会

後援 (予定)神戸市・神戸市教育委員会・神戸市
議会・神戸市民文化振興財団・芸術文化団
体半どんの会・神戸新聞社・読売新聞大阪
本社・兵庫県川柳協会

奈良県川柳連盟結成40周年記念
句集「奈良」発刊
第78回 奈良県川柳大会

日時 10月22日(日) 11時開場
場所 奈良県文化会館小ホール
TEL 0742-23-8921

お話し 元興寺住職 辻村泰善師
宿題と選者 13時締切・各題2句・席題なし

「深い」 植野美津江選
「一瞬」 柏井かんじ選
「素敵」 鶴本むねお選
「旬」 居谷真理子選
「積む」 福田 秋雄選
「外す」 中村 直子選
「しずく」 大村美千子選

参加費 1500円(大会発表誌呈)

昼食はお済ませ下さい。(館内に食堂あり)

欠席投句 1000円(小為替) 10月10日締切

〒631-0076 奈良市富雄北1-12-30

玉利三重子宛 TEL・FAX 0742-44-2759

主催 奈良県川柳連盟

後援 奈良県・奈良市ほか

おかやま県民文化祭協賛雪舟没後500年記念
井原市文化祭川柳大会

とき 11月11日(土) 投句締切 11時30分
ところ 井笠地域地場産業振興センター

(井原線井原駅より北300m)

事前投句 (各題2句 締切10月6日)

応募料千円 B5用紙に3題6句)

「雪」 川柳「塾」 柴田夕起子選

「舟」 川柳並木会 高木 勇三選

「里」 時の川柳社 山本 芳男選

当日句会 (各題2句 会費千円 昼食代他)

「紫」 広島県川柳協会 小林てるじ選

「掬う」 弓削川柳社 濱野 奇童選

「雑詠」 番傘本社 森中恵美子選

席題あり ふあうすと 江尻 容子選

講話 「雪舟の足跡」 大島 千鶴氏

主催 井原市文化協会

後援 岡山県文化連盟

投句先・事務局 〒715-8601 井原市井原町

311-1 井原市教育委員会内 井原市

文化祭川柳大会 TEL 0866-62-9541

ひらた川柳会創立30周年記念川柳大会
【NHK川柳選者 森中恵美子先生を迎えて】

日時 10月29日(日)
開場 9時30分 開会 12時30分
出句締切り 11時30分

会場 平田文化館

事前投句の選者と課題(2句)

「ぐらぐら」 金築雨学謝選(会長)

当日投句の選者と課題(席題なし、各題2句)
特別招待選者

「拝む」 森中恵美子選(大阪)

「楽器」 森山 盛桜選(鳥取)

「巻く」 政岡日枝子選(米子)

「招く」 恒松 町紅選(松江)

「餅」 長谷川博子選(松江)

「刃」 佐々木 裕選(浜田)

「過ぎる」 竹治かし選(出雲)

会費 当日出席者 2000円(大会誌・粗品・昼食呈)

懇親会 2000円(事前投句の際に申し込み)

事前投句及び欠席投句(用紙適宜、氏名及
び雅号にふりがな付)

締切日 9月30日(土)必着 欠席投句 1000円

投句先 〒691-0003 島根県出雲市灘分町856-5

長岡良一(TEL・FAX 0853-62-5214)

主催 ひらた川柳会

本社八月句会

八月七日(月) 午後五時半

ア ウ イ ー ナ 大 阪

うだるような猛暑の中、八月例会は百一名の参加で定刻開催される。

はじめに七月に逝去された岩屋美明氏のご冥福を祈り黙祷を捧げる。

お話は岸和田市の同人小島笑司氏。

「おもろない話と面白い話」冒頭で氏はここ「上六」生まれであると明かし、かつてこの界隈は、作家の織田作之助、五味康介、服部良一(音楽家)等の文化人達が多く住む町であったと言ふ。

コミュニケーションのきつかけにする「面白い話」は誰もが興味を持つ、暮しに密着した話を列挙、漫談家顔負けの、鮮やかな笑司節で、大いに会場を沸かせた。(富美子記)

初出席は中岡香代、土橋房枝(岸和田市、長濱賢山(寝屋川市)の各氏。

月間賞は谷口義さん(東大阪市)に輝く。

(司会)玄也・月子 (脇取り)朱夏・義(受付)義子・扶美代(清記・直樹)

席題「胸」 小谷 集一選

借りたものを返して胸をなでおろす
胸に一物あつて真正面の席
胸の線気にしなくなる子沢山
胸元をちらちら話実が入らず
胸の火が非核非戦に燃えている
飛び込んで来いとは言うが薄い胸
御仏の微笑みに会い胸ひらく
仏壇へつい愚痴になる胸の内
胸襟を開けば消えた肩の凝り
この胸に飛びこませたい自閉の子
ふるさとは父の背中と母の胸
ときどきはお酒で洗う胸の垢
やさしい目胸の本音を誘い出す
たんぽぽを胸に咲かせていて陽気
再会に高まる胸をもて余す
勝訴でも癒えない胸の疵がある
昭和史の踏絵に残る胸の傷
水割りの底に沈める胸の傷
胸の内読まれてしまう朱い花
胸痛む話は母に聞かすまい
捨て台詞胸にずきんと突き刺さる
胸キュンと主人は知らぬひとり旅
胸のしみ抜きたくなくてひとり旅
思い切り泣かせてくれる広い胸
胸借りるつもりブライド捨ててゆく
なにもかも聞いて夜毎の胸さわぎ
胸底に言うてはならぬ事が増え

孝一 扶美代 房枝 一風 章久 公誠 幸雀 たもつ 深雪 尚士 美籠 ルイ子 懸命に生きようとうと胸を張る 柳弘 富美子 俣子 潤子 みつ子 真理子 洋 哲男 和夫 茜 昭 幸雀 天笑 笑司 萬的 月子 借りたものを返して胸をなでおろす

青春と栄光胸に甲子園
胸に棲む鬼と一緒に黄昏れる
足音で彼たと分る胸さわぎ
ひとり住む母の電話に胸いたむ
玉三郎子にはやれない胸の乳
佳
胸くその悪いはなしを踏み欄る
吊り革が胸の谷間に狼狽える
子を諭す父の胸にもある痛み
胸に棲む鬼がときどき目を覚ます
胸の内もぼつぼつ聞いて介護の手
人
まだ消えぬ思いを胸に八月忌
地
胸像で睨みを利かす創業者
天
懸命に生きようとうと胸を張る
軸
胸深く炎を抱いている無口

兼題「いちず」 居谷 真理子選

いちずさに弥陀もうつつら臉あけ
邪魔少し有って一途になる恋も
子を思う母のいちずが噛み合わず
人間が好きでいちずな泣き笑い
仕事いちずに生きてる様な顔をする
あの頃のいちずわたしがいとおしい
子のいちずそつと梯子を足してやる
一途だと言うには迫力が足りず
好 美義 庸佑 潤子 昌紀 利昭 郁夫 森子

足あととは前へ前へとかたつむり

口八丁いちずの恋が疑われ

糠味嗜に母のいちずが生きている

分別がいちずの邪魔をして困る

老いらくのいちずな恋をもてあます

アルバにいちずな頭束ね髪

いちずさを重荷に思う遠花火

いちずさが水の流れを変えさせる

君のほか何も見えないプロポーズ

圏外のメール蓄積するいちず

いちずにはなれぬ世の中知りすぎて

自分では家族いちずと思えます

ジエラシーをいちずな愛と思い込み

皆勤賞もらい続けての過労死

ひたすらにあなたの後をなぞってる

鑿一ついちずに掘った青の洞

イスラムの神に捧げた自爆テロ

山動くことを信じてペンいちず

もう一人の私が敵になるいちず

一途さがお目にとまってるからの運

曇り後曇り一途な親心

表いちずそれが自慢の淡い悔い

満点のあなたにいちずさが欠ける

一途な恋でした私の宝物

佳

祈るのみ八月六日炎天下

弁護士をいちず目指してる理由

盲導犬ほどのいちずになれぬまま

のめり込むタイプで切れてしまった緑

たもつ

遠野

集一

富美子

朋月

耕治

美籠

能子

雅文

柳伸

(志) 千代

深雪

房枝

保州

利昭

笑司

尚士

一步

美代子

修

哲男

直樹

冬葉

天笑

和夫

あやめ

希久子

深雪

母はまだ一途に母の顔でいる

人

人の目にいちずが少し狂気めく

地

さつきまで蟬はいちずに鳴いていた

天

問いかける少年の瞳は動かない

軸

蟬時雨やがてのことは考えず

兼題「年金」

黒田 能子選

年金の手からこぼれる無駄がない

年金へ間口の広い慶弔費

年金の庭へ雀が来て遊ぶ

年金の暮し猫にも告げておく

年金を貰うつもりはニート族

年金の足しに作った茄子きゅうり

年金の元取り返す万歩計

年金がどんどん上がる蟹気楼

養育年金子供たちから取るつもり

年金の範囲いい汗かっている

年金で繋がっている赤い糸

OB会みな年金でおしゃれして

年金はのんびりしろと言わなんだ

年金へ暮しの幅を立てなおす

年金の夫婦で埋まるバスツアー

年金とグリーチョコキパーで日が暮れる

年金に頼るあしたが不透明

年金という人生の命綱

六助

恵子

朱夏

賢山

好

庸佑

柳弘

正雄

昌紀

朱夏

一步

重人

遠野

集一

耕治

孝一

恵子

東吉

房枝

俣子

鐘造

年金でドリームジャンボ買っている

年金の範囲で涼と暖をとる

年金暮らしエンゲル係数高くなる

年金が僕より多いお母ちゃん

お日柄もよく年金が振込まれ

年金にある嬉しさと悔しさと

ゴミ箱のゴミまで年金だと思っ

つつがなく年金のくる国に住む

足腰を鍛え年金キープする

年金の味も知らずに逝きはった

年金の振り込みだけに要る銀行

長生きをしたら年金減ってくる

年金の限り生きよう火の天寿

年金の電池で動く老いの足

佳

年金に嬉しさと怒り五分と五分

年金になつて男に味が出る

ギャルみこしいま年金を担がせる

生きているから年金ももう夏盛り

年金で描くしあわせ行きの地図

人

年金の暮らしとわかるゴミの量

年金が過去の頑張り知っている

地

年金の軽さ重さよ蟬時雨

天

年金の軽さ重さよ蟬時雨

軸

年金の暮らしの中の青い鳥

夕胡

昭

千代

天笑

義

六助

恵子

修

柳伸

深雪

修

美代子

弥生

郁夫

富美

真理子

雅文

義子

いわゑ

楓

楽

千代

富美子

兼題「ジャンプ」

江見 見清選

ジャンプする前の歩幅を整える
目をつむり跳ばねばならぬ時がある
惜敗の涙をバネにジャンプする
受けとめてくれると信じ跳んでみる
六十のジャンプに気負うものがない
お腹ひっこむならしてみようジャンプ
ホップステップここで手を抜く癖がある
煽てられジャンプさせられ放つとかれ
結果を抜けて少年ジャンプする
大ジョッキ男の夢をジャンプさせ
ホップステップさばったお粗末なジャンプ
フイクションを重ねジャンプを繰り返す
ジャンプするための助走と飲みに行く
ここだけの話あちこちジャンプする
ジャンプする勇氣が欲しい骨粗鬆
ジャンプする形でねむる猫といふ
ホップステップまでは順調すぎたんだ
スキップした傷をあちこち持つている
家事ならばジャンプステップ恙無い
挑戦のジャンプハードル上げて跳ぶ
身の丈に合わないジャンプの傷だらけ
ライバルが待ち構えてる着地点
いつべんていジャンプしたいとカタツムリ
決断はかくあるべしとジャンプ傘
このミスはバネに無心のジャンプする
片減りの靴でジャンプをくり返す

雅明 正坊 庸佑 末吉 恵子 月子 昌紀 昌紀 潤子 代子 淳司 柳弘 恭昌 恭昌 泰子 篤子 あやめ 直樹 ダン吉 順子 集一 弥生 保州 俣子 楓楽 一風 朱夏

ジャンプどころか杖に縋っている余生
ジャンプ傘開かず鬱の日が続く
妻の手を引き跳び越えた深い溝
生きている証にジャンプして見せる
地から足離さぬジャンプわたし流
佳
肩書のない軽さでジャンプする余生
三回忌落着ませて女ジャンプする
跳箱は苦手いつでも乗ったまま
ジャンプして夢を見たのは足の裏
助走路が長くてジャンプ忘れてる
人
トーストが朝のリズムにジャンプする
地
凄かろうジャンプが見たい仁王像
天
ジャンプするたび見失う現在地
軸
上背のない分ジャンプ得意なり

美代子 千代 昭 富美 美智子 希久子 尚士 耕治 真理子 恵子 正雄 雅文 朱夏

兼題「凭れる」

鴨谷 瑠美子選

凭れば人のぬくさとやわらかさ
凭れがない男でも惚れてます
凭れてる君の背中を信じて
凭れてはいけないう人にもたれて
凭れたり凭れられたり通勤車
凭れたら支えてくれた人が居た
ぬるま湯で凭れてあつて政と官
アメリカに凭れてるから紙められる
マラソンの下位は毛布へ凭れ込む
背中の荷おろしてゆっくり凭れた
背凭れのない補助椅子が捻くれる
お互いに弱みを見せて凭れ合う
凭れたら倒れてしまふ夫です
関取も妻に凭れて寝てみたい
凭れ合う人と仲良く暮らさねば
凭れぐせついたつたと膝まくら
胃凭れを治す歯切れのいい咬阿
見掛けよりわたしひ弱で凭たい
凭れたら妻の姿が消えていた
凭れ合う仲にもルールひとつあり
何事もなかったように凭れあひ
だるまさんに凭れるなんてすません
わたくしが凭れかけてもよろしいの
いざと言うときに凭れる君が居る
佳

真理子 耕治 六助 遠野 奮水 きよし 玄也 尚士 孝一 富美 正雄 能子 夕胡 深雪 能子 遠野 美代子 幸雀 義子 義子 鍾造 月子 螢 潤子 ダン吉

凭れてもいいけど重いなあおまえ

人

背凭れで過去と話をしています

地

関白が近ごろ妻に凭れ出す

天

象つかい象に凭れて休んでる

軸

幸せになろうと凭れ合っている

兼題「つまむ」

河内

天笑選

つまみ食いする時そこらへんを見る
煙草止めた亭主ウロチヨロ摘み食い
貸した金返せと言えず香つまむ
熟れ工合ちよつとつまんで確かめる
あれやこれつまみ続けて旅なかば
掻い摘んで言えといつても叱られる
さわりだけバラバラつまむ週刊誌
レシビにはない母さんのひつまみ
ひょいとつまんだ三角くじに運があり
つまみ食いする金置いてある役所
血税をつまみ食いして天下り
山椒煮つまむじわつと母香る
若い娘をちよつとつまんで見た地獄
いとしが昂じ寝顔の鼻つまむ
ひとつまみ足してキレイなシソジュース
代償が大きかったつまみ食い
御婦人の酒のつまみは主人たち
掻い摘むと三分で済む長電話

見清

いわゑ

倫子

耕治

天笑選

瑞美子

笑司

一歩

泰子

房枝

ダン吉

朱夏

好子

希久子

耕治

求芽

尚士

リハビリでつまんでいますお豆さん
ど忘れの脳に七味をひとつまみ
官僚が組織ぐるみのつまみ食い
ゴミ箱へ愚痴をつまんでほうり込む
豆つまむことが出来たらほつとする
睡蓮のほつてをつまむ夏の風
自分史はつまみ洗いをして記す
猫の耳ちよつとつまんで見たくなる
カミナリにへんつままれたことがある
北朝鮮の愚劣世界の鼻つまみ
酔つてなメニユーを箸でつまんでる
白魚の指に首筋つままれる
一つつまんで辻褄を合わしとく
私の下着を箸でつまむ妻

淳司

楓一

准子

寿子

順子

義子

弘風

富美

夕胡

倫子

和夫

洋子

扶美代

保州

住子

つまむからつまむになった皮下脂肪
癌告知狐につままれたようだ
夏バテの私へ毒をひとつまみ
たこ焼きをつまみ祭りの渦の中
せんせーにつまみ出された事がある

人

出っ張ったものは何でもつまむ癖
お口まがちゃんと見えますつまみ食い
神様がひょいとつまんだ宝くじ

淳司

楓一

准子

寿子

順子

義子

弘風

富美

夕胡

倫子

和夫

洋子

扶美代

保州

住子

つまむからつまむになった皮下脂肪
癌告知狐につままれたようだ
夏バテの私へ毒をひとつまみ
たこ焼きをつまみ祭りの渦の中
せんせーにつまみ出された事がある

人

出っ張ったものは何でもつまむ癖
お口まがちゃんと見えますつまみ食い
神様がひょいとつまんだ宝くじ

岸和田市文化祭参加

第56回岸和田市川柳大会

日時 10月22日(日) 12時開場

会場 岸和田市立福祉総合センター一階
大会議室(南海本線岸和田駅徒歩三分)

兼題 各題一句(欠席投句拝辞 席題なし)

「新 聞」川柳大阪 森松まつお選

「鯛」川柳阪南 森村 美化選

「世 界」川柳塔和歌山 田中 輝子選

「生 地」堺番倉川柳会 長江 時子選

「わいわい」川柳塔社 村上 玄也選

「ダイミツ」岸和田川柳会 宮野みつ江選

締切 13時 披露 14時30分

賞 文化祭賞・文化祭奨励賞はか

音楽演奏 アコーデオンの 片山 修一

会 費 二千円(参加賞・大会誌呈・軽食有)

懇親宴 四千円(17時~19時)定員30名

申込先 岩佐ダン吉(TEL072-14281)

0325)又は井伊東吉まで

主催 岸和田市・岸和田市教育委員会

連絡先 岸和田川柳会

〒596-0807 岸和田市東ヶ丘

町808-5886 井伊 東吉

TEL072-1444-3227

おどろおどろ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳エスポ

山本 三郎報

調べもの部厚い辞書が離せない
血液も春の小川もサラサラと
妻へやさしく出来る余裕を消す政治
歩こう会まだ四千歩行つてない
我が家の力関係犬が知る
生前のしぐさ懐かし大いとし
立ち話またかと犬が座り込む
大医者に通うお金は惜しまない
悲しみは鉄路を憎み雨の音
青蛙色より直せカラ梅雨や
人の世ははかない夢ととり飲む
夢描き共に歩かない五〇年
雨上がり雀の地鳴き庭先で
雨だれに過ぎし昔を思い出す
夢ひと夜せめてこの世の彩りに
気がつけば五十過ぎてても夢の中
ささやかな夢は足もと二輪草
犬と妻養うだけの稼ぎ高
空梅雨の曇さでリズム狂わせる

はつよ 三重
さとし 恵美子
みさと れい子
高 翔
晩 地
団 地
一 炊
ゆき子
一 歩
よねぞう
鈍 甲
文 好
星 花
とよ子
昭一朗

訳あつて雨戸閉ざして居ないふり
命名に子の行く末の夢描く
五線紙にハ調ト調の雨の音
いつか行く旅を夢見て佇つゲート
叱られた犬の尻尾が甘えてる
俄雨相合傘が縁となり

ローズ川柳会

山崎

君子報

泣きに來い懐深い故郷の山
返信の絵葉書モノに癒される
憧れはマッターホルンの空の星
つつましい暮し彩る豆御飯
世は末世事件不祥事山ほどに
そこに山あるからドラマまだ続く
聞いてないようでも父の咳払い
泰然の山の姿に落ち着きぬ
二人で登った山の景色を夢で見る
梅雨の花紫陽花今をばばらず
鍋ゆすると返事をしますキンピラ煮
参観日元氣な返事一年生

高槻川柳サークル卯の花

瀧本きよし報

任 宥
ルイ子
とし子
一 幸
たよし
三 郎
て る
みつ子
哲 子
トミエ
貴代子
孝 一
美 籠
いわゑ
武庫坊
年 代
義 子
君 子

権力の理不尽知らぬ間に通る
理不尽と思つていない強い国
日銀の総裁裏で金儲け
動かせぬ歴史へ理不尽な動き
理不尽な話呑み込み胃が疼く
妻の思案もしや熟年離婚かも
雑居ビルみたいな妻の思考法
大阪では流行りまへんで太極拳
待ち合わせ一分過ぎたら腹が立つ
爪先に血豆作っているいらち
かき餅はいらちに焼かす母の知恵
団十郎の睨みが効いた花の道
先生に睨まれいつも前の席
抜け目ない奴だとボスに睨まれる
善人も監視カメラに睨まれる
立ちしよんを隣の猫に睨まれる
子の前途へ睨みを効かす父の髭
睨んだら睨みかえした鯛買う
天井を睨み黙つて貝になる
追い風になるまで動かない根気
残り少ないページをめくる梅雨の朝
いい顔になったと妻にほめられる
梅熱れて一年生もらしくなり

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

回り道話尽きない星明かり
真つ当に生きて必ず来る明日
悩み事大師の胸に委ねたい
ゆつくりと羽をたたんで時を待つ

照 子
宵 草
武 史
求 芽
活 恵
昭 恵
美 義
乃りこ
高 栄
きよし
孝 一
稲 子
葉 子
泰 雄
宏 章
祐 作
美 籠
かおり
郁 夫
庸 佑
秀 夫
たもつ
比ろ志
八重子
賢 賢
寿々女
いさむ

かくしても性格出てるイカリ肩

生き字引花も実もある処置を取る

ダイエツト問題なのは太鼓腹

泥水にあんな綺麗な蓮の花

ブレゼント聞かれて遠慮裏腹に

木蔭からソツと見送る母の愛

優しさが心うれしい老いの日々

久々に実家で食べる亡母の味

川柳塔みぞぐち

小西

雄々報

苺畑歓声あげる子供達

食べどきへ鵝ときそいあう母

おいしいな母ののっているケーキ

皿盛りの苺ミルクで食そそる

かき氷いちご水かけさくさくと

だいふくと母意外なハーモニ

熟れたよと苺真つ赤に自己主張

太陽の恵みに感謝する苺

苺狩りツアーに甘い風が吹く

今日は来る予感苺を買って待つ

川柳塔唐津

仁部

四郎報

農業は撒かぬ私が還る土

また一つ核分裂の披露宴

虹汀さん川柳塔からつありがとう

雨やどりんでん太鼓一つ買う

お開きの頃討ち死にも出る二三

ゴミ出し日欲しい布団が捨ててある

社会まだ未熟と死刑判決書

ひかり かおり よしみ あきら 放任 文仙 治延 貞月 公美枝 弘子 鈴枝 久子 信雄 智恵子 和代 静江 正光 雄々

神棚に上げて夢見たジャンボくじ
ドラマだと分っているが泣かされる
輝夫 高明

京都塔の会

都倉

求芽報

一日のリズムは朝の番茶から

風鈴が涼しさ競う店の彩

ニヒリスト妻超の付くリアリスト

柵越えを狙い三振恥とせず

家族のため恥もかきますやせ蛙

バスツアー恥をホテルに置いてくる

人間だから恥に耐えます父の貨車

軽い嘘足してまあるく座がなごむ

厳しさを足した育児に波が立つ

足すことも引くことも知る二枚舌

やさしさも一言足して輝けり

ゼロ足してあるのにコンマ元のまま

足して引くいずればゼロになる命

弁当にきのうの喧嘩足しておく

あとで足す言葉にそつと母の愛

反対をしかねて渡る石の橋

反対の意見も聞いて妥協案

従順に見せて女の腹の中

沈黙という反対もあるんだよ

反対があるから人は進歩する

反対はすまい余計に燃えるから

反戦を骨抜きにする足音だ

竹原川柳会

時広

一路報

土捏ねて捏ねてやさしい顔になる

鹿太 啓子 きよし 宏子 満子 百合子 萬的 輝美 英子 則彦 高栄 益子 求芽 とし子 庸佑 尚士 正坊 美義 典子 葉子 蘭幸

佳句地十選 (8月号から)

原

賢

ボストンに入れて帰った旅の恥
ひよつと出たひと言葉に戻らない
明日という奇跡を持っている若さ
翔ぶ勇氣奇跡の風が背を押す
天才と言われこつそりする努力
言い訳の嘘へ唇よく乾く
源流の一滴汲んでいく命
妻と子にははさまれ孤立しています
抜け道は一つ残して話し合う
万策が尽きても笑顔忘れない

小さい芽でた出た土のやさしさよ
最高の笑顔が並ぶ泥だんご
草の根の根性しつかり土を抱き
土に生き土と話した祖父の鉄
固い土割つて若芽の底力
喜寿の鉄まあるく土と対話する
踏まれても掘られてもたくましく土
赤ん坊の笑顔で梅雨が晴れて来る
梅雨が明けたら妻と富士山を目指す
じつくりと雨と語ってみませんか
梅雨晴れ間みどりの風に心ずす
梅雨空に亡母と交信して飽かず
自己流を貫き通しているさすが
スイスイとツバメになつてみたい空

俊夫 芳江 緑良 紀子 たもつ 武史 ダン吉 惠勇 政子 一歩 房子 輝恵 笑子 笹代 笹舟 敬子 千代美 幸子 慶子 静風 半覚 淑子 比呂子 菁居 史子

運命を開く鍵ならもっている

思い出の映画音楽君と居た

映画ではこんなにもいい町でした

初恋の人と初めて見た映画

サスペンス続きはみたいみたくない

時どきは無声映画になる二人

ジョン・ウエインに成り切り映画館を出る

いい映画だったなコーヒーでも飲むか

川柳ささやま

遠山

可住報

まぐれだと言う口もとに自信あり

無事着いた知らせを待つて床につく

我が夫婦妥協はいつも妻が得

無理やりに呼出しという待ちぼうけ

妥協して二人三脚八十の坂

優勝をまぐれでしたと恵比寿顔

肩寄せてゆすり合つてる祖母の膝

孫と見るマンガの本がしわ増やす

幼な児のボタン止める手見つめ待つ

子と妥協むずかしい世に親は折れ

父と子の絆深めているマンガ

曾孫とマンガを見ては教えられ

気まぐれのような蝶にも当てがあり

お待たせをして初孫よこんにち

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

信頼が崩れて夫婦に溝できる

涙にはすぐに崩れる母の城

積木くずしそれでも父母はまた拾う

千枝

汎美

民恵

貞子

栄恵

力

節夫

一路

可住報

精一

純子

章

二英

文子

美紗子

多美子

開子

照代

かはる

つや子

富子

哲男

可住

秀夫

シマ子

三重子

マドンナの胸で戦士は眠りたし

テストされ僕は少数派に挙げる

美女になる顔を鏡でテスト中

予告ないテストへ右往左往する

先生の鞆テストの日のふくれ

境遇が同じで揃う旅仲間

ながい旅女ひとりが強くなる

盲導犬連れて明るい旅つづく

旅三日渴きを癒す老夫婦

幼君を育てる乳母は鬼となる

娘が五人我が家大奥さながらに

大奥の美女青春の夢果てる

上様のお成り大奥揺れ動く

お世継ぎの画策大奥の闇がある

大奥は鬼千匹が昼寝して

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

雨天決行何が何でも逢うつもり

胃の中に消化不良の過去がある

ウフフフまた寝られたミニトマト

ギャルに雨ビチビチ背中跳ねている

雨だれがこころに響く歳になり

ヤジロベエ今と昔がゆれている

少女期の抜け殻おいてある昔

繰り返す昔話を聞く介護

忘れずに昔と繋ぐ仏間の灯

語り部と歩く目線にある昔

昔はなし遠い黄砂が降ってくる

原爆忌の風がまだ熱い

克己

ダン吉

章久

美子

雅文

緑

美弥子

和子

湖風

八郎

シマ子

和子

あや子

高尚

愛論

保州

大輪

徑子

小雪

千代子

裕美

輝子

稚代

正博

紀子

あきこ

泰女

アルバムに昔がそこに生きている

婚姻届天下晴れても夫婦です

幸せは天下論じる友が居る

百点をひらひらさせて子が帰る

囁天下嫁に譲つて趣味に生き

囁天下敷きになるコツ覚え

心得て夫に天下の糸を引く

はち切れそうなバストがいいと言うてはる

蛙の子だつてでっかい夢を追う

私なりのサイズで大切に生きる

君に恋愛のサイズは無限大

サイズなど問わぬ互いの心意気

85までに止めたお腹周り

価値観のサイズが違う子の進路

戻りたいサイズ直してあの頃に

幸せのサイズはSで丁度良い

身の丈のサイズで欲は持たぬ主義

大きい方に縁起ダルマを買い替える

大原川柳社

山本

玉恵報

お腹蹴るこの子のための毛糸針

五十年一緒に住んで元他人

他人には見せぬ夫婦の隙間風

この道と決めて脇目はもうふらぬ

装いも軽く散歩の初夏の風

体重の軽い女に憧れる

軽い嘘だけその夜は眠られず

木綿針母のやりくり知っている

家業継ぐ針の筵で修業積む

和

三喜夫

三男

英子

紀久子

佐一

富美子

寿子

夕胡

登美代

精子

伶

東吉

和子

順子

よしこ

克子

豊太

文代

あやこ

とめの

あすなろ

絹子

静子

たづ子

みさこ

美佐子

軽口がまたも世間を騒がせる
相談を軽がる受けて後で悔い

他人行儀の挨拶油断しられない
他人同士寄り添うてから花も咲く

さつちりと急所へ母の返し針
この道を行くしかないの飯の種

間違えぬこの道しかと子に渡す
千人針遠い歴史は胸の中

ブライドを捨て地下足袋の軽い事
鬱つく姑の針山出してる

二日酔いによく効く妻のふくみ針
堪忍袋の底をも一度返し針

川柳ふうもん吟社

夏目

水虫も空の青さを見たからう

銀髪がまばい生きてる自信
豊かさへ勿体ないを忘れまい

ゴジラ役見では貰えぬ汗流す
水虫に負けぬ仕事の虫となる

七輪の鳥賊衆られてイナバウアー
水虫も心やさしい人が好き

万札がまばい財布空のまま
善人あぶんど灰汁が浮いてくる

水虫よなんでもそんなにおれが好き
古書漁りまばいものに触れたくて

水虫とわかれてみればいとらしい
炙られてなお顔向けるヒマワリよ

ハリケーンあればゴジラの鼻息だ
泣きにきた海がまばいので泣けぬ

巴子

喜美子

妻子

悦子

辰江

南花

地佳平

さちこ

敏夫

みづえ

はじ芽

玉恵

一粹報

洋々

一瑤

人間のシミを閻魔が炙り出す
水虫を飼ったまま履くハイヒール

騙すのもだまされるのもみんな人
一点に息を呑んだり殺したり

火炙りにされても恋を貰いた
ホリエモン炙る位でへこたれぬ

水虫のようにしつこい彼をまく
嫌われても水虫梅毒で天下とる

水虫を海水に浸け退治する
老人の温泉行きも際で減り

強い人ゴジラと称しあこがれる
百歳の笑顔に生きる糧もらう

マンガ本ゴジラ親子に魅せられる
突き放し陰で支える親の愛

ぼっかりと浮いて流れる君の嘘
ささやかな願いをひとつ流れ星

進学に父が本気で肩を入れ
新生児肩の重荷の長寿国

肩車祭りばやし風の風に会う
人知れず背負う重荷にあえぐ肩

肩車父の背思ふ祭笛
紫陽花に騙されたつて罪はない

飲み残しコーヒー無念の日が暮れる
忙しく蟻這い回る梅雨晴れ間

割り勘に分子の膨張想定外
三面に家庭崩れる音がする

蝶眠る雨戸は音のせぬように

昌鼓

かをる

節子

志げ緒

茂登子

はつ江

喜子

房江

蟹郎

行男

宗明

春名

益子

あしび

一粹

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

目の手術三泊四日良く見える
嗣治描く乳白色に立ちつくす

川柳塔なら

坊農

柳弘報

面識が無いが字に見る几帳面
花が浮く人の気も浮く水の面

子報士はグッス並べて雨を読む
無縁にはさせまい孫と墓参り

かくし味少うし足してついて行く
老いて子に従う息子まだ一人

アメリカに従うだけの総理です
手術後は可愛いナースに逆らわぬ

忍従の歴史を背負う基地の街
一オクターブ上がって妻の乱気流

長針は止まらず続くベートーベン
開店に並びメシ抜きパチンコ屋

蟻の列みな勤勉で生真面目で
人間のさもし揺れる水面下

雨のち晴こめんなさいが言えたから
円周率まで電算機稼働中

歳時記に従い早苗抱く棚田
残照の揺り椅子仮面脱いである

まだ消えぬ面影ゆれる花筏
面会謝絶解かれ疲れるほど見舞い

お天気の話長なが聞かされる
的を射るあなたへ百のラブレター

正子

半蔵門

蘭香

とし子

美佐女

博一

千梢

秋泉

東吉

弘風

良一

寿美

茂雄

章久

六助

ふりこ

理恵

英一郎

富子

のりこ

春雄

美千子

ダン吉

道子

弥生

重人

秋雄

にんげんの愚かに絶えぬ血のいくさ
創業の神話が生きている会社

國治 卓

慈母観音にそっくり母のデスマスク

隆盛

雨やんで虹を見る目のみなやかし
止まり方知らず狂っていく時計

一風 真理子

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

五七五寝奠塵にころび指を折る
全天をキャンバスにして太花火

勇治 肋骨

七癖を知って連れ添い五十年
のんびり屋の妻があたふた何かある

雪子 昭子

落ち始めた人氣ものかはプレスリー
七色の虹北方に消えている

勝 柳童

洋服は衆に染まらぬ黒い色
一分だけ減らし七分でダイエット

見清 黒兎

よく出来た五七五に満足し
肉屋さん市場の隅に伏し目勝ち

いさむ 祥風

七つ釘の兄の遺影に夏巡る
落雷に猫も一緒に丸くなる

蜩柳 長一

あたふたと買った安物ゴミとなり
若葉マークの助手席にいる七曲り

禮子 春代

ピンク色私の恋へ後押しを

契子

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

シナリオの所どころに花を添え
ひとつずつ忘れて余生面白い

ちよえ かつ子

人間と同じ仕草の親子猿
難問に頓知がピンチ切り抜ける

伸子 聖子

ピンチでもするりと抜けて嫌われる
はるみ

欲張りな余生夢みた奴風

立ち退きを迫られピンチの六地蔵

何を書く余生余白の白い紙

花一輪つけて古木にある余生

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

少しづつあなたへ合わす落しぶた
好きですとズバリと言った遠花火

晴美 五月

欠点のない人なんてつまらない
入れ歯の世話にならず傘寿を無事迎え

朋月 五月

サッカーに力入れすぎ入れ歯飛ぶ
ストレスの音も伝わる聴診器

きよし よし子

改札で夫婦とわかる待合わせ
ズバリ言う少し棘あるほめ言葉

宏一 耕治

節ぶしに天気予報の基地がある
白い歯に惚れた夫も総入れ歯

里江 耕治

万歩計風は毎日色をかえ
伊達眼鏡らしいがとても似合ってる

勝巳 里江

夫婦ではないと知ってる宿浴衣
告白はズバリ好きです押し通す

亀子 勝巳

ズバリ効く特効薬に副作用
吊り場所を風鈴に聞く風道

伊三 美代子

入れ歯でも嘘と本音は噛み別ける
入れ歯にもランクがあるという歯医者

孝一 義芳

好きだよとずばり言われてどうしよう
カーテンを替えて離婚の話など

比呂志 正治

母だけはズバリ原因掴んでる
入れ歯にも松竹梅があるらしい

全彦 求芽

父の日の入れ歯笑顔を絶やさない

美桃 美籠

川柳塔まつえ吟社

三島 淞丘報

恥かいた事も懐かし旅日記

過去は過去恥じぬ母のボランティア

赤っ恥かいて知識がひとつ増え

恥一つかいて利口になつてくる

赤っ恥かいて人生まだ続く

夜店では親子和音になつてゆく

金魚掬い囲む浴衣の子の笑い

夜店では親子が同じ顔になる

綿菓子子の半分ほどの孫の顔

浴衣着て金魚掬いに袖濡らす

夜店から昔の僕が出てきそう

空道湖に沈む夕日を掬い上げ

嫁島の伝説のせて湖は風ぐ

車窓からふるりの湖見えてくる

明けきらぬ湖上に浮かぶしじみ舟

湖の風は冷房止めさせる

苦も楽へ幸せ拾う湖畔の湯

日に何度探しても私影探す

わたくしが私を探す闇となる

締切りへ言葉を探すボールペン

パソコンの奥へ奥へと探し物

自画像の仕上げの色を摸索する

散水のホースの霧に虹が立つ

虹の橋二人で一度渡つてみたい

団塊の世代に期待虹の橋

茂美 房子

たえこ 喜美子

小生 喜美子

治代 紫晃

注湖 邦代

多賀子 柳歩

幸 柳歩

桂子 政子

たけし ちえこ

多喜 玲子

螢 知恵子

芳山 淞丘

和歌子 蘭水

幸子 幸子

また寝言妻もいろいろあるらしい
ストレスに振り回されている鼓動
ストレスに罪を被せる聴診器
ストレスばりばり殻付きピーナッツ
掃除好きいいえストレス過敏症
振り出しに戻してから牛蒡抜き
進歩したはずの頭が後戻り
退院の許可で戻ってきた笑顔
森の一滴流れて森に戻れない
ハーモニカあの日が戻る木の校舎
引力を信じてきみの手を離す
人間に戻る電源オフにして
踏み込んで来るから少し押し戻す
同情を集めてもろくなる背骨
躓いた時からぴんと背骨伸び
骨惜しみせぬ母の手に並ぶ胼胝
歳月の重みが語る骨密度
骨のない男が多いレントゲン
無骨な手握り飯なお手のもの
草を抜く形になっていく背骨
骨盤の広さ女は海を抱く
幾万の骨埋めしや野辺の青

川柳茶ばしら

板山まみ子報

みね 当代 町子 和子 宏夫 孝義 かずみ イセ 幸 章子 幹子 准一 豊太郎 起世子 昇 純子 保州 徑子 登美代 朱夏 千秀

一匹の蚊に手こずって振る団扇
寿司飯の香りほのかに団扇風
真夏日の残葉落ませ生ビール
川柳大阪 長井 善純報
少子化に拍車をかける医者不足
ぬるま湯にどっぷり浸かるイエスマン
安からう悪からうのエレベーター
改革が身内のボロも洗い出す
欲望の電車に今日も乗り合わせ
ボクの愛となたかもろてくれなにか
足の爪染めて女房下心
趣味川柳法事の席で披露する
点検をやつてる時は異常なし
核よりも勝る言葉で国守る
持つて死ねん金をあんだはどないする
ときめきも無くてこの頃不整脈
ご好意に素直にあまえ丸く生き
酸っぱくてうまい梅干し母の味
好意だが少し重たい思いやり
赤字でも何とかひねり出す女房
尻ひねるりっぱになったガキ大将
総理殿愛国心はまず貴方
次期首相多少の差だけ皆同じ
大地震地球の怒り止まらない
独り居る事の空しさ扇風機
人気ない父の日やとバラの花
税上がり年金目減り格差あり
元栓が気になる今日の不眠症

幸子 まみ子 百合 芳香 重人 ひろゑ 鉄心 洛醉 川童 隆司 東吉 照月 五月 章久 いつみ 司 一風 かよこ 彦太 信醉 紀雄 勝弘 福世 春蘭 孝一 功 一歩

ゆつくりと嘔むとおいしい味が出る
ささやかな好意嬉しい車椅子
泣き所知ってひと押し味な奴
見えぬようきゅっと太股ひねられる
一捻り足らずが逆に清々し
おもいきりひねってやりたい軽い口
川柳塔のぞみ 播本 充子報
パレードへ鬼がバケツで水を撒く
成り行きで買った株にも山が来る
ぶらり旅今夜の宿が決まらない
成り行きのまま流されて海に出る
いつの日か絶滅するぞ日本人
胸痛む誰かが五寸釘を打つ
もしかして私の前世天女かも
成り行きで隣に座つただけのこと
口裏を合わせば共謀罪ですか
給食のニコニコ運ぶボリバケツ
似たような数字が並ぶ宝くじ
もしかして大統領にすぎる母
日銀に預けりや倍になるかもよ
十七の春みずいろの恋でした
もしかして明日だったか誰も来ず
神様も好いた惚れたは止められぬ
成り行きで今日を過ごしていません
思い出はバケツリレーもない昭和
山登り三日経っても戻らない
菜園を愛しむ水のあるバケツ
大師さま会いに来ました梅雨晴れ間
安子 順風 日出子 奮水 保州 由一 康子 あやめ 清 慕情 やすお 柳弘 恭昌 哲男 尚士 たず子 哲代 方子 勝 笑風 美花 喜楽 利昭 宏 善純

よく光る指輪偽ものかも知れず
もしして汽笛が合図だったのか
とりあえずバケツはいつも救助隊
もしかして鍵を忘れた朝の窓
目覚めたら軍艦マーチ鳴っていた
思い切りバケツたたくと逃げてった
マイペース成り行きだけで生きている
ベツカムになるかもしれないうちの孫
二匹目のどじょうを入れる氣のバケツ

城北川柳

吉岡

修報

嫁の肩持った息子は嫁のもの
五十肩かくして妻の若づくり
相合へ肩を濡らした花の寺
両肩に入れた力を子等が抜く
先生の肩越しに見る正誤表
子沢山休む間のない母の肩
一肌を脱いでやりたい肩も古い
水筒が消えて淋しいゴミの山
筒笑いて夏を押し出すところてん
水筒に穴が空いてた遺品展
箸筒の中で家族が混ざり合う
仲裁の来ない喧嘩が止まらない
子に託す延命処置は止める事
酒止めるまた言っている二日酔い
年金が減って税金跳ね上がる
ジェラシーに堪えているのか花時計
脇役の人生父の丸い背な
どっこいしょ氣合を掛けて今を生き

桃 葉
きよし
典 子
宣 子
ダン吉
昭 子
美代子
リッ
充 子
倫 子
麗
朝 子
ルイ子
修
美智子
順 三
一 歩
とし子
典 子
郁 夫
あやめ
叡 子
利 昭
正
志華子
はじめ
高 栄

疑って分らぬままに時効来る
肩車してやった娘もお年頃
一尾となつて長びく金魚鉢
辛うじて中流ですとしておこ
鳩時計壊れたままの倦怠期
談合で企業は太る赤字国
今日もまた俺に歯向かう体重計
鳩尾へ不満が溜まる夜のしじま
株主の総会先ずは謝罪から
イヤリング甘い言葉聞き飽きる
ビリオンドを打たねば先へ進めない
まさかの時走れる元氣残しとく

高知川柳社

川竹

松風報

歳ですと弱音を吐いて酒一合
流石だな弱音は吐かぬうちの嫁
人間が素直弱音に嘘が無い
指切りの指に弱音を聞いてやる
弱音吐くライバル妙に氣にかかる
海千のママの弱音を聞き流す
指切りに嫉妬しているくすり指
指切りの禁煙管めて酒を注ぎ
指切りの嘘を小指は見抜けない
指切りもこれで三度目崖つ縁
指切りの子の澄んだ眼を汚すまい
指切りをした指で捺す離婚印
指切りをしたのに来ない人を待ち
将来を誓った指がそっぽ向き
指切りを神としてから血が通う

昭 子
達 子
春 蘭
和 夫
柳 弘
桂 作
弘 風
萬 的
東 吉
集 一
明 子
たもつ
功 雄
孝 雄
暖
快 風
た だ し
正 躬
良 雄
京 子
千 鳥
三 郎
典 雄
美 々
利 江
まき子
哲 史

からませた小指に罪はないのです

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

てるみ

感謝して落葉輪廻の地に眠る
愛失せて欲望だけの水中花
欲望ではちきれそうな頭陀袋
健康でボケずには運動うらやまし
欲望があるうち僕は生きている
脈々と未だ欲望を抱いている
花の下眠るがごとくボツクリ死
六十年放国の土を踏む遺骨
豪雪を踏み越え生きた北の性
ベテランは場数を踏んだ味がある
披露する一句一句を咀嚼する
子よ孫よ踏まれて伸びる麦になれ
青春の過去は廊下に立たされる
欲望の海で浮いたり沈んだり
クマ笹を踏み分けて行くけもの道
踏んばって歩む一歳児の未来
先生の瞳が濡れる登校拒否

南大阪川柳会

吉川

寿美報

団塊の世代またまたコネがいる
切れそうなコネを論吉が修理する
コネあつて新会場で幕が開く
耳元へふにやふにやにする甘い声
ふにやふにやにさせて鋳型に流し込む
ふにやふにやになるまで飲んでけりつた
ふにやふにやの豆腐の芯のかたくなさ

嵐 蝶
一 吞
誠 子
て る
隼 人
ヒサ子
愁 女
順 風
花 匠
銀 波
黙 人
岳 水
花 峯
慕 情
一 花
五 楽庵
叡 子
尚 士
昌 紀
弘 風
柳 伸
修
ただよし

村上にのせられちゃったホリエモン
 やつと苛酷な現実を乗り越える
 乗せられていつも上手に使われる
 エレベーターに乗る緊張の第一歩
 六十五億乗せて軌んでいる地球
 欲望が無いと言うから信じない
 欲望は他人に見せながら宝もの
 衣食住足ってもきりのない欲望
 もう何も引かぬ足さない日の欲目
 欲望が生きた支えになっている
 徒花でいいから咲いてみたいもの
 梅雨晴れ間くつきり伸びる飛行雲
 テポドンが広い地球を狭くする
 一枚一枚手をかけ広い千枚田
 病癒え視野に広がる青い空
 しがらみを丸ごと脱いだ広い視野
 顔が広い妻のうしろで定年後
 広い空オーロラ神のなぐり描き
 宇宙への広さににつづく禅の庭
 肉じゃがの味が膚にされました
 ふにやふにやが昨夜の秘密明かさない
 張扇子叩くと嘶乗ってくる
 急停車冷汗だけで無事にすみ

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

利昭 集一 祥昭 楓楽 郁夫 ばつは 東吉 柳弘 榮子 千里 なきさ 憲太郎 たもつ 更紗 朝子 修文 雅文 萬人 重人 遠野 章久 弘子

組の朝を作っているリズム
 ネジ山の一つ一つにあるドラマ
 移植への切符握った六歳児
 金婚で再スタートの切符貰う
 身のこなし女盛りの切符貰う
 リズム良い話に嘘がたんとある
 故郷の山大きくてあたたかい
 煮こぼれる話に欲しい落し蓋
 洋風の暮らしに正座消えていく
 シヤルウイダンスやつと掴んだリズム感
 モルモット代わりたまらん医療ミス
 花咲けばてんやわんやの山の寺
 お互いに仲人口に乗った縁
 騙された数だけ大きくなる器

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

いつふみ 秋雄 あかり 一風 朝子 ダン吉 欣之 直子 ますみ 柳伸 高栄 きらり たもつ 弥生 章江 春枝 瑞枝 初枝 なみ 富美子 天雀 ゆき 品子 那珂子 雪江 千春 紫泉

若葉陰秋へぐんぐん柿の花
 今一番欲しい大語の翻訳器
 梅雨入りに気分ドライブで乗り切ろう
 満開の華ばなしさもやがて過去
 平和だと勘が狂いする空の青
 へその緒がほのぼのむかし語りだす
 日銀総裁まで欲得をむさぼった
 あの頃も今も何となく夫婦
 どん底を知ってる人の目がきれい

長柳会

村上

直樹報

スミエ 寿々子 恵子 ふみ 蘭 てい子 千代 日枝子 やえ 直樹 美代子 武男 明信 明子 敬二 芳野 けい子 マサ 靖子 よしお 輝子 史 正子 三和子

雨漏りの屋根と人生歳重ね

モーツァルト聞いてゆつくり朝のパン

今度生む時はイチローみたいな子

宇宙への夢を生み出す町工場

屋根裏の部屋父さんの夢の基地

電子音に囲まれ風は無表情

争って悔いる心が音を立て

生むを知り育てを知らぬ親が増え

真つ新な明日が生まれる大落陣

ザル蕎麦を音から食べている旨さ

豊中もくせい川柳会 江見

故里の風に触れたい旅かばん

ワンチャンスもしもに賭ける針の先

補聴器の感度を上げる訳がある

W杯負けて愛国心も冷え

聞く耳を持って仲間と夢を追う

会うたびに母少しづつ遠くなる

徳利振る酒も命もすこしある

大和路に茶粥はつこり金魚池

もう少し生きよう花が美しい

大好きなあの子と一緒に笑は夢

祝儀袋はまやうつワ気持ちだけ

とてつないアイディアを生む非常識

嫁が来て御役御免の私です

病名のつかぬ病にまどわされ

里の道歩けばここが役所跡

孫の顔見せれば土産なくてよい

焦点を少しずらせば陽が当る

不二雄

正一

一慧

和代

淳司

和子

英美

幸雄

富美子

正美

見清報

庸佑

高栄

重人

啓生

和子

夢

勇治

都代子

正坊

竜治

宇乃子

則彦

巴子

知香子

郁子

見清

比ろ志

ライバルと並ぶとすこし背伸びする

頑固さが仲裁役になりきれず

迷つたら向いているなあ母の里

おいお前反省しろと波の音

母さんを叱ってくれる子が欲しい

あつたのか僕の口座につく利息

落し場所聞くな交番あはちやうか

見て聞いて腹の立つ事はへりです

母ちゃんの都合で小遣いへりされる

役人も北の核には意地を見せ

人間の都合が変える花の四季

海鳴りのように格差を嘆く声

サークル檸檬

吉田あずき報

腹一杯いのち頂くこと忘れ

半分はお惚気だった友の愚痴

どう生きる人生残り四半分

当てにせぬつもりが当てにした報い

真実は痛いところに突き刺さる

五合目ではつとずる人気張る人

支えられた半生思う花手桶

半分の気力智力で生きたかな

ハンドルの遊びが欲しい暮し向き

暑い暑いすこし脱ぎまひよ自尊心

夫と妻半分ずつで思い出す

半分はあなたの彩に染まってる

蓮開く人間の愚痴あざ笑い

何できぬより何でできるかを生き甲斐に

百均へ履歴書用紙買ひに出る

寅次郎

求芽

玲子

萬的

満寿巳

肋骨

美義

久太郎

寿美子

早人

幸雀

尚士

哲夫

遠野

楓楽

房子

扶美代

昌紀

美龍

みつ子

光久

義子

あずき

いわゑ

希久子

正坊

棲世

半分できたわが子をうんと褒めてやる

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

鶴には鶴の亀には亀の誇りあり

千羽鶴と元氣にとんだ退院日

鶴の一声採めてる会議幕になる

千羽鶴折つて平和を折つてる

痛い目に会つたひとこと多かった

痛むほど意地でも言えぬ土性骨

赤い爪に口はつかしとつねられる

ライバルが痛い所を突いてくる

見たくないものを見てから目が痛い

大ジョッキ今日の痛みを忘れよう

ひと安心はつとする間にまた追われ

安心の携帯電話持たされる

世間にはこんなやさしい人もいる

有難い心安らぐ日がある

ともかくも年金という薬がある

安心の保証保険が揺れている

安心の絆がゆれる親心

今頃になって分かった亡父の傘

こつこつとためたお金だ無駄出来ぬ

こつこつと家計簿つけて生延びる

こつこつと物にするまで餌を撒く

こつこつと貯めたお金を税が取り

仰向いてこつこつ描く天井画

こつこつと貯めて見事な金離れ

こつこつと溜めた妻から鳩が出る

たもつ

吐来

りつえ

志洋

真一

ダン吉

美喜

一壺

耕策

庸佑

美代子

扶美代

昭平

ヨシ枝

栄一

フジ

みつこ

章司

久仁子

悦子

たけし

喜久子

光男

敏

かつみ

いさお

一知

こつこつと歩き続けてきた自信
第四コーナーメトロノームが急ぎ出す
一流ではないが矢つ張り母の味

むらくも川柳会

毛利

汗かいたビールの旨い風呂上り
陽が落ちて昼間の汗がうそのよう
化粧して汗ばむ顔にサングラス
汗かけと日頃先輩身にしみる
熱演の顔に流れる玉の汗
人生は苦勞山坂汗をかく
クールビズさわやかな顔映し出し
日の丸のレールばかりを踏まされた
山並みの新緑ころ洗う色
いきいきと元氣いっぱい今朝の道
草とりも孫と一緒になら楽し
同窓会八十路の友と賑やかに
ワープロが打てない私鉛筆派
髪型が胸の思いを語ってる
民謡に女の希い雫する
検診を控えて酒を少なめる
お日様に叛いた雲の乱気流
おだやかな湖へ私もなく心

川柳ねやがわ

森

この辺が相場と思うひとと住む
パソコンがプロの相場を狂わせる
相場では私プラスかマイナスか
本物の相場で買った二七の壺

重人
六点
泰子

幸報

定子
英男
安男
彰
美保
幸夫
信夫
義良
恵美子
ます美
昭子
寿
喜美
蘭水
瑞枝
俊夫
秀夫
秀子

茜報

弘風
博泉
ルイ子
恵子

父の日に男の相場計られる
誕生日平均寿命考える
暗証番号生年月日です私
旅行社が主催で祝う誕生日
負担額一割になる誕生日
今日だけは主役になった誕生日
赤飯をチンするだけの誕生日
性格の不一致金で我慢する
趣味が合い面白そうで嫁に來た
挙国一致号令かかる日が来そう
下積み意見が一致する屋台
アリバイに時計の針を一致さす
わたくしの足の形になった靴
ご意見が一致しました先送り
ドミニカの移民時効だとは無茶な
無茶苦茶に塗ってピカソという名画
ごり押しはベリーの時代からでした
無茶苦茶アチャコこの世を見てごる
お父さん無茶や死ぬ気でやれなんて
無茶をするエレベーターに罪がない
父の日へ半透明のお父さん
萎えてきた足へ鞭打つ万歩計
双方の面子が立って元の鞘
持つ箸の震え止まらぬ骨拾い
自問自答いつまで続く五月雨

川柳クラブわたの花

井尻

六甲が私の灰汁すくい取る
花の美にうっとり出来るヒマ嬉し

集一
仁清
柳弘
さち子
九好
三郎
利昭
弘一
麗

民報

一炊
郁夫
亜成
茜
高栄
修
高栄
たよし
寿男
一風
たもつ
朝子
かすみ
庸佑
忠央
洋

民報

ふりこ
克美

玉の汗ありがとうねに救われる
金儲け狡い子隠し紳士然
面影を追って乱れる未練酒
天仰ぐ悟りきれない夢ばかり
鯉のけり旧家の嫁の誇らしさ
かくしても妻の勘には両手上げ
べいゴマを投げた路地裏ビルの下
お勘定酔ったふりして人任せ
腐っても鯛鰯には負けられぬ
どん底に生きて迷いが吹つ切れる
歳積んで未だ悟りの縁遠く
ママ鬼がそつと涙の愛の鞭
生易しい事ではないよ生きるとは
あたたかい友のかくれたおもいやり
母さんの勘はするどくよくあたる
予報より当たる漁師の父の勘
もう少し早く悟れば長者かも
これだけはマル秘なんです勘所
無事願う紐に託した千羽鶴
悟ったような顔でごはんを食べている
瓜二つ表れいらぬ親子連れ
三歳児坊主と言われ坊やだよ
流し目にくつとりしたの誰だった

富柳会

池

成すことも成らず徒勞の舟を漕ぐ
みぞおちを探るとほとと火が灯る
慕情とも知らずあじさい咲いている
関わりは皆無と記憶悪い霧

君江
宏
一風
幸枝
晴美
俊子
浩三
たえ子
妙子
ますみ
いつみ
知佐子
民
宏至
博子
八寿子
正春
はじむ
愛子
ミツ子
義明
莊治
孝子

森子報

紅紫朗
アキ
扶美代
隆彦

竹篋の音怖ごわの座禪堂

夢破れ土のぬくもり抱きしめる

鏡の中にバートの欠けた顔がある

小板橋渡る露子は街の顔

散り際を想い造花の疲労感

無を手繰り空をたぐっている坐禪

真実を探る消しゴムだけが知り

迷うのも楽し女のショッピング

涙ぐむたに岬の風に立つ

田周の中に私の好き勝手

春が逝く折半にならざりし愛

春風が立ち上がる時何かが起きる

探られているとも知らず良く喋る

いざ夏より落ちる汗もよし

ゴキブリは勝手知ったる我が家主

まな板にあなたの疵も付いている

勝手口開ければ母がすぐ見える

勝手口今宵はそっと開けておく

待つことに慣らされる三分診察

堂追う言葉少なくなる女

手の内は言うてみたいし秘めたいし

探られる腹なら何時も洗つとく

いざさらば神も仏も風にして

川柳さんだ

北野 哲男報

妻がもつ夜店の金魚ぬしになる

用水路とつこい金魚泳いでる

涼しさが金魚に心癒やされる

鍵穴へ老眼鏡をかけ直す

淳 司

冬 虹

和 子

浩 子

一 慧

欣 之

信 子

宏 至

鬼 焼

ひろ 乃

萩 乃

春 蘭

泰 女

あかり

彦 次

伸 雄

淳 子

高 鷲

よりこ

初太郎

深 雪

澄 子

森 子

宣 子

正 和

一 之

千代子

大穴を当てず人生無事でした

友が逝き心に穴が開いたまま

八十路旅枕投げて子に還る

小泉さん卒業旅行上機嫌

保育所に預けて勤める今の嫁

御先祖にかこつけ買った京の菓子

飲む会へ何故か下戸だがさそわれる

初恋という字なぞれば疼く胸

考え人のポーズで昼寝中

楽しげなデイサービスの話聞く

入道雲に負けじと玉の汗をかく

フルムーン妻は乙女の顔になる

真四角なおにぎりならば転ばない

人生で転んだ果てか青テント

転ぶより仕方なかった自己主張

幸せは転がって来た訳でない

川柳塔打吹

野口 節子報

赤い色消えて久しい過疎の村

孫娘女になつてお赤飯

大赤字うちの家計は火の車

飲み過ぎにレッドカードを用意する

血流がルンルン気分で回ってる

エビス顔夫婦で愛を合唱し

喜寿の坂網渡りしよう恋人と

青葙を渡つて響く鳥の声

あの橋を渡るとそこは桃源郷

女界灘渡った友が帰らない

面舵いっぱい男は夢を膨らます

聖 也

歳 子

開 子

雅 司

二 英

茂 山

俊 昭

好文

キヨミ

美紗子

婦美子

光 久

朋 月

藤 朗

忠 男

哲 男

孝 恵

和 枝

勝 憲

茂 夫

楨 元

小 生

紀美子

善 江

和 子

重 忠

美ッ千

娘の舵でショッピングする花の午後

波乱万丈いかりおろさず舵握る

海ゆかば歌つて舵は波まかせ

船長の舵が怪しい日本丸

我が家では舵は女房亭主寝坊

舵もなくすいすい進むタライ舟

失敗の舵は巷に捨てて来た

目をつぶれば舵は故郷へ向いている

舵取りがよたよた歩くねこ車

東京駅舵がなげれば動けなく

汗かいたあとのビールのうまいこと

遺品には父の流した汗の跡

温暖化地球の汗で濡れそう

生きてます汗の塩気が匂い出す

汗よりも文句が先に出てしまう

KOをされた男のバスタオル

品のない国を相手に汗が出る

飛び散つて輝いている若い汗

汗知らぬ奴が宝の山を持つ

翠 洋 会

谷口

いつの日か絶滅するぞ日本人

胃腸には自信あるのに義歯ばかり

生かたてサブリメント箱並ぶ

一円をたす一億円になる

わたくしのビキニ狙っている視線

狙われているのに総理はしやぎ過ぎ

首位の座を狙う猛虎の意気やよし

きみ子

美知江

螢 彦

照 彦

清 滋

克 枝

芳 光

京 子

玲 子

美美子

幸 子

龍 枝

睦 子

三津子

石花菜

完 司

玲 坊

節 子

義 報

尚 士

春 登

れんげ

日の出

義 彦

理 恵

桃 花

恭 昌

狙われる薔の刺を硬くする

税上がりふところすつかり顔な

散歩道大とすつかり顔な

里の駅すつかり顔な

嫁が来てすつかり顔な

頼みごとすつかり顔な

世界遺産せめて隣の高野山

何おもはしやぎ過ぎてる小泉さん

価値観がすつかり変わる世の動き

親殺し子殺し憂いの外は雨

錆びて来た脳リフレッシュ怠らぬ

歩には歩の生きる道あること悟る

髪アップ和服着くはないらしい

親友にはその計略に乗ってやる

ストレスは鶴亀算でてこずって

まだ夢を抱いて八十路をボチボチと

代々の土に生きてる背が丸い

水面下噂往つたり来たりする

闘病という言葉ありたかわん

岬川柳会

八十田洞庵報

少子化でどこへ行くのか日本丸

ネクタイをほどいてからの酒の味

ライバルに負けぬネクタイ締め変える

丸い背芯は真っ直ぐ光ってる

御機嫌は冷しビールで笑うパパ

結び方おぼえた頃にクールビズ

梅雨晴れ間のうぜんかずら花燃える

露天風呂湯気をゆらして初夏の風

昭

水界

みつ子

正雄

志華子

蕉子

絹子

叡子

満作

富子

舞夢

集一

さと美

孝一

千梢

照也

捷也

千歩

正坊

朝日浴び我が身に生氣湧く

ネクタイが疲れ果ててる金曜日

才女より心優しい娘に決める

老夫婦すこやかなれど天の川

浮き沈み笑い話にする余裕

正直に行方を知らせ母叫ぶ

独断で決めるトップに秋の風

ネクタイを取ればおいらの親父だな

倉吉川柳会

竹信

照彦報

感謝するたびに合掌して仕舞う

健康に生れて育ちありがたう

親の骨拾いはじめて有難う

三度さんど菌に感謝して飯を噛む

この会釈深く感謝を込めてある

手も口もまだまだ達者感謝する

孫の声毎日聞ける距離に居る

この世からあの世何万キロなのか

はるばるの顔に見えます山の神

遥々と彥星からの愛メール

豪州へ行った若さよアルバムに

はるばると子育て燕夢連ぶ

はるばると思う間もなくもう傘寿

はるばると来たつばくろに軒を貸す

靖国へはるばる神の子と逢いに

ふところが温かいのかい笑顔

胃カメラが内ふところのきこ取り

ふところに抱く用済みの両乳房

ふところにまだ色褪せぬ青春譜

富美子

蛙城

令子

洋子

里子

桜琴

珠子

洞庵

螢

賀寿恵

(西)喜美子

重忠

玲坊

由紀子

京子

完司

次男

満

和子

風露

康子

茶子

かつみ

萩江

石花菜

和枝

きみ子

いざという時懐にある啖阿

懐は今日も淋しい空は青

懐はどうなるだろう高齢化

何たつて日本列島世界一

引きこもり孤独の島で SOS

ブラジル戦日本列島燃えに燃え

10連敗取り付く島がありません

ゴミの山日本列島埋めつくす

医者いなく子供産めない隠岐の島

島国に住んで魚の輸入とは

蟹気楼島がボロボロ溶けている

川柳藤井寺

高田美代子報

貸してやり戻ったこと無い傘と本

地球上いちばん怖い核の傘

不況風寄れば大樹の傘の下

先斗町今も蛇の目の生きる街

傘立てに返し忘れたままの傘

男の夢相合傘と膝まくら

乳母日傘昔むかしの日にかえる

納屋の隅みのがさがあり宝物

置き傘のような男にされている

紳士録頭上がらぬ姉がいる

かつさいを浴びた録音何度でも

おばあちゃん録画ボタンを押すだけよ

先哲の語録大事に座右の銘

目録にない饒舌な妻の口

人生の付録を生きる万歩計

残らない記録を汗が知っている

よしえ

瑞子

(前)喜美子

幸子

悠子

秋草

鬼一

醉美容

泰輔

日出子

照彦

史郎

一歩

いさお

喜代子

美代子

志洋

悦子

シルク

ダン吉

重人

昭子

ヨシ枝

かつみ

耕策

扶代

絹歌

公子

心技体国技も今は国際化
処世術作り笑いの技磨く

亡夫の表札玄関からは外せない
玄関にベットのワニがお出迎え
八人目の敵玄関に立つていた

玄関に素顔を置いてゆくいくさ
玄関に素顔を置いてゆくいくさ
玄関の前で挨拶言ってみる

玄関の花に伝言して帰る
住む人の風格玄関に匂う
銭の音聞いてゆつたり床につく

胎児にも音楽聞かせ待っている
青い空心フリーにする不思議
親子共有フリーサイズで夏を越す

逆転のチャンスを保っているフリー
おしどりのやがてフリーになる番
停年で夫はフリー妻不自由

正直な男で演技などできぬ
川柳エスボ
山本 三郎報

桃太郎さんもとあけてよきび団子
メルヘンのイラストハガキ孫に出す
今もう童話で育つ子はいない

めでたしの結末聞かぬ子の寝息
掘炬燵困んで聞いたかくや姫
小一のまごが主演の桃太郎

幾度でも聞いてあきない童話集
耐震偽装たぬきの乗った泥の舟

節子

孝男

忠良

蟹郎

一瑤

一京

たぬ

幸枝

雅女

圭一郎

葛子

一粹

和枝

睦子

茶子

和子

美恵子

三郎報

山本

三郎報

三郎報

三郎報

三郎報

三郎報

三郎報

三郎報

三郎報

三郎報

開発で御伽草紙の里が消え

愛し児に添寝の童話母の愛

開発が民話のルーツ消して行く

残酷な場面があまたある童話

戒めも愛も童話に教えられ

年とれば飯面夫婦の出来上り

あじさいをまねて雨の日喜ばう

遠き日の思い出やさしいに行く

果てるまであと幾度積むありがとう

夢で逢う亡妻はいつでも若いまま

さとし

三重

一幸

さち子

高栄

恵美子

星花

文好

はつよ

任宥

第16回東三瓶フラワーバレエコスモス祭り川柳大会

日時 10月8日(日) 10時開場

場所 飯南町 さつき会館

課題 (各題2句) 12時出句締切

「楽しい」 福岡秀夫謝選(飯南町)

「酒」 熱田圭詩朗選(斐川町)

「夫」 毛利 幸選(雲南市)

「妻」 富田 蘭水選(出雲市)

「米寿」 長谷川博子選(松江市)

会費 二〇〇〇円

懇親会 一五〇〇円 随意

投句締切 平成18年9月末日

投句料 一〇〇〇円

賞品 トロフィーその他

投句先 〒690-3207 飯石郡飯南町頃原二二七八

主催 東三瓶フラワーバレエコスモス祭り実行委員会

共催 とんばら川柳会

2006

文化祭吹田市民川柳大会

日時 10月29日(日) 11時開場

場所 吹田市文化会館 メイシアター三階

(阪急北千里行き吹田駅西口前)

課題(各題2句) 投句締切12時20分

「連想吟」 田中 螢柳選

「髪」 西 美和子選

「眼」 谷垣 郁郎選

「まじめ」 奥田みつ子選

「開く」 前田 咲二選

「途中」 長江 時子選

会費 一五〇〇円(秀吟賞・参加賞・軽食呈)

アトラクション 投句締切後マジックショー

見学 一般市民の方の見学可。著名川柳

作家の作品を展示。

懇親会 会費四千元(当日申し受け) 希望

者は左記へ申し込み下さい。

申込先 坂本晴美 06-6384-2466

中川隆充 06-6833-0744

主催 吹田市教育委員会 吹田川柳会他

事務局 〒565-0822 吹田市津雲台3-4

A-22-704 中川隆充

柳界展望

の同人受賞者は次のとおり。

〈大賞〉

お月さん地球きれいに見えますか 山下 節子

〈準賞〉

てのひらに乗せるあなたの四コマ目 倉益 一瑠

〈文芸賞〉

石谷美恵子 澤裕子 永原昌鼓 蔵本悦子

☆第26回ときせん賞追加
〈佳作賞〉 古久保和子
☆06柳都全国川柳大会は6月25日、新潟グラントホテルで開催された。当日の本社関係者の特選句。

記念樹よみんな変つていのように 小島 蘭幸

☆第9回鳥取県川柳文芸大会は7月9日106名の参加で開催された。同人の天位と総合順位は次のとおり。

弁慶の脛を狙っている小粒 倉益 一瑠

河口付近に活性炭を敷いておく 鈴木 公弘

第三位―倉益一瑠 第四位―新家完司 第六位―鈴木 公弘

なお鳥取県川柳文芸大賞

時がある 太田扶美代

押し問答だんだん声が濁れてくる 太田とし子

神の目はちよつと斜めに付いている 高島 啓子

▽同人動向△

○黒川紫香相談役は、8月12日に満99歳の白寿を迎えられた。

○川柳塔まつえ新役員。顧問―恒松町紅、会長―小川

注湖、事務局長兼会計―三島淞丘、監事―川本晔

○木本朱夏常任理事は、十日町川柳研究社「しらゆき」7月号にエッセー「木の実を食べてから」を発表。

○よみうり文化センター堺川柳カルチャーが、10月6日からスタートする。講師

は岩佐ダン吉参与。体験会は9月15日（金）13時。

場所よみうり堺文化センターポータルセンタービル7階（南海電車堺駅西出口）。

問い合わせ先〓072-212

22-2030

▽計 報△

□岩屋美明氏（同人・吹田市）は7月2日中皮腫のため死亡。7月3日葬儀。82歳。（追悼文は次号に）

☆第10回「なんばなんなんタウン大阪井川柳コンテスト」作品募集要項。募集内容〓大阪弁を盛り込んだ日常生活の全般をテーマにした作品。応募方法〓官製ハガキの1枚につき川柳1

点。作品と住所・氏名・年齢・電話番号・職業を明記。1人何枚でも応募可。

応募先〓〒542-0075大阪市中央区難波千日前12-19なんなんタウン商店街振興組合

内 第10回「大阪井川柳コ

ンテスト」係。応募締切り〓10月1日（日）（当日消印有効）

▽訂正お詫び△

8月号〓表紙裏11段目、茴香の花賞―檸檬賞 101頁

中段17行目、定年バイザイ

↓定年バンザイ

特別常任理事会（参与以上出席）8月7日（月）出席者24名

①主幹・理事長の選任について、投票結果報告、経過報告

②意見交流―規約・規定・規則再検討

お知らせ

句箋をご入用の句会、川柳塔事務所宛お申し出下さい。約4センチ×25センチ大で約8千枚、1万枚で12000円（送料込）。

TEL・06-6629-6914

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 藤井寺	17日(日)午後2時15分締め切り 苦・介添え	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	17日(日)午後1時半締め切り のんびり・エキサイト・陶酔	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ねやがわ	17日(日) 正午から 抵抗・注意・持て余す・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 追う・人生・すぐに・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
堺川柳会	19日(火)午後1時から 失う・都会 「ひ・の・で(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前9時半から 根気・疑う・港・スランブ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	23日(土)午後6時から 茶碗・残暑・ライバル・駕籠	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市川柳 会	24日(日)午後1時から 岩・そろそろ・インク・「池」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	24日(日)午後1時より 怨念・カーナビ・隠し玉	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
南大阪 川柳会	25日(月)午後6時半締め切り 削る・そこそこ・産業・土壇場	住まい情報センター 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	25日(月)午後2時締め切り 案・投げる・限度	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	25日(月)午後7時半から ニュース・蟹・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
高槻川柳 サークル 卵の花	28日(木)午後1時半締め切り 無愛想・自負・あいつ・残る 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
川柳塔 わかやま	今月は、休会します。	〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 2 時締め切り 風・析る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城 北 川 柳 会	2 日(土)午後 1 時半締め切り 灰・あまい・ルール・自由吟	旭区 老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮駅 3 番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	2 日(土)午後 1 時から 感覚・続ける・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	2 日(土)午後 1 時から 推理・天・絶つ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	4 日(月)午後 1 時半から 鼻・チャイム・痛い	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 な ら	7 日(木)午後 1 時から もっぱら・核・不思議	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口徒歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
川 柳 塔 打 吹	9 日(土)午後 1 時から 屑・缶・洪い	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 塔 ま つ え	9 日(土)午後 2 時締め切り 退屈・虫・うっかり・よろめく	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
八尾市民 川 柳 会	10 日(日)午後 1 時から ハンサム・元気・抜く・雑詠	山本コミュニティセンター 3 F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
西宮北口 川 柳 会	11 日(月)午後 1 時から サイン・近い・夜・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	12 日(火)午後 1 時から バイト・貸す・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川 柳 同 好 会	12 日(火)午後 1 時から 橋・気分・どんどん	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
岸 和 田 川 柳 会	16 日(土)午後 1 時半締め切り 遊ぶ・今更・噂・押さえる	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東徒歩 3 分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川 柳 塔 みちのく	16 日(土)午後 4 時から 制限・重ねる・うろうろ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1 階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯

編集後記

☆路郎賞・川柳塔賞へのご応募、有り難うございました。8月12日にすでに決定し、10月号で発表のため鋭意準備を進めていますので、ご期待下さい。

☆第12回川柳塔まつりの事前投句の締切りが迫っています。多くの方々のご参加をお待ちしています。

☆スペインのピカソ美術館を訪れた時のこと。まだ学齢前らしい20人ほどの一団が、一枚の絵の前にちょこんと座って引率者の説明を聴いていたので驚いた。

☆日本ならその年齢の子供達を団体で、美術館に連れて行くだろうか。しかも解りにくいと言われていたピカソの絵を見に……

☆作家の渡辺淳一さんが子供の教育に関するエッセイで「知より情」と書いておられたのを読んで、ふとピカソ美術館での子供達の光景が甦った。

☆六年間の任期を満了して、本号で私は編集長を退くことになりました。平成12年10月号から引継いで月号発行できたのは、ひとえに同人・誌友の皆様のあたかい支えのお陰と、ただただ感謝あるのみです。

☆幸いスタッフはそのまま留任します。新編集長のもとに吹く新しい風をご期待下さい。これからは『川柳塔』をどうぞよろしくお願ひします。

(ふ)

出 会 い

平成十七年六月、故東野大八先生の「川柳の群像・大八文庫による川柳展」が先生の地元、岐阜で開催され「茶ばしら」の皆さんと出かけました。

大変盛況で、色々な資料や昔の川柳誌などを拝見しておりました。はるばる川柳塔から河内天笑主幹、板尾岳人理事長はじめ幹部の方々が来ておられるとのこと、

早速ご挨拶をしお話をすることが出来ました。

当時、川柳塔へ入会してまだ日も浅く、しかも離れたところから投句しているだけですから、本当に嬉しい偶然の出会いでした。

超多忙な先生だと思うのですが一緒に撮った写真を大きく伸ばして送って下さいました。

頑張って続けなさいよと言うことだと、心新たにした次第です。

(関本かつ子)

★ベランダから1Rの駅星田が見える。あの事故以来電車のスピードが気になり入ってくる電車、出発する電車をなんとなく見てしまう。凄いいスピードで入るのや、ゆっくり入ってくる電車で、「今のは急いではるな」と思ったり、「えらいゆっくりやなあ」と思っている。

★人にもまた同じで、見ていなくても足音でも分かる。

★仲のいい友人のことだが、いつも、けたたましい足音で階段を駆け下り、バス停へ行く。今も昔と変わりなく走っているらしい。

★歳をとっても心癖は変わらないものだ。私ももう死ぬかと思うほど駅まで急ぐ。こんな状態で電車に乗るものだから、急いだ電車が、ゆっくりきた電車が分かるうはずもない。

★いい歳をしてと自分でも思う。友人もそう思うとか。昔、叔母達が大人に見えたものだが、その叔母達の歳を遥かに越えているのに、なんともお粗末な自分に情けない思いをしている。

★こんな考え方をするのも川柳をやっているからではないかと思う。自分では気づかない事をいつぱい気づかせてくれる川柳は人生の師であり友である。

(恵)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(11月号)地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「シングル」 (9月15日締切)

11月号発表

松本 文子 選 — 共選 — 川上 大輪 選

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	— —	

○ ○

年 年

月から半年
月から一年

5000円
9800円

該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005

川柳塔社

(電話 06-6629-6914)

大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

振替 0098015133368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

11月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (8句)
河内天笑 選

水煙抄 (8句)
奥田みつ子 選

愛染帖 (3句)
新家完司 選

檸檬抄 (2句)
松川上大輪 共選

一路集 (3句)
「のこのこ」
「ぼろぼろ」「時計」
「大人」
「やっ」と

初歩教室
「柿」 (3句) 三宅保州 担当

「鼻」
「チャイム」
「痛い」
「痛」

錢山昌枝 選
左右田泰雄 選
有沢せつ子 選

12月号
檸檬抄
一路集
初歩教室

本社9月句会

とき 9月8日(金) 午後5時半開場・6時半締切り
—開催時間、締切り時間に御注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

おはなし
兼題 「あべこべ」
「昔」
「喜ぶ」
「ジंकス」
「漂う」
三宅保州 選
矢倉五月 選
山本義子 選
西内朋月 選
前たまつ 選
河内天笑 選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社10月句会は12回川柳塔まつりとして (10月8日) 開催します。
(表紙裏を参照して下さい。)

第25年度 夜市川柳募集

第4回「影」高田美代子 選
ハガキに3句 9月30日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋 (本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所 (県・市名) を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円 (送料76円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇六年(平成十八年)九月一日発行

発行人 河内天笑

編集人 西出楓

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六・六六二九・六九一四番

振替 〇〇九八〇・五・一三三六八番

鳥取県総合芸術文化祭

第30回 鳥取県川柳大会

とき 10月22日(日) 10時開場 12時45分開会

ところ ホール・ブスターとつとり JR山陰線「鳥取駅」下車・歩6分

30周年記念講演「言葉の落ち葉ひろい」

須崎 俊雄氏(鳥取文芸協会会長)

兼題と選者(各題2句・席題なし・出句締切11時45分)

「芝居」 奥田 みつ子 選

「情け」 長谷川 紫光 選

「泳ぐ」 金築 雨学 選

「袋」 小林 由多香 選

「耳」 門脇 かずお 選

「打つ」 竹信 照彦 選

事前投句(ジュニアのみ)「強い」小西 雄々 選

表彰 鳥取県知事賞ほか

会費 2,000円(作品集・昼食呈)

欠席投句 1,000円 9月20日締切、用紙自由、小為替

投句先(問い合わせ先)

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180

森山 盛桜方

第30回鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL 0857(82) 1491

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会・鳥取市他

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)